
高校戦争

波島祐一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校戦争

【コード】

N0275H

【作者名】

波島祐一

【あらすじ】

治安が急激に悪化した日本。『学生の非行防止法』に抗う学生組織・FDTと、FDTによる襲撃から高校を守るべく設立された学校防衛組織・SDFの抗争が激化した。両組織は衝撃弾・弱装弾の銃器を使用するため、重傷者や死者が出ることもある。それでも戦い続ける高校生たちには、守るべき信念があった。坂丘高校の1年生・緒方孝は、SDF隊員となってFDTとの戦闘に身を投じながらも、人として成長していく。

第一話：SDF

最初に気が付いたのは、鼻をつく硝煙の臭いだった。続いて身体
のあちこちに激痛が突き抜け、少年はゆっくりと両目を開いた。ま
ず目に飛び込んだのは、自分の両手にしっかりと握られている
MP5 - A5 サブマシンガン 短機関銃と、傷だらけになったボディーマーだっ
た。

少年は周囲を見回した。ひっくり返った机や椅子、散乱したガラ
ス片、無数の弾痕をつけた壁。見慣れた教室とは思えないほど荒廃
した教室の光景だった。

距離は遠いが、まだ複数の銃声が響いている。少年は立ち上がる
うとして、右の太腿を襲った激痛に、再び転倒した。かなり出血し
ていた。ガラス片で切ったか、銃創か。

みんなはどこだ。状況はどうなってる……！
すると、耳を塞がない骨伝導式イヤホンに通信が入った。

「……こちらアルファ・リーダー。誰か応……せよ」

戦闘で故障したのか、ノイズがひどい。少年はインカムを軽く叩
きながら、吹き込んだ。

「こちら緒方！ アルファ・リーダー聞こえるか！？」

「……こちらアル……ダー。……か応答……」

ノイズと銃声で聞き取れない。すると、階段を昇ってくる複数の
足音が聞こえた。

効率の悪い足音は、少年の仲間たちのものではない。少年は舌打
ちして、床を這いずり教室の入り口まで移動した。MP5の安全装
置を解除し、階段の方向へ向けて構える。黒い人影が見えた瞬間、

少年はトリガーを引いた。フルオートで銃口から吐き出された九ミリ衝撃弾が足に命中し、そいつは昏倒した。

倒れた仲間を引きずろうとして視界に入った手に照準をつけ、再びトリガーを引いたが、弾が出なかった。弾切れだ。少年は反射的に壁に身を隠す。弾倉マガジンを交換していると、反撃の銃弾が数センチ横を通過していった。

初弾を装填し、MP5を構えた瞬間、少年は視界に入った黒い物体に身体を硬直させていた。

ゴト、と重い音を立てて目前に転がったそれは、M67 フラグメントゲ 榴弾レネードだった。慌てて物陰に隠れようとしたが、足を負傷した少年にはその時間がなかった。

死ぬのか。この学校を守るのが任務なのに、それすら果たせずに最後の一瞬、イヤホンに自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。

『おがた
緒方！』

叫び声を上げる間もなく、少年は圧倒的な力の洗礼を浴びた。

数年前に始まった世界規模の不況は、回復の兆しを見せなかった。放浪者は増加し、凶悪犯罪、それも未成年による非行・暴動が増加した。政府は学生の非行を防止すべく、ある程度管理下におくために『学生の非行防止法』を制定したが、それに猛反発した大学生・高校生によるデモや暴動が余計に増える結果に終わった。

ついに、関東地方のある高校が、学生の非行防止法に反対するFDT (Freedom Defense Team) を名乗る在校生三十五名によって占拠されるという前代未聞の事件が起きた。説

得に向かった警察官三名が射殺され、しびれを切らした警察は 特殊^{S A}襲撃部隊^Tでこれを鎮圧。F D Tは大量の武器弾薬を所持しており、S A Tとの銃撃戦の結果、教師二名、生徒十一名の死者と多数の負傷者を出した。

この事件を皮切りに、F D Tに賛同する学生による占拠・暴動が全国の高校で発生。

もはや、警察の対処能力を超えていた。そのすぐ後、学生と学校施設を暴動から守るために『学校防衛隊法（通称S D F法）』が制定。同時に各高校ごとに、その高校の在校生で組織される学校防衛隊・S D F（School Defense Force）が設立された。

そして、学校を守ろうとするS D Fと、自由を守ろうとするF D Tの学生抗争は激化の一途を辿った。

「えー、そういうわけでこの直線の方程式一は、この方程式二と四十五度で交わるわけだ。……続いて第二問は、素直に公式を利用して、数値を代入すれば簡単だ。じゃあ解いてみて」

六月二十九日、午後一時三十分 五時限目、数学。緒方^{たかし} 孝は、教師に見えないよう俯^{うつむ}いて 欠伸^{あくび}をした。昼休み後、すなわち昼食後の五時限目というのは、最も眠くなる時間だ。孝は最後列の窓際の座席なので、教室をおおむね見渡せるが、すでに机にうづくまっているクラスメイトが数人見える。

この^{さかがあか}坂丘高校に入学して、二ヶ月と少しが経った。県内でも有数の進学校だが、不真面目な生徒や個性的な生徒も多いことが、孝にとって少し意外だった。中学の時は、進学校というのは真面目

な優等生ばかりだと思っていたからだ。だが実際に入学し、授業中に教室を見回してみれば、昼寝している生徒、机の影で携帯電話を弄っている生徒、ノートに落書きをしている生徒もごく僅かだがいる。

ここ数日、孝も睡眠不足だった。さつき眠気覚ましのコーヒーを飲んだが、授業開始からたった三十分でここまで瞼が重いとは。孝は軽いため息をつき、黒板に目を戻した。

「やっと終わったなあ、緒方」 授業終了を告げるチャイムが鳴った直後、クラスメイトの山崎雄二が話し掛けてきた。

「山崎、お前ケータイで何してたんだ？」

「ああ、ゲームだよ。野球の」

「……お前らしいな」

山崎は無類のスポーツ好きで、バスケット部に所属している。ちなみに中学も孝と同じで、互いのことはよく知っている。山崎の中学時代のアダ名は『怠ける天才』だった。勉強と運動が両方優れていながらも、根は完全な怠け者ゆえについた、本人曰く「嬉しくもない」アダ名らしい。

「次は古典か。あ、宿題やらねえと！ じゃまた後で」 山崎は足早に自分の机に戻ってゆく。

孝は机に頬杖をつき、外を眺めた。良い天気だ。山の木々が輝いている。

教室内の喧騒を意識から遠ざけ、うとうとすること数分。

「緒方くん」

「ん……？」

突然声を掛けられ、孝は室内に視線を戻した。すぐ横に、クラス会長の内田美菜うちだみなが立っていた。肩の辺りで切った髪が特徴的で、一般的な感覚では美人の部類に入るだろう。まだ性格はよく知らないが、話し方や物腰からして、大人しい優等生タイプらしいことは知っていた。

「緒方くんって、SDFなんだよね？」

「……制服で、一目瞭然なはずだけど」

「うん。そうだよね……」

SDF隊員は全員、専用の制服を着用することが義務づけられている。基本は白のカッターシャツに紺のスラックスと普通だが、襟オトリの階級章、左胸のSDF章、さらに腰のホルスターに収まった自動拳銃マチックが、他の生徒との明確な相違を印象づけている。孝が不思議に思ったのは、それをわざわざ聞いてくるのがなぜか、ということだった。

「えっと、その、緒方くんは戦闘とか怖くないの？」 彼女は真顔で訊いてきた。

「そりゃまあ……多少は怖いけど。でも、どうせ撃ち合っるのは衝撃弾だし、よほどのことが無ければ死にもしない」

「でも……」

「どうして内田がそんなこと知りたいんだ？」

「うーん」 美菜は窓に視線を向けて唸った。「……特に理由はないけど。ちよっと気になったの」

そこで、授業開始のチャイムが鳴った。

「じゃあ、また」 そう言うと、美菜は自分の席に歩いていった。

……なんだっただらう、一体。

放課後。ほとんどの生徒は各々の所属する部活動に向かう。だがグラウンドには、部活動以外で集合している生徒たちがいた。オリブドラブ色の戦闘服と半長靴タクティカルブーツを着用した生徒たちは、全員、SDFの隊員だった。学校が襲撃される状況に備えるSDFと違って、普段の任務は学校の警備と訓練がほとんどだ。SDF隊員には国から月給が支払われる。危険な任務の場合や、負傷したりすればさらに手当がつく。不況が続く昨今、家計を助けるためにSDFに入る生徒は少なくない。しかもその額が一般的なバイトよりも高額で、毎年SDF入隊試験の倍率が高くなっている一因なのだそうだ。

坂丘高校の場合、七十五名いるSDF隊員を三つの小隊に分け、訓練及び警備のローテーションを組んでいる。

孝は、坂丘高校SDF第二小隊に所属している。階級は一等学士。

今、グラウンドに集合しているのは第二小隊の十九名だった。

点呼が完了し、三年生で小隊長の齊木サキキ洋介ヨウスケ三等学尉が指示を出す。「よし、グラウンド十周。かかれ！」

十九名が一斉に走り出す。一周四百メートルのランニングコースが十周で、合計四キロメートルの持久走だ。敵対組織であるFDTとの戦闘には、基礎体力は欠かせない。SDFは訓練が厳しいことでも有名で、少なくともどの運動部よりもハードだ。

持久走が終わると、腕立て伏せと上体起こしを行った。この回数

がかなりのもので、終わった頃にはかなり疲労が溜まる。

それが終わると、射撃訓練に入った。一度、校舎に隣接しているSDF棟に行き、武器庫で銃と衝撃弾が装填されたマガジンを受け取った。

銃は、SDFの メインウェポン 主火器であるMP5-A5サブマシンガンで、夜間の巡回警備のためにフラッシュライトが装着されている。

十九名は射撃場に移動していた。射撃場は、グラウンドの横に設置されており、運動部の部室や競技場に隣接している。ライフル射撃場さながらのシューティングレンジで、標的として鉄製プレートがぶら下がっており、命中するとカキーンと心地よい音が鳴る。同時に射撃できるのは五名。孝は射撃位置に立った。

「マガジン装填」 斉木が指示する。

孝はMP5にマガジンを装着した。

「初弾装填」

コッキングレバーを引き、初弾を チャンバー 薬室に送る。

「構え」

ストック 銃床のバットプレートを肩に当て、アイアンサイトを覗く。二十メートル先のターゲットプレートに照準をつけた。

「て射つ！」

親指でセレクターレバーを セミオート 単発に合わせ、トリガーを引いた。乾いた発砲音と共に肩に リコイルショック 反動が伝わり、自然に還るようセルロ

ースで作られた カートリッジ 空薬莖が宙を舞う。

孝は続けてセミオートで九発撃ち、セレクターを フルオート 連射に入れて再びトリガーを引いた。

連続した発砲音が響き、リコイルで銃身が跳ね上がる。

セミオートではそこそこ命中するようになったが、フルオートではほとんど当たらない。これが上級者になると、フルオートでも弾着を揃えられるらしい。反動の少ない衝撃弾ならではの芸当だが、数回トリガーを引くと、弾切れになった。孝はマガジンを抜き、チャンバーの中を確認して次の訓練生と交代した。

基本的に、一回の訓練で撃つのは一マガジンだけ。射撃訓練の後にはMP5の簡易メンテナンスを行い、その日の訓練は終了した。

SDF棟で制服に着替え、学校から出たのは午後七時半だった。この時間になると部活も終わり、ほとんどの生徒は帰路についている。

校門を出て、孝はひとり暮らしをしているマンションへ向かう。歩いて十分ほどの近場だ。途中で夕食を買ったためにコンビニに入ると、山崎がいた。

「よ、山崎」

「緒方か。晚メシ買いに来たの？」

「ああ。おまえは？」

「部活で腹減っちゃって。塾行くから、間食を調達しに来たんだ」

山崎は手にポテトチップとコーラを持っていた。

孝は陳列された弁当を眺めた。一通り見てから、コロッケ弁当を

手に取る。レジで無愛想な中年女性に代金を払い、コンビニから出た。

「じゃあな。緒方」

「ああ。また明日」 山崎は学校近くの塾の方に歩いていった。

栄養偏ってそうだな、あいつ。軽く心配してから、孝は家路を歩き出した。

マンションに帰ると、すぐシャワーを浴びた。

その後、コンビニで買ったコロッケ弁当を食べ、宿題をしてから、ベッドに横たわった。日々の訓練と勉強で疲れているのか、高校生になってからはすぐ寝つくことができるようになった。

とはいえ、SDFの警備は二十四時間体制である。夜間警備といって、当直のSDF隊員十五名は夜通し学校に待機し、校舎内の巡回と仮眠のローテーションをとるになっている。基本的にSDF隊員は週に二日、夜間警備のローテーションが回ってくる。夜間警備の日は睡眠が三時間しか取れない。

だから、自宅のベッドで眠れる日はほとんど熟睡する。

今日も例外ではなく、孝は数分で眠りの深淵しんえんに落ちていた。

第二話：クラスメイト

孝はいつも通り、マンションの自室を出た。時間は定刻で、七時四十分。住んでいる六〇二号室は番号通りの六階にあるため、孝はエレベーターで一階に降りた。エントランスで、住人である初老の男性に会った。

「おはようございます」

孝が言っていると、老人は孝の制服に付いた階級章を見て、一瞬怪訝な顔つきになると、「……おはよう」と石でも放るように言い、エレベーターに乗っていった。

なんだあれ。不快に思いつつ、エントランスから出る。

SDFが創設されて久しいが、その存在根拠である学校防衛隊法が制定されたときには相当な反論もあったようで、未だにSDFを毛嫌いする社会人もいる。実際、このマンションの住人でも、孝のSDF階級章を見て何の反応も示さない人もいれば、大変ですねぇ、と気遣う人、さっきの老人のように態度を悪くする人もいる。

孝からすれば複雑な気分だが、こればかりは仕方なかった。どだい、自分がどうこうしたところで、何も変わらないのだから。孝は自分にそう言い聞かせていた。

高校に向かって通りを歩き出す。この時間帯は通勤・通学ラッシュだ。横を通り過ぎていくバスには学生やサラリーマンがぎっしり詰め込まれている。マンションが学校の近くなのは幸運だな、とつくづく思う。孝のクラスメイトには、バスが混むのが嫌だという理由だけで、家から一時間かけて自転車通学をしている生徒もいるほどだ。

徒然つれづれに考えながら歩道を歩いていると、背後で自転車のベルが鳴った。孝は振り返った。同時に「どいてー！」と叫びながら突進

してくる自転車が視界に入り、孝は反射的に自転車をかわした。ブレーキをかけた自転車が孝の目前で急停車。乗っていたのは、孝と同じ坂丘高校の制服を着た女子生徒だった。どこかで見たようなポニーテールがこちらを振り返り、怒鳴る。「ちよつとあんた、危ないでしょ！」

その女子生徒は、孝のクラスメイトだった。名前は確か……宗像むなかた杏子あんず。

「危ないのはそっちだろうが！ 歩道を爆走する奴があるか！」

「……悪かったわね」 冷静になったのか、杏子はバツの悪そうな表情になった。それから孝を見て、じつと動かなくなる。「あなた……あたしのクラスメイトだね？」

「……そうだよ」 孝はぶっきらぼうに答えた。

「あ、思い出した！ 名前は……」 杏子は拳を口に当てて間をあげ、言った。「……何だっけ？」

危うく、孝はコケそうになった。「あのな……」

「ごめんごめん、冗談だって。緒方孝でしょ？」

初めて話すのに呼び捨てか。というより、その冗談は何なんだ……。孝は心の中で毒づいた。文句のひとつも言っただろうとしたが、杏子は「じゃあ、またあとでね」と言うと、即座に自転車を漕いで行った。

なんてマイペースな。孝は敗北感にイライラしながら、校門を通り、SDF棟に向かった。入り口で警備にあたるSDF隊員にIDカードを見せ、武器庫に向かう。武器庫窓口の隊員に「SDF第二小隊、緒方孝一等学士。IDは二〇〇九・七六五」と告げると、隊員がホルスターに収まったベレッタM92F自動拳銃と、三段階伸縮式ポリスバトンの特殊警棒を持ってきた。孝は隊員に礼を言い、ホルスター

をベルトに通す。校舎に向かおうとしたとき、一人の生徒に出くわした。

「緒方、おはよう」 孝のクラスメイトであり、SDF第三小隊の友井宏樹ともいひろきだった。

「おはよう、友井」

友井の階級は二等学士で、一等学士の孝より一階級下だった。SDF隊員の階級は、最初の訓練期間中は全員が三等学士で、訓練期間終了と同時に二等学士、特に成績優秀と判断された者は一等学士に任命される。ちなみにSDFの階級システムは、基本的に自衛隊のそれを踏襲している。違うのは、自衛隊の陸海空にあたる部分が学校を示す”学”になっている点だ。装備品も、何かと自衛隊の払い下げが多い。

友井はこれから銃を受け取りに行くらしいので、孝はそのまま教室に向かった。

七時五十九分。孝は教室に入ったが、すでに登校していたのは五人のみだった。いつもながら、うちのクラスメイトは登校が遅い。席に座り、授業の予習を始めようとしたとき、「緒方！」とさつき聞いたばかりの声こゝろが耳朶みみを打った。内心、舌打ちして顔をノートから上げると、すぐ横に杏子が立っていた。

「何だよ、宗像？」

「その拳銃、ちょっと見せてくれない？」 杏子は孝のM92Fを指差した。

「ダメ」 即座に返し、ノートに目を戻す。杏子は少し不機嫌そうな声で「いいでしょ。ちょっとくらい」と言う。

「ダメと言ったらダメだ」

「じゃあ持つだけにするから。お願い！」

持つだけ？ 撃つ気だったのかこいつ？ 孝は戦慄を覚えた。

「持つだけ、な」 今まで男子生徒に拳銃を見せてくれと頼まれたことは数回あったが、女子生徒から頼まれたのは初めてだった。

もし拳銃をSDF隊員以外の生徒に貸して、万一のことがあれば、SDF免職はもちろん、停学や退学もあり得る。だから、孝はM92Fをホルスターから抜くと、マガジンを外し、念のためチャンバーに弾が入っていないか確認した上で、杏子に渡した。M92Fは負い紐で孝のベルトと繋がっているため、盗難や紛失の心配は無い。

「わあ、やっぱり重いな」 杏子はM92Fをじろじろと眺め、両手でグリップを握る。そしてニヤリと笑い、M92Fを近くの、読書中の男子生徒に向けて構えた。「へい！」

眼鏡をかけた神経質そうな男子生徒は、向けられた銃口に気づくと「うぎゃあ!？」と奇声を上げて大混乱し、椅子ごと後方に倒れた。

その様子を見てケラケラ笑っていた杏子（実は、孝も内心では吹き出していたが）から、孝はM92Fをひったくる。「遊ぶな」

「……ケチ」 プイと顔を背けると、杏子は教室から出て行った。

つたく。孝はM92Fにマガジンを突っ込み、ホルスターに戻した。改めてノートに向き直り、漢文の書き下し文を手早く写していく。

五分後。

「よ、緒方」 山崎が席に座った。孝の前の座席だ。

「おはよう、山崎」

「前から聞くことと思ってたんだけど、その拳銃なんて名前なの？」

朝っぱらから銃の質問か。というか、杏子に続いてまた拳銃の話か。

「M92F。イタリアのベレッタ社製で、弾薬は九ミリ・パラベラム」

「撃ちやすい？」

「設計はもう古いな。遊底スライドが長くてフロントヘビー。でも扱いやすい。米軍も制式採用してる」

「へえ。SSTも同じ銃使ってるのか？」

SST。学校特殊部隊 (School Special Team) の通称で、SDFから選りすぐられた優秀な隊員のみで構成されたエリート集団だ。当然その人数は少なく、この坂丘高校には十人しかない。訓練はより高度かつ専門的な内容で、射撃、格闘、警棒術、逮捕術、情報操作、偵察などすべての分野で、通常のSDF隊員とは比較にならないレベルだと言われている。SSTはアルファ・チームとブラボー・チームに分けられ、相互補完しつつ任務を遂行する。

「いや。SSTは弱装弾の使用が認められてるんだ。銃もサブマシンガンと拳銃だけの普通部隊と違って、自動小銃アサルトライフルから狙撃銃スナイパーライフルまで装備してるし」

「ほんとすごいらしいな、SSTの隊員って。なんでも生徒会並みに優遇されるとか」

実際、制服にSST徽章を付けている生徒はそれなり以上に憧憬

の対象となるらしい。まあ、ほとんどが三年生や二年生だけだが。一年生でSSTに配属されるのは稀だと聞く。

「緒方も一応、SSTに配属される可能性はあるんだろ？」

「まさか。おれはそこまで優秀じゃないよ」

SSTに推薦されたとしても、地獄のような入隊試験が待ち構えているらしい。

チャイムが鳴り、授業がいつも通りに始まった。

昼休み。孝は教室で弁当を食べた。今朝は時間があつたため、久しぶりに弁当を作って持参したのだった。食べ終え、授業の復習でもしよつと問題集を開いたが、急に眠気が襲ってきた。

時計を見る。十二時三十四分。五時限目開始までまだ時間がある。ちよつと寝るくらい大丈夫か……。

机にうづくまり、孝が眠りかけたとき、誰かの気配に気づいた。すぐ横に誰かが立っている。その数、二人。孝は寝たふりで様子を伺った。

「やつぱりまずいよ、やめといたほうが……」「いいから、ちよつとくらい平気だって」 そんな小声のやり取りで、孝は嫌な予感を感じた。

案の定、誰かの手が腰のホルスターのフラップを外した。その手がゆつくりと拳銃の銃把グリップを握り、ホルスターから抜こうとした刹那せつな、孝はその手首を掴んだ。

「きゃっ!?!」

「……何の真似だ。宗像杏子」

驚いたらしく、杏子の手はM92Fのグリップを放した。M92Fがストーンとホルスターに戻る。孝は杏子の左手首を掴んだまま、その顔を軽く睨み付けた。

「お、緒方くん！ これは、その、悪気があった訳じゃなくて……」
杏子の横に立つ美菜が慌てて言った。

「騙したわね……。緒方」 そう言った杏子の挑発的な態度に、孝は立ち上がった。

「いい加減にしないと、SDF業務執行妨害で逮捕するぞ」

SDF隊員は学校の敷地内に限って、ある程度の警察権が認められている。

「え、なに。あたしを殴って拘束して牢屋にでもぶち込もうつての？ やれるもんならやってみなさいよ！」

「誰も殴るとは言っていない」

「揚げ足取るな！」 杏子はいきなり孝のネクタイを引っ張った。

あまりに突然で孝は対応できなかった。首が急激に締め付けられる。
「ぐっ！ ……おい、い、息が……！」

息ができない！ 殺す気か？ 本気でおれを殺そうとしてるのか
こいつは！

「杏子ちゃん！」 美菜が慌てて杏子を引っ張り、孝はようやく死の恐怖から開放された。身体に再び酸素が供給されていく。

「大丈夫？ 緒方くん」 美菜が心配そうな目でこちらを見た。孝

は数回深呼吸してから、「ああ、なんとか」と返した。

「ごめん、ちょっとやり過ぎた」 杏子が申し訳なさそうな顔で立っていた。

「ああ、なんか意識が……」 孝は足をふらつかせ、そのまま床に崩れ落ちた。

「緒方！」 「緒方くん！」 二人が孝を揺さぶるが、彼はぴくりともしない。「やばい……！」 美菜、はやく保健室に運ぶわよ」「うん！」

クラスメイトたちが、何かと集まってくる。杏子と美菜が孝を持ち上げようとしたとき、

「……たく」

孝はひよつこりと立ち上がった。

「は？」 間抜けな声を上げたのは杏子。美菜は呆然としている。

「演技だよ、演技」

「あ、あんたって人は……！」

勝ち誇った笑みを浮かべ、孝は教室を後にした。

放課後。今日はSDFの座学がある。SDFの座学内容は、戦術行動、銃器、法律、逮捕術など多岐に渡るが、今日は銃器についての講義だった。ちなみに講師は、SST隊員の渡瀬という二年生だった。

「SDFが制式採用するMP5サブマシンガンは、この図のように発砲までボルトが閉鎖した状態となる、クローズドボルト方式を採用している。この方式のメリットが分かるか？　じゃあ黒木二士」

「はい。銃本体のブレが少なく、優れた命中精度を発揮する点です」
「では、そのデメリットは？」

「待機状態でエジェクションポートが閉じた状態になるため、発砲時の熱がチャンバーにこもり、暴発の可能性が高くなります」

「よし、座れ。MP5には、いま言ってくれたような特徴があるわけだが、デメリットとして、構造が複雑なクローズドボルトは発砲後のメンテナンスが非常に重要となってくる。SDFで採用しているMP5は無論、ヘッケラーアンドコックH&KのMP5を基本としている訳だが、ライセンス生産を行うにあたり、担当の峰和工業ほしわで独自に改良を加えている。これは実弾を撃てないようにするよう、銃本体の強度を落とし、完全に衝撃弾のみに対応したMP5としているのに加え、発射機構、とくにボルト・チャンバーの構造を簡略化することにより、優れた整備性を獲得したことだ」

延々と銃器についての説明が行われるわけだが、戦闘時には、銃は身を守る重要な道具であるだけに、手を抜くわけにはいかなかった。

続いて法律、逮捕術の講義があり、全て終わったのが午後七時。夜間警備以外の隊員はそこで解散となったが、孝はなぜか、小隊長の斉木に残るよう言われていた。

「斉木さん、用件は何でしょうか？」

「いや、おれじゃなくて、倉田一佐が話があるらしいんだ」　斉木は柔らかな笑みを浮かべていた。

倉田昇造くらたしやうぞう一等学佐は、この高校の体育教師であり、坂丘高校SD

F司令でもある。普通部隊とSSTの両方を統括している。

「倉田一佐が、おれにですか」 普段は倉田先生と呼ぶが、SDFの勤務中は階級をつける。

「ああ。だから司令室に行ってくれ。たぶんもっているだろうから」「了解」

孝は斉木に敬礼し、SDF棟に向かった。二階の最も奥にある司令室をノックする。「緒方一士です」

「入れ」 野太い声が返ってきた。

孝はドアを開けた。「失礼します」

デスクに座った倉田が立ち上がる。校内では、厳しいことで有名な教師だった。

「そこに座れ」

「はい」

皮製のソファに腰掛ける。倉田はA4判の書類を持って、孝の向かいに座った。

「突然呼び出してすまん。……君の訓練期間中の成績を見せてもらったが、どれも優秀だった。特に射撃と格闘は飛び抜けているな」

「ありがとうございます」 褒められて、孝は少し頭が混乱した。「なにか習っていたのかね？」

「……中学のときに、空手を少し」

「ふむ。……結論から言おうか。緒方、SSTに入隊する気はあるか」

「は？」 一瞬、何を言われたのか分からなかった。

「君には、SST隊員となるべき条件が揃っていると私は思っている。無論、入隊試験は受けてもらうが。どうだ？」

「え、あの……受けてもいいなら、受けたいです」 頭が混乱を極めていた。

「よし。緒方一士、来月下旬のSST入隊試験への参加を命ずる。

詳細は追って連絡する」 倉田は、手元の書類に捺印した。

「え、あ、はい」 舌がうまく回らない。

「下がってよし」

司令室から出ると、友井がいた。「よお」

「SST!？」 司令室でのことを話すと、友井は素っ頓狂な声を上げた。

「おれも驚いたよ。今でも実感が湧かない」

「それにしてもすごいな。おめでとう」

「待て、まだ入隊試験があるんだぞ？ 地獄と揶揄される」

「まあ、そうだけど……。お前なら大丈夫だ、たぶんな」 友井は孝の肩に手を乗せた。

「にしても、迫力あるなあ、倉田一佐」 孝は苦笑いしながら言った。

「まったく、呼び出されるって聞いて何かと思ったけど、心配して損したじゃないか」

「悪いな。……そっちは今日、夜間警備だっけ？」

「ああ。これから地獄の肝試しの始まりだ」 そう言って、友井は笑った。

「じゃあ頑張れよ、夜間警備」

「ああ。お疲れ」

友井と別れ、孝はSDF棟を出た。もう午後八時、辺りは真っ暗だ。部活で残っている生徒もいない。

さっさと帰って寝よう。校門に行くと、一人の女子生徒が立っていた。それは、杏子だった。

「緒方、昼休みのこと覚えてるでしょうね？」

孝の横で、自転車を押しながら歩く杏子が言った。殺気を帯びた声音に、孝は体温が下がったような気がした。

「忘れた」

杏子は諦めたような顔をして、両手を振った。「あーもう、いいわよ」

あっさり諦めたのが意外だったので、孝は杏子の顔を見た。

「な、なによ」見つめられ、軽い動揺を見せる杏子。

「別に。何か企んでるのかと思ったただけだ」

「はあ？ いったいあたしがどんな人間だと思ってるのよ」

不機嫌そうな表情になった杏子が孝の襟首を掴もうとしてきたので、孝はひょいと避けた。

「自分が一番分かってるだろ？」

「それは……そう、かもね」

素直に納得する杏子。これまた意外だった。

案外、普通の少女っぽい面もあるらしい。孝は驚いていた。

「あたし、なんかイタズラとか始めたら止まなくなっちゃうから……。気をつけるけど」

「別にいいんじゃないか。面白いし」

「面白い？」

「ああ。天然っていうか、ボケ役っていうか。おれとおまえのコンビなら、確実におまえがボケでおれがツッコミだよな」 笑い混じりに言うと、いきなり額を指で弾かれた。「いたっ……！」

「バーカ！」 そう言い放ち、杏子は自転車に跨って行ってしまった。

最後に一瞬見えた杏子の顔が、少し微笑んでいたように見えたのは気のせいだろうか。

孝は、マンションへとゆっくり歩いた。夜空に輝く無数の星が、昨日より少しだけ明るく見える気がする。しかし、頬に当たる夜風は冷たかった。

第三話：ある週末

午前六時。坂丘高校のグラウンドに、第二小隊のSDF隊員十九名が集合していた。全員、OD色の戦闘服の上からボディアーマー、二丁・エルボーパッド膝・肘当てを装着し、フリッツ型ヘルメットにインカム、レッグホルスターにM92F、手にはMP5サブマシンガンという典型的な近接戦闘装備だった。一見、警察の銃器対策部隊やSATに見えるが、ボディアーマーの背中と胸に『SDF』とゴシック体で表記されているため、一般人に見間違えられる可能性はあまりない。

今日は、校舎を用いた室内戦闘訓練だった。銃とボディアーマー、ヘルメットには専用の訓練装置バトラーが装着され、銃からのレーザー照射が当たるとブザーが鳴り、死亡。バトラーは陸上自衛隊で使用されている物を基にして、より大量生産できるようにした廉価品だった。全国のSDFで使用されている。

小隊对小隊で戦い、先に全員を倒した方の勝ちという本格的かつ分かりやすい訓練だ。ちなみに、審判役はSSTの隊員が務める。孝たち一年生には、初めての訓練方式だった。今日は土曜日で、本来なら部活の生徒がいるが、こういう訓練がある日は午後三時まで登校禁止となっている。

「集合」 斉木が指示し、小隊全員が折りたたみテーブルに置かれた校舎の見取り図を取り囲むように集まる。「説明する。すでに校舎内のあちこちに、第一小隊の隊員たちが潜んでる。おれたちは校舎とSDF棟の連絡通路から進入し、このルートで索敵クリアリングを実施する」

斉木が見取り図の上をペンでなぞる。

「ただし、特別教室やトイレ、図書室、その他の教室以外の場所…つまりこの斜線の部分は使用禁止だ。あと、バトラーのレーザー

は弾切れの心配がないが、連射ができない。そのことを頭に入れて行動しろ。クリアリングの際は、前の隊員のハンドサインを見落とすな。あとはさっきの状況説明通りだ。……質問は？」

全員、無言だった。

「よし」 齊木はインカムのスイッチを入れた。「こちらレッド・チーム。準備よし」

レッド・チームとは突入する側のコードネーム、つまり孝たち第二小隊のことで、待ち構える第一小隊はブルー・チームである。

『こちら訓練本部。これより訓練を開始する』

第二小隊の面々はゴーグルをかけた。齊木が力強く号令をかける。「出動！」

四、五人ずつ固まって前進するスタックの隊形をとり、MP5を構えつつ校舎へ走る。当然、窓から銃撃される可能性もあるわけで、隊員は各自の死角を補いつつMP5を構える。

校舎の出入り口に着いた。

齊木がハンドサインで突入を指示する。

先頭の隊員がドアを開け、一気に十人ほどが校舎に入った。孝や齊木を含む残りは突入路の確保を待つ。

『二人制圧。クリア』 最初に突入した岡田清二おかだ せいじ二等学曹が告げた。「よし。行くぞ」 齊木の声で、残りの九人も校舎に突入した。通路に二人の隊員が悔しそうに座っている。《死亡》した第一小隊の隊員だ。最初に突入した隊員たちはすでに二階に上がっていて、姿が見えない。上からもブザーの音が響き始めた。

『二階廊下で接敵、交戦中！』

『二階は一班に任せろ！ 三階は三階に向かえ』

『了解』
ラジャー

『一階、クリアリング中……！』

『二班、K I A一名』

K I AはKilled In Action、戦闘中に殺されたという意だが、実戦では滅多にない。むしろ頻繁にあるのは、I I A (Injured In Action)、戦闘中の負傷である。この報告はバトラーのブザーが鳴った本人、つまり”死んだ”隊員が自分で行うので、訓練だけの言い回しだった。

孝の所属する四班は、一階生徒玄関のクリアリングに向かった。孝は班長である学曹長の指示に従い、ロッカーの陰でM P 5を構える。

ビー、と思ったより大きい音が響き、バトラーが振動した。

「あ………！」

振り向くと背後のベンチの奥で、第一小隊の隊員がこちらにM P 5の銃口を向けているのが見えた。あっけなかった。

死んだら、報告。「四班、K I A一名」 そうマイクに吹き込み、その場にうつ伏せになった。

すでに戦場は二階や三階に移ったようだ。一階は静まり返ってしまった。

『三班、さらにK I A一名。これで全滅です』

『二班、人手不足だ！ 誰か回してくれ』

『四班、敵の背後に回りこむ！』

イヤホンだけは緊迫した声が流れ続けた。

『二階は制圧完了！ 三階へ向かう』 斉木の声だった。

『一班K I A一名』

『二班、K I A一名』

『四班K I A一名！』

『二班、全滅です』

『四班、教室を二から四まで制圧！ 一班はどうなってる！』

『一班は自分だけです！ 交戦中！ …… K I A。全滅』

「こちらは残り二名だけ。第一小隊は何人残っているのだろう。」

『四班、K I A二名。全滅……』

レッド・リーダーよりイーグル・リーダー。状況終了。状況、レッド・チーム全滅』

「……負けてしまったようだ。」

すると、倉田の音がイヤホンから流れた。

『イーグル・リーダーより全隊員。コード四。突入部隊は全滅した』

その後、第二小隊の隊員たちは第一小隊と第三小隊の訓練を見学し、訓練後の片付けをし、午後三時前に解散となった。しかし、今日は孝は夜間警備の当直だったため、他の当直隊員たちと学校に残った。S D F棟で待機だ。

「そつえば昼メシまだだったな。食堂行くヤツいるか？」

警備当直のS D F隊員たちが集うS D F待機室で、二年の岡田が言った。身長が百八十センチメートルで、肩幅もそれなりにある大柄な隊員である。中学時代は柔道部で大活躍していたとか。

「岡田さん、今日は土曜で食堂閉まっていますよ」 誰かの適確なツ

ッコミが飛ぶ。

「しまった。今から巡回で外出できないんだよなあ」

警備担当のSDF隊員は待機するだけではなく、学校敷地内の巡回もしなければならない。

孝は昼食を準備していなかった。孝の巡回までは一時間以上ある。

「あ、おれ今からコンビニ行きますけど。なんか買って来ましょうか？」

すると、岡田は嬉しそうな表情になって、孝の肩をぼんぼん叩いた。

「本当か、サンキュー緒方！ じゃあウイダーのプロテインを一本頼む。釣りはいいぞ」そう言って、岡田は孝に500円硬貨を渡して、巡回に出て行った。

「じゃあ、コンビニ行って来ます」

「うーす」「行ってらっしゃい」

孝はSDF棟を出て、校門に向かった。午後三時半。

グラウンドでは野球部やサッカー部の掛け声がひっきりなしに聞こえ、校舎からは吹奏楽部の楽器の音が鳴っている。部活ではどの生徒も、目標に向かい、努力している。孝はそれが、うらやましく感じられる時があった。おれは一生に一度の高校生活の時間の多くを、こんな戦闘と訓練に費やして後悔しないか、と。もちろん、この学校とその生徒を守ることに意義があるのは分かる。だが、孝の中には腑に落ちない何かがあった。それが何か、今は分からない。

コンビニで自分のざるそばと岡田のウイダーを買った孝は、SDF棟に向かうグラウンド脇のランニングコースを歩いていた。すると、前方から一人の生徒が走ってきた。下はOD色の作業着に半長

靴、上は白いTシャツ。SDFの隊員だった。自主トレか？ など
と思つて見ていると、その隊員が女子であることに気づいた。女子
生徒のSDF隊員はこの学校には、確か五人しかいないはずだ。全
体の五、六パーセントくらいだ。

すれ違ふとき、その女子と目が合った。見覚えのある顔だった。
確か、二人いる一年生の女子SDF隊員の一人だ。クラスは違ふの
で、名前は知らない。

ただでさえSDF隊員は訓練で走り込むのに、自主トレしてまで
走るのか。孝はちよつと疑問を持った。

午後三時五十六分。孝はSDF待機室に戻り、巡回の担当が書き
出されたホワイトボードを見た。四時三十分からの巡回の場所には
《巡回ルートA》とマジックで書かれ、その横に《緒方》と《進藤
》のネームプレートが張つてある。巡回は、二人一組のバディシス
テムで行われる。バディは小隊関係なく組み合わせられ、毎回変わる。
進藤……知らない名前だ。

時間があるので、孝はざるそばを食べることにした。いまSDF
待機室にいるのは、孝と、将棋に興じている隊員が二人、テレビを
見ているのと読書中の隊員が一人ずつ、合計五人のみだ。待機室は、
二十人の隊員が一斉にフリーフィンクできる広さと座席がある。待
機中にくつろげるよう、テレビ、書籍、簡易ゲームなどが置いてあ
った。飲み物の自動販売機もある。奥の方にあるドアは、武器庫に
つながっている。

待機室の隣にはもうひとつ似たような部屋がある。SST室だ。
SST隊員のみが入室を許される部屋で、SSTの銃器などはそち
らに分けて管理されている。

ざるそばを食べ終えた孝は、更衣室に行き、制服から戦闘服に着
替え、プロテクターを装着した。基本的に、巡回は戦闘時と同じ装
備で行うことになっている。サブマシンガンも携行する。

更衣室から出ると、ちょうど岡田と堺士長さかいが巡回から戻ってきたところだった。

「お疲れ様です。これ、頼まれてたやつです」 孝はウイダーを渡した。

「おお、サンキューな。緒方は今から巡回か」

「ええ」

「外はクソ暑いぞ。水分補給しといた方がいいぜ」

「分かりました」

三十分後、孝の巡回は終了した。バディは二年の進藤正平しんどうという第一小隊の一等学曹だった。巡回中に話して知ったが、午前中の戦闘訓練で孝を倒したのは進藤だったらしい。ちなみに第一小隊は、その後の対第三小隊戦でも勝利している。

孝はSDF待機室に戻ったが、次の巡回まですることがないので図書室で自習した。そしてまた巡回……。そういった感じで、警備当直の午後は過ぎていった。

日が暮れてからも、当然ローテーションは止まることなく回ってくる。

そして、翌朝五時。この日の当直隊員たちが集合し、巡回警備を引き継いだ。

「あー、眠い……」 孝は咳きながら、SDF棟を後にした。合計三時間の仮眠をとったと言っても、それは分割された睡眠なので、あまり寝た気がしなかった。

部屋に帰ってから、もうひと眠りするか……。

孝は、ケータイの着信音で目を覚ました。ベッドから起き上がり、画面表示も見ずに通話ボタンを押す。「もしもし」

『緒方、時間あるか?』 山崎の声だ。

「何だよ、朝っぱらから……」

『朝? なに言ってるんだよ。寝ぼけてんのか? 時計見てみな』

孝は目を擦りながら壁掛け時計を見た。まだ午前八時くらいだろうと思っていたら、午後一時だった。

「もう昼……!」

『当たり前だ。……で本題だが、駅前で遊ぼうぜ』

「……分かったよ。場所は?」

『じゃあ駅の西口に三十分後』

「了解。じゃあな」

駅までは、歩いて十五分。孝は顔を洗い、服を着替え、一時二十三分にマンションを出た。

西口には、すでに山崎がいた。「来たな、緒方」

「……で、どこに行くんだ?」

「そうだな。とりあえずボーリングでも行こう。この前のリベンジだ」

一カ月ほど前、ボーリングで山崎に圧勝してしまっていた。

ボーリング場の受付に行くと、日曜というだけあって、混雑していた。突然、山崎が「ん?」と目を細めた。

「どうした？」

「あ、あれって……」

山崎は、すでに受付に並んでいる二人組を指差した。ポニーテールと、肩までの髪。杏子と美菜だった。

「あ、緒方くん」 こちらに気づいた美菜が言った。杏子もこちらを振り返り、「……緒方はともかく、なんであなたがここにいるのよ」 とため息混じりに呟いた。

「おれが緒方とボーリングに来ることがそんなに不自然なことかよ!?」 と山崎。

「噂は聞いたわよ。山崎、前にボーリングで緒方にコテンパンに負けたんですって？」 ニヤニヤしながら言う杏子。

そんな話題性のない噂話があるか。さしずめ盗み聴きだな。孝は呆れて、ため息をつく。

「お、緒方が強すぎたんだよ！ 仕方ねえだろ！」 憤る山崎。

その返事はカッコ悪いぞ……。それにおれ、強いつてほどじゃないし。ボーリング。

「この二人、なんでこんなに仲悪いのかな？」 と美菜。

「さあ」と孝は肩をすくめる。

山崎は続ける。「ま、おれに言わせりゃ、おまえなんか敵じゃねえけど」

今度は杏子が頭に血が昇ってきたようだ。

「……口先だけじゃないでしょうね？ あたしと勝負しなさい！」

「ああ、望むところだ！ その代わり負けたら奢れよ」
「いいわよ、寿司でも焼肉でも奢ってやるうじやないの。でも負けたらあんたが奢りなさいよ」

寿司？ 焼肉？ それはいいな。

「杏子ちゃん……！」 美菜はさすがに不安そうな表情になった。

四時間後。

「お、緒方あ」 今にも泣き出しそうな顔の山崎が言う。
「知らん。自業自得だろうが」

四人は、ボーリング場近くの回転寿司にいた。

「おいしいわね、美菜」 中トロを頬張りながら、満足げな杏子が言った。

「うん。でもなんか悪いね、奢ってもらっちゃって」 言いつつも、美菜は控えめにかっぱ巻きを食べている。

「え？ 内田の分も奢るなんて聞いてないよ！」 山崎は本当に泣きかけている。

「負けたのに文句を言わない！」 杏子はどこまでも意地が悪い。
……などと思いつつ、孝はネギトロを取り、味噌汁を注文した。

「緒方、お前まで食う気が！」

「心配するな。おれは自分で支払う」

「良かった……。ていうかそれでも、二人分も払えるわけないだろ

！」「無論、山崎は一口も食べていない。

「え？ そうなの？ あんたビンボーねえ」 とさらに切り込む杏子。

拳を握りながら、山崎は何か言おうと口をパクパクさせてから、肩をがっくりとうなだれた。

第四話：実戦

月曜日、午前八時。まだ教室にいる生徒は少ない。

「……どうしたんだ、山崎」 教室の座席でぐったりしている山崎に友井が声を掛けるが、反応はない。

「気にするな。中学のときから、たまにこうなるんだ。どうせ昼には直る」 孝はいつも通り、授業の予習をしながら言った。

「それ冷たすぎないか!？」 山崎がいきなり起き上がって言う。

「いきなり叫ぶな。書き間違えたじゃねえか」 予習の手を止めずに、緒方は昨日の出来事を友井に話した。

「ぶはははははっ！ なんだそれ、それだけ言って負けたのかよ！」
大爆笑する友井。「そんでボーリング代と、自分は食ってないのに二人分の寿司代払ったわけ？」

「いや、こいつ二千元しか持ってなくて。おれが代わりに払った」と孝。これは事実だった。

「二千元？ お前よくそれで寿司なんか……！ ちょっと笑いますきた、水飲んでくる」 友井は教室を出ていく。

「あんなに笑わなくても……」 と不満げな山崎。

すると、杏子と美菜が談笑しながら登校してきた。

「おっはよー。緒方とビンボー人！」 杏子が教室で最初に発したのがこれだ。

「ビンボー言うな！」

「だって事実でしょ？」

「くっ……。反論できん」

可哀想なヤツだ。正直、孝はそう思った。

「おはよう、緒方くん。山崎くん」と美菜。

「おはよう」

「緒方くん、昨日はありがとう。奢ってくれて」

「いや、いいよ」

「山崎、あんた緒方に借りた代金ちゃんと返しなさいよ」 突っ込む杏子。

「あ、当たり前だろ！ そんなこと！」

その言葉を聞いて、孝は中学時代のことを思い出した。

「そういえば、中三のときにお前に貸した五千円まだ返してもらってないな」

「余計なこと言うな……！」

「あんたって、ホントに……」 杏子はすでに呆れ顔だ。

「山崎くん、お金はちゃんと返さないと……」

「分かった分かった分かったから！ 次のバイトの給料日に返すよ！」

「何度その台詞セリフを聞いたことか……」

「もうやめてくれえー！」 山崎は教室を飛び出して、どこかに行ってしまった。

「情けないわねえ」 杏子は呟くように言うと、自分の席に戻っていった。

「じゃあまたね」と美菜もあとに続く。

そこで、友井が教室に戻ってきた。「あれ？ 山崎は？」

「さあ。どっか行った」

「どっかって……もう授業始まるぞ」

「あいつ、しょっちゅうサボるから大丈夫だろ」

「しょうがないヤツだな」

互いに苦笑したとき、チャイムが鳴った。

二時限目と三時限目の休み時間、やっと山崎が教室に戻ってきた。

「どこ行ってたんだ？」

「屋上だよ」

「なんで屋上？」

「だって……傷ついた男の誇りプライドを癒すには、屋上しかないだろ？」

「はあ？」 相変わらずよく分からんヤツだ。孝は呆れのため息をつく。

「ま、どうせ数学はサボるつもりだったし」

「おまえ、そんなこと言ってる……」

突然、天井のスピーカーに短いノイズが入った。

『全校生徒に連絡します。先ほど、学校敷地内で不審者が発見されました。襲撃の可能性もあるため、直ちに教室に入り、全ての窓を閉じて下さい』 スピーカーから緊張した声が流れる。

孝は咄嗟に叫んだ。「窓を閉めるんだ、早く！」

学校の窓ガラスは全て、坑弾ガラスになっていて、衝撃弾や弱装弾程度なら数発は防げる。

外から、複数の銃声が聞こえた。

「みんな落ち着いて！ 机の下に入るんだ」 適確に指示を飛ばしたのは友井だった。

『SDF隊員は、直ちにSDF棟に集合して下さい。繰り返します、……』

スピーカーが言い終わるのをまたずに、孝と友井は教室から飛び出した。

坂丘高校の校舎付近に、十二人のFDTが展開していた。

今日の襲撃の目的は、威力偵察だった。FDTのリーダーは、自分のイジェマツシAK-102自動小銃アサルトライフルの安全装置を解除し、迷わずにトリガーを引いた。

暴力的な発砲音と共に、フルオートで射出された五・五六ミリ弱装弾が坂丘高校の校舎に弾痕を付けていく。

それを合図に、彼の部下たちも発砲を開始した。

「SDFが来るぞ。行け」

校舎への威嚇発砲を終え、次に生徒玄関へ一斉射撃する。坑弾ガラスとは言え、アサルトライフル用の小口径高速弾の連射なら破壊できる。

悪法にかんじがらめにされた学校なんて、不要なんだよ……！
リーダーはAK-102の弾倉を交換し、再びトリガーを引き絞った。

M P 5を携えた孝たち第二小隊の隊員は、生徒玄関付近に展開した。S S Tのアルファ・チームが陣取った近くだった。

今回の襲撃は悪質だった。学校構造物を手当たり次第に撃ったあとは、玄関の生徒用ロッカーを撃ちまくっている。

「これは、かなりの被害だぞ……」 孝の隣の隊員が呟いた。孝はM P 5の被筒ハンドガードを握り締めた。

もちろん傍観するだけではない。S S Tの隊員たちが、銃撃の間を縫って少しずつ前進して行くのが見えた。孝は感心した。S S T隊員たちの動きには、一切の無駄がない。それは本物の特殊部隊を彷彿ほうふつとさせた。

そして、S S T隊員がコルトM 4 A 1自動小銃の発砲を開始した。拳銃弾を使うM P 5とは違う、小銃弾の鋭い発砲音が生徒玄関に反響する。

五人の一斉フルオート射撃だった。

ロッカーやガラス片が散乱する床に金色の空薬莖が撒き散まらされ、数人のF D Tが被弾して派手に転倒した。

一斉射撃は、数秒で終了した。

「セミオートに切り替える。残った敵を掃討する」

FDT側のリーダーはまずいと感じ、舌打ちした。いま自分たちがいる中庭は、屋上から狙撃するのに最適な位置にすることに気づいたからだ。

部下たちは、そのことに気づいていない。興奮し、各自バラバラに発砲している。しかも、さつきからフルオートで撃ち続けている。これでは弾薬がもたない。

そして、目の前にいた部下の足が撃ち抜かれるのを指揮官は目撃した。コンクリートに鮮血が散る。撃たれた部下は銃を放り投げ、声にならない悲鳴を上げた。指揮官は植え込みに隠れ、校舎を見上げた。逆光で、黒い影が見えた。スナイパーだ。

瞬間間に三人が狙撃された。全員が太腿を撃ち抜かれて。

命中精度、射撃の速さ。並みのスナイパーではない。

馬鹿な……！

「屋上だ！ 屋上を狙え！」

部下たちの銃撃が屋上に集中する。が、混乱のせいか滅茶苦茶な火線で、一発も命中していない。

自分の近くに着弾の火花が散っても、屋上のスナイパーは動じることなく狙撃銃の銃身バレルをこちらに向けていた。

すると、今度は生徒玄関の中から銃撃が始まった。

一人がボディアーマーを撃たれ、三人が足を撃たれて昏倒した。

ボディアーマーは貫通こそしないが、この距離で弱装弾を撃たれれば、アバラの一、二本は容易に折れる。

拳句の果てに「リーダー！ 弾がありません！」という叫びまで聞こえる。

「動ける者は撤収だ。急げ！」

リーダーと数人のFDT隊員は玄関や屋上に銃撃を加えつつ、校

門に向かって撤退を始めた。

校門に辿り着くまでに、さらに一人が膝を撃たれて動けなくなつた。「リーダー……！ 助けて下さい！」

いま助けに行けば、また負傷者が増える。

「……すまん」

結局、撤退に成功したのはリーダーを含め五名だけだった。完全な敗北だった。

屋上で狙撃したSST隊員は、FDT隊員たちが撤退するのを確認し、「任務完了」とマイクに吹き込んだ。

『了解した。状況終了、撤収しろ』

「了解。撤収する」

彼はレミントンM24 SWスナイパーライフルのボルトを引いて、チャンバーに残つた七・六ミリ弱装弾を取り出し、二脚をバイポッド置んだ。このM24は陸上自衛隊からの払い下げ品だが、弱装弾に対応させるために峰和工業で改修とチューンナップを受けていた。性能は一級品である。

「上出来だな、結城」隣にいるスポッター観測手役の三等学尉が、散らばつた空薬莖を拾いながら言った。

「ええ。……でも今回は敵が雑魚ザコでした。戦術もクソタクティクスもあつたもんじゃない」

「確かに」 三尉は苦笑し、自分のM4からマガジンを外す。

この学校に向かってくる救急車のサイレンが、鳴り響いていた。

第五話：過去

戦闘が終了して数分後、坂丘高校の校門前に三台の救急車と二台のパトカーが到着した。

戦闘が終わると、SDF隊員たちは戦闘の後片付けに追われる。まず、負傷したFDT隊員を武装解除し、救急車に乗せる。彼らの扱いは、それほど厳しくはない。法的にもグレーゾーンであり、数週間の保護観察期間の後には、もとの生活に戻ることになる。

あとから聞いた話だが、今回の襲撃に参加していたFDT十二名のうち二人はこの坂丘高校の在校生だったらしい。

FDTは、七人が銃創と骨折で病院送りになった。いずれも命に別条はない。対して坂丘高校SDFは、SSTの一人が軽いカスリ傷を負っただけで済んだ。むしろ、校舎が受けた無数の弾痕や、銃撃で蜂の巣にされたロッカーなどの被害に対する生徒たちの憤りの方が深刻だった。

孝はFDT隊員の銃を警察に引き渡すのを手伝ってから、現場の後片付けに参加した。

まず散らばった空薬莖を全て回収し、割れたガラスや砕けた壁の破片などを取り除いた。続いてコンクリートの血痕を水道水で洗い流し、取りあえず片付けは終了。校舎の弾痕や粉碎されたガラスの修理は後日、専門の業者にやらせてもらうことになる。

中断していた授業は、四時限目から再開された。もともと、SDF隊員たちは全員、午後二時頃まで片付けに専念していたわけで、授業は六時限目の途中から参加となった。

今日の戦闘で発砲したのはSSTの隊員だけで、普通部隊の発砲はなかった。今回の場合、負傷したFDTの七人のうち、四人は屋上に配置したSSTのスナイパーが撃ったようだ。

孝や友井たち一年生にとっては初めての实战だったわけだが、発砲していないこともあって、孝は実感が湧かなかった。

「すごかったよね、銃声」「怖かったー」「なんかロツカーがヤバいことになってるらしいぜ」「マジか？ おれあそこに教科書置いてあるのに……」

クラスメイトたちは六時限目と七時限目の休み時間、そんな話をしていた。自然と、現場にいた孝や友井に質問の刃が向けられた。

「どうだった、実戦？」「人が撃たれるのって、どんな感じだった？」「緒方くん撃つたの？」「え、血とか飛び散ったりしてたわけ？」

正直、うつつうつしい。孝はなるべく棘とげのないように「そういうのは喋らない規則になってるんだ。悪いな」と返すに留めておいた。

午後七時三分。今日は戦闘があつたためか、SDFの訓練が早めに終了した。孝はさっさと拳銃と警棒を預け、SDF棟を出た。校門のところで、美菜に会った。「内田？」「緒方くん……」

美菜も徒歩通学らしい。二人は並んで歩き出した。

「へえ。内田って吹奏楽部だったのか」

「うん。ホルンやってるの」

「クラス会長やってるくらいだから、てっきり帰宅部かと思ってたよ」

そう言つと、美菜は微笑した。「会長つて言つても、そんなに忙しくないんだよ?」

孝は、ふーん、とだけ答えた。しばらく、沈黙が訪れる。

「あのさ」「あの」 同時だった。孝は先を譲った。

「みんな、不謹慎だよ。怪我した人が何人もいるのに、あんな質問ばかりして」 美菜は真剣な眼差しで言った。正義感は強いらしい。

黙った孝に「気にすることないよ。緒方くんは何も悪くないんだから」 と美菜は続けた。

「ありがとう。そう言つてもらえると気が楽だ」

美菜は不自然にこちらから目を逸らし、頷いた。日が暮れているので、表情はよく分からなかった。

「……緒方くん、ひとつ質問していい?」

「ああ」

「どうしてSDF隊員になったの?」

その一言で、孝の心臓が大きな脈を打った。今まで、同級生にこの話をしたことはなかった。どうする? 適当に話を作るか?

だめだ。孝は直感でそう思った。はつきりした理由は分からないが、今じつとこちらを見つめている美菜に、嘘をつく気にはなれなかった。孝はひと呼吸おいてから、口を開く。「……二年前の高校占拠事件、覚えてるか? 八人が死んだ事件」

高校生十三人が死に、FDT発足の原因となった八年前の事件に次いで、二番目に最悪と呼ばれる事件だ。

「うん。隣の県だったよね?」

「そう。そのとき、おれの四つ上の兄さんは、SDFの一曹だった。

当然、そのときは銃撃戦に参加した。兄さんと同期だった人に聞いたんだけど、兄さんは優秀なSDF隊員で、SSTに入隊する内定も出てたそうなんだ。兄さんは戦闘中に気を失い、教室に一人で取り残された。そのとき、理由は分からないけど、FDTの連中は自暴自棄になつてたらしい」

美菜は次第に、顔を青くしていった。聞くべきではなかったと思つたのだろうか。

「兄さんは、最後までFDTに抵抗した。そしてFDTは、手榴弾を使った。どつから入手したんだが、軍用の破碎手榴弾だったらしい」

孝自身、あまり思い出したくないことだった。美菜は口を手で覆う。

「兄さんの上官が、救出に飛び出していった。でも、もう手遅れだった。兄さんを助けようとしたその上官も、手榴弾の破片をくらつて、三十針縫う大怪我を負つたらしい。……血まみれになつた兄さんの遺体を見て、おれは誓つたんだ。兄さんの仇を討つ、つてね。心が憎しみであふれた。おれはそのあと、FDTをぶつ壊せばいいと考えるようになったんだ。」

でも、SDF入隊試験の勉強をしているうちに、それは何か間違つてるんじゃないかと思うようになった。兄さんが死んだのは、曲がりなりにも存在するルール、それを破って爆発物を使った一部のFDT隊員のせいだ。他のFDT隊員は、自分が正しいと思つた信念を貫いて行動してる。その点では、SDFも、FDTと同じだ。

だからおれは、兄さんの敵討ちじゃなく、兄さんがやりたくても出来なかつたことをやってみようと思つた。それで、おれはSDFに入つたんだ」

美菜は、いつの間にか両目に雫を浮かべていた。「ごめんなさい。あたし、何も知らずに、緒方くん……」

いきなり目の前で泣き出され、孝は動揺する。「な、泣くなよ……。このことは、内緒ってことで」

「うん……」

その後、美菜を自宅の近くまで送った孝は、自分のマンションに帰った。

まさか泣かれるとは思わなかった。孝は一抹の後悔を抱く。

そもそも、なんであいつにあんなことを話したんだろう。知り合って二ヶ月ちよつとしか経ってないあいつに……。

その夜、孝は寝つけなかった。脳裏に蘇った兄さんの姿が、どうしても頭から離れなかったからだ。至近距離で手榴弾の爆発を食らったと聞けば、手足がもげてバラバラになる状況を想像する人も多いと思うが、実際には手榴弾にそれほどの破壊力はない。

孝が兄の毅つよしに再会したとき、彼の四肢はちゃんと形を残していた。ただ、スタスタに引き裂かれた皮膚は血まみれで、布切れ同然となった戦闘服と見分けがつかなくなっていた。ところどころの肉に、ガラス片だか手榴弾の破片だか分からない鋭利な物質が、深く食い込んでいた。顔は……覚えていない。おそらく見るに耐えない光景だったはずだ。

思い出すだけで、気分が悪くなる。

結局、孝はほとんど眠れずに朝を迎えた。

第六話：放課後の乱闘

七月十二日、午前五時。

昨晚、部屋に戻ってシャワーを浴び、ベッドに横たわってから八時間。夢と現実の狭間を漂う時間を過ごした孝は、眠ることを諦め、マンションのベランダに出た。吹き付ける風が心地よい。

日の出が近いのだろう。辺りは思いのほか明るい。聞こえるのは、わずかな自動車のエンジン音と、小鳥の囀りなげまわくらい。

きれいな景色だった。夜間警備がある日は、この時間帯でも起きていることがあるが、学校からはこんな景色は見えない。この景色は、六階のマンションならではだった。孝はしばらく、段々と照らされていく街並みと、刻々と変化し続ける雲を眺めることにした。孝は小さい頃から、空を眺めることが好きだった。どこまでも広がる、この無限の空間を眺めていれば、地上で起きていることなどすべてちっぽけに思えた。すべてを包み込み、許してくれるような空は、今日も変わらない表情でこちらを見下ろしている。

午前二時三十二分。孝はSDF棟に着いた。入り口で、斉木に会った。

「おはようございます、斉木さん」

「緒方が、おはよう。……どうした、なんか顔色が悪いな」

まったく気が付いていなかった。たぶん寝不足のせいだ。……
気のせいじゃないですか」

「ならいいんだが……。昨日の戦闘のことか？」

「え？」

「心配するな。最初は誰でも怖い。でもな……いざとなったら、勝

手に指がトリガーを引いてるんだ。訓練みたいにな」 斉木は右手の人差し指を曲げ、くいつと引いてみせる。

しかし実戦で発砲したことのない孝には、いまいちピンと来なかった。

「それよりお前。SST入隊試験に推薦されたんだろ？ うらやましいな、まったく」

「入隊試験って、どんな内容なんですか？」 孝は、肝心なそれを知らなかった。

「詳しくは知らん。おれも受けたことないし。……SSTの知り合いの話だと、陸自のレンジャーを参考にしてるらしいぞ」

「レンジャーって……山中訓練じゃないですか」

陸上自衛隊でも不屈の精神力が必要とされるレンジャー課程だが、その内容は一般的に知られているサバイバル訓練だけではない。市街戦、狙撃、ラペリングなど、SDFの任務でも重要とされる項目は含まれている。しかし、野戦を主任務とする陸自の訓練と、市街戦を主任務とするSSTの訓練がどうしても結びつかない。

「まあとにかく、厳しい試験ってことだ。幸運を祈る」 斉木は歩いていってしまった。

孝は疑問を抱きながら銃と警棒を受け取り、教室に向かった。

昼休み。

「緒方！ さっきの日本史のプリント見せて」 杏子が孝の机に近づいてきて、言った。

「……またか。いい加減、ちゃんと授業聞いて自分で書けよ」 孝は面倒臭そうにぼやきつつも、クリアファイルから日本史の授業プリントを出し、杏子に渡した。

「だってあの先生の話し方、眠くなるし……。ん？ そういえば、こいつ元気ないわねえ。鬱病？」 言いながら、杏子は机にうずくまって微動だにしない山崎を指先でつついた。だが反応はない。

「ああ、朝からこうなんだ。……おい、山崎。起きてるか？」

すると、山崎の背中がもぞもぞと動いた。

「……鬱だ」

「は？」

「すべてが鬱だ……。授業も鬱、部活も鬱」 うずくまったままの山崎が続けた。

「……やっぱり鬱病なんじゃない」 杏子はやれやれ、という表情で言うと、踵を返して歩いていった。

孝は、山崎の「部活も鬱」という言葉が引つ掛かった。無類のスポーツ好きである山崎は、部活ハスケをするために学校に来ているようなものであり、今まで部活の文句を言っているところを見たことが無かったからだ。

「部活で、なんかあったのか？」 孝は多少、心配しながら問うた。

「別に。何もねえよ」 そっけない返事に苛立ちを覚えた。

「あっそ」

その後、孝と山崎は話をしなかった。

午後五時。第二小隊と第三小隊の面々は、空き教室で座学を受けていた。

講師役のSST隊員が、拳大の黒い物体を掲げる。

「これは、全国のSDFおよびSSTに標準装備されているM84音響閃光手榴弾だ。投擲、破裂と同時に百万カンデラの閃光と百七十デシベルの大音響で対象をショック状態にし、数秒間、身動きを封じることができる。二、三年生は実戦や訓練で知っていると思うが、一年生は基本的な使用法しか知らないだろうから、今日は詳しく説明する。」

仕組みとしては、マグネシウムと金属酸化物を、過塩素酸カリウムと混合させ、燃焼させることで音響と閃光を発生させる。これを使用しているのは、対象者が精神的に何らかの異常をきたしている可能性がある場合や、泥酔、異常な興奮状態で、何を起こすかわからず危険な状況で、班長または幹部の許可を取った場合のみだ。通常の襲撃などでFDTに対して使用したり、班員が独断で使用した場合には処分が与えられるから、使用規定は遵守すること」

こういつた装備品の説明は、かなり詳細にレクチャーされる。誤って使用したり、規定を守らなかった場合は最悪、SDFを辞めさせられることになりかねないため、隊員たちは真剣に聴いている。

「また、実際に使用する場合は、付近の者全員に耳栓の着用を徹底しろ。さらに、各自ゴーグルの装着を再度確認すること。戦闘中にゴーグルを外すのは禁止行為だが、戦闘中の衝撃などで外れている

可能性も考えられる。投擲後は、速やかに対象者を拘束すること。スタン・グレネードについては以上だ。次に、この発炎筒についてだが……」

寝不足でうつすらと熱をもった頭で、孝は懸命にノートをとっていた。

午後七時二十一分。

孝は斉木と巡回に出ていた。この時間は、部活動を行う生徒の下校時間帯だった。また、夕闇に紛れて侵入者や不審者が発生しやすい時間帯でもある。

校門の近くで、孝たちと同じく巡回中のSST隊員二人が前から歩いてきた。普通部隊が使うOD色の訓練用戦闘服や濃紺色の戦闘服とは違い、SSTの隊員は黒の戦闘服を着用していた。銃は、MP5K - PDWサブマシンガン。孝たちの使うMP5 - A5の銃身を切り詰め、取り回しの容易さを向上したモデルだ。クルツとはドイツ語で『短い』の意で、銃床もPDWタイプに換装されている。SSTの近接戦闘時のメインウエポンだが、孝たちのMP5と決定的に違うのは、衝撃弾より殺傷力の強い弱装弾を使用することと、近接戦光学照準器近接戦光学照準器が装備されていることである。

四人はほぼ同時に敬礼し、すれ違った。

SST隊員の、油断の無く鋭い眼光が印象的だった。

その数分後、体育館の方から怒鳴り声が聞こえ、孝と斉木は駆け足で向かった。一階にある第一体育館の出入り口には、ユニフォー

ムやジャージ姿の運動部員たちで人だかりが出来ていた。二人はそれをかき分けて進んだ。「SDFです、通して下さい！」

野次馬の先には、七、八人のバスケット部員たちと対峙する、山崎の姿があった。両方、バスケのユニフォーム姿だ。

「……てめえ、もう一回言ってみろ」

孝たちには気づいていない様子の山崎が低い声で言った。上級生らしいバスケット部員が答える。山崎と比較しても、かなりの長身だ。

「聞こえなかったか？ お前がいると、チームのやる気が失せるんだよ。だから、さっさと辞めてくれって、丁重にお願いしてるんだ」

周りのバスケット部員が嘲って笑う。山崎の肩が小刻みに震えているのが分かった。開いた手が、ゆっくりと握られていく。「この野郎っ！」

山崎は叫ぶと同時に長身の上級生に殴りかかった。だが複数相手に、あっさり押さえ込まれるのが見えた。孝は思わず叫んだ。「山崎！」

「行くぞ、緒方」

二人は喧嘩の現場に突入した。「SDFだ！ やめろ！」 「そいつを放せ！」

「SDFが何の用だ！」 怒鳴った部員が、いきなり孝の顔面を殴った。

「緒方！」

昏倒した孝は、一瞬、頭が真っ白になった。そして数秒後、一切

の理性が消えて無くなった。「やりやがったな、てめえ」 孝は重りに等しいヘルメットとボディーマーを脱ぎ捨て、山崎を蹴っていたバスケット部員の背中に渾身の跳び蹴りを食らわした。半長靴の踵で蹴り飛ばされた背中が前方に弾け飛ぶ。

……殴り、殴られ、蹴り、蹴られ。何分経過しただろう。斉木は得意の柔道技で暴れるバスケット部員を気絶させて行った。突然、「加勢するぞ、小隊長、緒方！」と、聞き覚えのある太い声が発したかと思うと、大柄な岡田二曹が突進してくるのが見えた。「この前のウイダーの礼だ！」

そんな理由で参戦するのか。

あとで正当防衛を主張するためか、岡田は最初の一発目をわざと受けたようだった。だが、その位置が悪かった。顔面ストレート。岡田の血管がブチツと音を立てたのは、気のせいではないだろう。

「てめえ、やっていいことと悪いことの区別が分からねえのか！」

叫ぶように言うてから、岡田は腰のベルトに装着したホルスターから特殊警棒ポリスバトンを抜き、一度軽く振った。三段階伸縮式のポリスバトンが空気を裂く音と共に伸び、漆黒に輝くのが見えた。

岡田は、ついさつき自分に顔面ストレートを打ち込んだ部員に近づき、躊躇せずにポリスバトンを振り上げ、下ろした。バネの内臓されたバトンがしなりながら、きれいな弧を描いて部員の背中に命中する。完全にキレながらも、岡田は部員の骨を避けて打撃をしていた。警棒術訓練の賜物だった。

数分後、教師二人が騒ぎを聞いて駆けつけ、放課後の乱闘は幕を閉じた。

第七話：山崎の決心

午前八時。教室の座席でいつも通り授業の予習をする孝の腰には、拳銃と警棒が無く、顔には絆創膏やガーゼが何枚も貼られていた。

「大丈夫？ 緒方くん……！」 登校してきた美菜が、驚いた様子で尋ねた。

「ああ、軽傷だから心配ない」

「もうひとつ……。拳銃、持たなくていいの？」

「いいんだ」

「……何があつたの？」

孝はため息を吐き、昨日の乱闘騒ぎのことを美菜に話した。乱闘のあと、孝と斉木と岡田は司令室に呼ばれ、倉田に大目玉を食らったことは、言うまでもない。結果、孝と斉木は三日間、警棒を使用した岡田は七日間の停職処分を受けたのだった。免職にならずに済んだのは、三人とも『正当防衛』という名の言い訳があつたからに過ぎない。

乱闘に参加していた、山崎を除くバスケット部員七人のうち四人は孝や斉木と同じく軽傷で済んだが、残りの三人は岡田の警棒打撃を食らい、一人は松葉杖をつく有様だという。ちなみに岡田は、以前にも喧嘩騒ぎの前科があるらしい。

結果、岡田は三日間の停学処分も併せて受けたため、今日は学校に来ていないはずだ。

「そうだったんだ……。大変だったね」

そう気遣ってもらえると、ありがたかった。

「でも……山崎がどうなってるのかが心配だ」 昨日の乱闘のあと、山崎はすぐに職員室に連行されてしまったため、話すタイミングがなかった。そして今日、山崎は教室に姿を現さなかった。

杏子曰く、「気にしなくていいわよ。どうせすぐ立ち直るって」。だが孝は、そんな気がしなかった。

七月十三日。乱闘から二日が経ったが、山崎は登校して来なかった。

そして放課後。停職中の孝は、家に帰っても特にすることがないので、教室に居残って勉強することにした。外から、SDFのランニングの掛け声が聞こえる。なんとも言えない、もどかしい気分だ。一時間ほど勉強して、気分転換がしたくなった。

……屋上でも行ってみるか。

屋上は、生徒の立ち入りは基本的に禁止となっている。逆に言えば、行っても誰もいないということだ。孝は階段を上ってゆく。拳銃と警棒がない分、かなり身体が軽く感じる。屋上のドアを開けると、わずかに冷たく感じる風が全身に吹きつけた。

ドアから一步出たところで、孝は足を止めた。

音がする。楽器の音だ。

孝は音のする方に視線を向けた。案の定、吹奏楽部の生徒と思しき女子が一人、屋上の貯水塔の近くに座っていた。こちらに背を向けていて、顔は分からない。あの髪型は……。

「……緒方くん？」 美菜はこちらを振り返って、言った。手にはカタツムリのような形をした金管楽器、ホルンを持っている。

「内田……」

「どうしたの？ こんな時間に」

孝は美菜の方に近づいていった。

「内田こそ、どうして屋上で練習してるんだ？」

「ここ、好きなの。前に一回ここで吹いてたら、やみつきになっちゃて……」 美菜は微笑する。

「へえ……。おれは、停職中だから。教室で勉強してたんだ」「そっか……」

「ここ、一応は立ち入り禁止だろ？ クラス会長が来てるなんて、意外だな」

「ごめんなさい。……でも緒方くんこそ、処分受けてる最中なんでしょ？ いいの？」

美菜が言い返してくるなんて、珍しい。孝は苦笑し、「そうだよな」と返し、美菜の隣に座った。

「せっかくだし、なんか演奏してくれない？」

「うーん。そうだなあ……」 美菜は少し困ったような表情をした。「じゃあ、あたしの得意な曲、吹くね」

美菜はホルンのマウスピースを咥え、曲を演奏し始めた。やわらかい音色が響き、孝は耳を澄まして聴いた。孝は美菜の横顔を見た。肩の辺りで切った髪が風に靡なびき、なんとなく艶めかしく見え、慌てて目を逸らした。

何分くらい経っただろう？ 演奏が終わり、孝は軽く拍手をした。

美菜は軽く頭を下げ、「どうだったでしょうか。ご感想は？」と微笑みながら言った。

「良かったよ。……きれいだった」

「……ありがとう」 美菜は、少し照れたように言った。

午後六時。孝は校門を出て、マンションに向かって歩き出した。山崎はどうしているだろう。あれから、メールすら来ない。こちらから送ってみるか？

孝は文章を考えたが、出だしのところで早くもつまづいた。「大丈夫か？」では不自然だ、大丈夫なら学校に来ない理由がない。「元気か？」これも前に同じ。「学校来いよ」これは、なんとなく押し付けがましい。山崎に使うと逆効果だ。いつそ「今から遊ぶか？」……空気を読んでなさ過ぎる。

結局メールを送るのを諦めた孝は、マンションの前まで来て、足を止めた。

することがない。駅前でも行ってみるか。

駅前の大通り。車道は乗用車や満員のバス、タクシーで埋め尽くされ、歩道は学生などの通行人で溢れていた。この時間帯では珍しいもない、帰宅ラッシュの光景だ。

学生に人気のある大型ショッピングセンターの前で、孝は前方から見慣れた顔が歩いてくるのが見えた。「山崎……」

ジャージの短パンにTシャツという出で立ちの山崎もこちらに気づく。「緒方、お前どうしてこんなところに……」

「停職!？」 山崎は、孝が予想していた以上に驚いたようだった。

「ああ。おかげで今こうやって、のんびりできるわけだ」
「あのときは、ありがとうな。助けてくれて……」
「あの人数相手じゃ、さすがのおまえも歯が立たないだろうからね」
「……おれ、部活やめるよ。もう続けても意味ないし」

そう言った山崎の目は、どこか遠くを見つめていた。孝は反論するつもりはないし、これは山崎本人が決めたことだ。

「……そうか」

「で、おれは決心した。おれ、SDFに入るよ」

「は？」 一瞬、山崎が何を言ったのか分からなかった。数秒後、孝はその言葉の意味を理解した。「……本気か、おまえ」

「当然。あの喧嘩のとき、おれはあのSDF隊員の身のこなしに感動した！ 無駄のない動き、鮮やかな体さばき……。それで、おれもあんな強い人になることにしたんだ」

斉木と岡田のことか。……なんて単純明快な。孝は半ば呆れた。

「あのな、あれだけ強いのはそれ相応の訓練を積んでるからであつて……」

「分かってる分かってる。で、次の入隊試験っていつあるんだ？

来月か？ それとも再来月？」 山崎は完全にその気らしい。

「ご冗談。SDFの入隊試験は年に一回。つまり次は来年の一月だ」

「……は？」

「まだ半年ある。今から試験勉強始めれば、間に合うかもな」

「試験勉強なんているのか？」

「当たり前だ！ SDF隊員採用試験の倍率は二倍だぞ」

「二人に一人落ちるってことか！」

「そうだ」

「マジかよ……！ 二倍、試験勉強、二倍……」 山崎は本気で悩

み始めた。

そんなに入りたいのなら、ちょっとは自分で調べろよ。

孝は心の内で呟いた。だが山崎が元に戻って、とりあえず一件落着と言えそうだった。

翌朝、教室。

「おい山崎、頼まれてたやつ持ってきたぞ」

孝はバッグから三冊の本を取り出した。孝がSDF入隊試験の勉強に使っていた、専門書と過去問題集だった。

「サンキュー、緒方。さつそく今日から読んでみるよ。あと体力試験のために、ランニングと筋トレもすることにしたぜ」

「おまえ、あんまり張り切りすぎると長続きしないぞ。まだ半年もあるのに……」

「心配するな。おれはこう見えても粘り強いんだ」

嘘つけ。孝は声に出さずに言っておいた。

「まあ、出来る範囲で頑張れ」

「おう、必ず合格してやるぜ！」

やれやれ、だ。しかし、部活を辞めてからも運動を続けるのは悪いことじゃない。いつまで続くか見物ではあるが。

山崎がSDFに入りたがっているということを友井に話すと、「本気かよ……。難しいと思うけどなあ」という微妙な反応だった。友人としては面白いやつだが、あまりSDFの部下にはしたくない。孝は正直、そう思っていた。

第八話：SST入隊試験（前編）

7月20日、午前6時54分。夏休みの真っ只中、孝は大きなポストンバッグを抱えてSDF棟に入った。

「いよいよだな、緒方」

「頑張れよ」

すれ違うSDF隊員たちから激励されるのをくすぐったく感じながら、孝はSDF司令室に向かった。ドアをノックし、「緒方1士です」と告げると、すぐに「入れ」と返事があった。

「失礼します！」

広々とした司令室には、倉田1佐以外に、すでに4人のSDF隊員が待機していた。3年生が2人と、2年生の岡田。これから5日間、共に学校特殊部隊SSTの入隊試験を受ける生徒たちだ。

「あと1人だな」

倉田が言う。もう1人、1年のSDF隊員が試験に参加することになっているはずだ。すると、7時ちょうどにドアがノックされた。「中原^{なかはら}1士です」 そう言ったドア越しの声は、女子のものだった。孝は連絡係か？ と思った。ドアが開き、司令室に入ってきた隊員を見て、孝は啞然となった。

「失礼します」

結論から言うと、その女子は連絡係ではなかった。いつかのコンビニ帰り、グラウンドのランニングコースで自主トレしていた1年の女子SDF隊員。本人が小柄なせいか、やけに大きく見えるボストンバッグが、彼女がSST入隊試験を受ける者であることを証明している。

まさか、もう1人の1年SST候補生が女子だとは。

背筋をぴんと伸ばし、直立不動になった彼女が言う。

「第1小隊の中原^{なかはら}葵です。よろしくお願いします！」

整った目鼻の形は、雑誌の表紙写真にでも載っていそうなほどだ

が、葵はいつさい笑っておらず、そこが決定的に違った。

倉田が椅子から立ち上がった。

「揃ったな。出発だ」

部活遠征用のマイクロバスで向かっている先は、陸上自衛隊の金^{かな}丘駐屯地^{おか}。1個普通科連隊が所在する、そこそこ規模の大きい駐屯地だ。SSTの入隊試験は例年、陸自の演習場で行われる。試験官は佐官クラスの教師と、SST隊員の学生もほんのわずかだが含まれるようだ。今日、金丘駐屯地には、県内の各高校からSSTに推薦された生徒が集まる。SST自体の規模が小さいため、効率化を図るために、こうして県内のSST入隊試験をまとめて行うことになっていった。

駐屯地に向かうマイクロバスの中で、簡単に自己紹介をした。

「第1小隊の長野春利^{はるとし}です。3年で、階級は2尉。SST入隊試験は2度目で、絶対にリベンジします。よろしく」

彼の顔は知っていた。第1小隊の小隊長だ。

「第3小隊、荒井真^{あらいまこと}。長野と同じ3年で、学曹長です。えー、この試験は初めてだけど、よろしく」

「第2小隊の岡田清二です。2年で、2曹です。初めてで、とても光栄に思ってます。えっと、よろしくお願いします」

いつもの岡田らしくなく、緊張した様子だった。

孝が葵の方を見ると、先にどうぞ、という風に手を差し出したので、多少緊張しながら言った。

「第2小隊の緒方孝です。1年で、1等学士です。自分なりに精一杯頑張るので、よろしくお願いします」

「第1小隊の中原葵です。1年の1等学士です。あたしが女だからって、手加減はしないで下さい。よろしくお願いします」

性格は頑固そうだ。孝は葵にそんなイメージを持った。

入隊試験中の戦闘訓練などでは、この6人でチームを組むことになる。赤信号で止まったとき、倉田が運転席から後ろを振り返った。

「よし、覚悟はできてるな？ 言っておくが、最終試験の前にリタイアすることは恥だと思え。統計的には、3人に1人は途中で脱落するぞ」

今回集まるSST候補生は、合わせて53名。つまり、この中から18人近くの脱落者が出ることになる。さらに試験に合格するのは、かなりの難易度だ。SSTは基本的に定員はなく、この試験も単純に本人の実力・適性を確かめるためのものであるため、合格者数は毎年かなり変動する。

金丘駐屯地の演習場に到着して、まず配られたのが、陸自の制式採用迷彩である迷彩2型の戦闘服と、同じ迷彩のブッシュハットだった。

なぜ、迷彩服を使うんだ？ 孝は不思議に思った。

訓練期間中に寝泊りする宿舎に案内され、迷彩服に着替えて15分後の8時10分に集合するよう指示された。孝は、岡田と相部屋だった。

「……つたく、いきなりハードスケジュールじゃねえか」

岡田が迷彩服に袖を通しつつ、ぼやく。

「この迷彩服、一応SDFの階級章が着いてますよ」

岡田は、自分の迷彩服の襟を見た。

「ホントだ」

陸自の迷彩服に、SDFの階級章。なんとなく変だ。

迷彩服を着てから、半長靴の紐を結ぶ。

「時間がありません。行きましょう」

午前8時10分。宿舎前のグラウンドに、52名が整列した。と
思いきや、

「諸君！ この試験では時間厳守は鉄則だ。遅れた者は直ちに荷物をまとめてもらう。いま、8時10分に集合できなかった2人には、もう帰ってもらった」

と主任試験官らしき年配の教師。試験官たちも全員、迷彩服を着用していた。まるで本物の陸自教官に見える。と言っても、孝たち候補生も、パツと見は陸自の学生部隊にしか見えないが。

訓練前に、いきなり脱落者2名。残りは50名。孝はそこまで厳しいとは思っていなかったため、考えを改めさせられた。

「私は今回の試験の責任者を務める、東田^{とうた}1佐だ。よろしく。……では、訓練期間中に使用する銃を貸与する」

地面の一角に敷かれていたOD色のシートが取られ、そこにあった物を見た孝は、息を呑むはめになった。

二脚^{ハイポット}が展開され、地面に陳列されていたのは、52挺の89式小銃^{アサルトライフル}だった。陸上自衛隊の制式自動小銃だ。バレルが鈍く輝いている。そして、89式が候補生全員に配られていく。

まるで、陸自の入隊式だ。

アサルトライフルである89式は、MP5サブマシンガンよりもかなり重い。使い込んだ銃のようで、ところどころボロさが目立つ。「無論これは真正銘の実銃だ。よし、まずは執銃^{ハイポット}。……ストックとハンドガードを持て。ハイポットは、銃を抱えた状態でのランニングだ。アップ代わりに2キロほど走ってもらおう」

ようは、銃を抱えた持久走だ。

「女子は1.5キロだ。……じゃあ全員スタート位置につけ」

女子は4、5人いる。後ろを振り返ると、案の定、むすつとした表情の葵がいた。

孝は、正直こう思っていた。なんだ、たった2キロでいいのか。

約10分後。

「くっそお……。なんだこれ」 孝は50名中、13位で到着した。そこそこの順位だ。

だがハイポットは、予想より辛かった。まず、腕が振れないために足を前に出しにくい。しばらく走っていると、約3.7キログラムの銃を支える腕が疲労してくる。こんな持久走は初めてだ。

その後、体力トレーニングと筋力トレーニングで1日が終わった。

「畜生、こんなもん本当の陸自レンジャーそのままじゃねえか！」

「岡田さん、筋トレ好きじゃないですか」

「あれはトレーニングじゃない、拷問だ」 確かに、そちらの方が比喩的には正しい。

午後7時、男子浴場。

「たぶん、去年より厳しくなってるぞ、訓練内容」

経験者である長野が言う。

「本当か？ ついてねえな」 と不満そうに言ったのは長野と同じ3年の荒井だ。

「ハイポートの直後に腕立て連続100回とか頭おかしいだろ、絶対」

「今日のは小手調べ。本当にキツイのは、明日からだな」

経験者の長野の言葉には、説得力があった。

SST入隊試験、2日目。

午前中は、身体能力テストだった。短距離走、長距離走、腕立て、上体起こし、反復横跳び、握力などの記録をとった。これも重要な試験科目だ。これで基準に満たない項目がひとつでもある者は、脱落だった。無論、女子は男子より基準が下げられている。坂丘高校の5人は、全員クリアした。SSTに推薦されるのは身体能力の高い生徒ばかりなので、ここで脱落する者は少ない。

「午前は楽でしたね」

食堂で、昼食を食べながら孝は言った。

「ああ。問題は午後の射撃テストだな……」 と荒井。

「射撃と言えば、中原、得意だったよな」 中原と同じ第1小隊の長野が言う。

さつきから無言で食べていた葵が顔を上げた。

「ええ……」

「そりゃ楽しみだな」 岡田が余裕そうに言った。

午後1時。89式小銃を持った候補生47名が、射撃場に集合した。

全員が、10発のみ装填されたマガジンを渡されていた。射撃テストでは、この10発中、7発以上を標的に当てれば合格。7発未満だった場合はその場で失格。この試験で、かなりの候補生が脱落するらしい。

長野、荒井、岡田は、見事に合格した。特に荒井は、10発全弾命中という快挙だ。

「おれ、一応狙撃手志望なんだ」 荒井はそう言って苦笑した。そして、孝の順番が回ってきた。

孝は射撃位置で、着弾の確認をする試験官に「よろしくお願いします」と言った。試験官が頷くのを見て、89式にマガジンを装着した。その場でうつ伏せになり、バイポッドを使用して銃を構える。一般的に「ブローン」と呼ばれる射撃姿勢だ。

コッキングレバーを引くと、ジャキン、という金属音と共に初弾がチャンバーに送られた。

ちなみに、試験官はこの射撃までの動作も常に細かくチェックしている。

孝は89式の機関部右側面に設けられた切り替えレバーを、単射を意味する「タ」の位置に回した。

これで射撃準備は完了。

孝はストックの上部に頬付けし、照門に円形の穴が空いたピープサイトを覗き、照星を80m先の標的に重ねた。

一呼吸おいてから、引き金を絞った。

アサルトライフル特有の鋭いリコイルショックが肩に伝わり、真鍮製の空薬莖が排出される。すかさず、試験官が双眼鏡を覗く。

「命中！」

その後、6発を命中させ、2発を外した。そして、9発目。

「外れてる」

まずい。次の10発目を外したら、その場で失格だ。

孝は焦った。呼吸が乱れる。孝は自分に必死に言い聞かせた。

落ち着け、落ち着け……。

そして、最後の銃声が響いた。

「……命中！ よし、クリアだ」 試験官が告げて、孝はほっと溜め息をついた。孝は再びコッキングレバーを引いてチャンバーに弾が残っていないか確認し、89式からマガジンを抜いて立ち上がった。

「良かったな、緒方」 と長野。

「ヒヤヒヤせんな、心臓に悪い」 岡田はそう言って笑った。孝は苦笑で返した。

次に、葵が射撃場に入った。

「さて、お手並み拝見だな」 完全に見下している岡田が呟いた。

岡田のときは89式がサブマシンガン並みに小型に見えたが、葵が89式を持つと、今度はまるでライトマシンガン軽機関銃に見える。

体力があるのは認めるが、葵が華奢なたく体躯であることは、戦闘服の上から見ても分かる。

「反動で肩が外れるんじゃないか？」

岡田が真顔で言う。

さすがに……それはないだろう。

2分後。

「全弾……命中。ほぼ全弾、ど真ん中」 試験官が、啞然とした表情で告げた。岡田ですら、開いた口が塞がらないといった顔だ。

孝は、葵がSSTに推薦された理由がようやく分かった。天才的な、スナイパーの素質だ。

あとで聞かされたが、この射撃テストで、12人の候補生が脱落していた。

3日目は、市街戦訓練に使われるキルハウス模擬施設で、バトラーを用いた

戦闘訓練が行われた。犯人役、人質役の試験官が待つキルハウスに、候補生のチームが突入し、制圧するというものだった。

そして4日目、午前6時半。候補生たちは、今日の試験内容を聞かされないままグラウンドに集合させられた。これは毎年行われるSDF隊員たちの間では「最終試験」と呼ばれる試験だ。内容は毎年変わるため、予想はできない。分かっているのは、これが最後にして最大の難関だということ。そして、1日と半日、すなわち36時間ぶつ続けで行われる試験だということだ。ただ、迷彩服で集合するよう指示を受けていたので、全員が迷彩戦闘服を着用していた。ここまで残った候補生は、35人だ。

東田がマイクを握った。

「これより、SST入隊試験の最終試験を開始する。まずは装備を受け取れ」

候補生たちが与えられたのは、マガジンや救急キットなどが収められた戦闘集約チョッキ、88式鉄帽^{ヘルメット}、水筒、折り畳みシャベル、そして89式小銃だった。孝は嫌な予感がした。これは他の候補生たちも同じだろう。

「もう勘付いている者もいるだろうが、最終試験は、山中でのサバイバル訓練だ。戦闘集約チョッキには、ペイント弾30発が装填されたマガジンが6本入れている。君たちはこれから発表する相棒^{パートナー}と共に、36時間”生き延びろ”。ペイント弾を食らった者は失格、これは同時にバディも失格とする」

候補生たちが、ざわめいた。最後の最後に、野戦サバイバル。おまけにバディがペイント弾を食らえば、自分も脱落。あまりにも不条理な内容だ。

その後、最小限の説明が行われ、バディが発表された後、最終試験は幕を開けた。

第九話：SST入隊試験（後編）

7月25日、午前9時。

孝は折り畳みシャベルで掘った穴に潜み、草や枝を付けた偽装迷彩服^{スーツ}を被って89式小銃を構えていた。ここはコメツガ林の中で、直射日光はほとんど遮られているが、腕時計が示す気温は39度。おまけに迷彩服の上からギリースーツを被っているのだから、蒸し暑さは生半可ではない。

孝は、目だけを動かして左隣のバデイを見た。

50センチほど離れた中原葵の顔はいつもの無表情で、じっと動いていなかった。鉄帽^{テツパチ}の下の目は、周囲に警戒の視線を向けている。いつでも射撃できるよう、親指はセレクターレバーに掛けられていた。

他人はすべて敵とみなすこのサバイバル試験において、バデイは唯一の味方だ。射撃においてはこの上なく優秀な葵だが、体力、精神面ではいささか頼りなく感じる。おまけに、持たされた食料は、陸自採用の戦闘糧食^{レーション}が3食分のみ。これは1人で3食ではなく、2人で3食だ。つまり、1人半日分の食料で1日半も過ごさなければならぬ。まさに「プチ・レンジャー課程」とも言うべき非情な内容だ。斉木が「陸自のレンジャー課程を参考にしているらしい」と言った意味が、やっと分かった。

音を立てるのは、危険だ。この即席塹壕^{タコツボ}に潜んで小1時間、孝と葵は、一度も言葉を発していなかった。

すると突然、葵が両目をきつく閉じた。

……なんだ？

次に、ひつ、と小さな声を出す。89式のグリップを握る葵の右手が、小刻みに震えていた。

「おい、周辺警戒しろ……！」

孝は小声で葵に囁いた。葵は目を開け、こちらを見た。

「緒方……。あたしの背中に、なんか付いてる……。……んだけど」

「それがどうした」

「う、動いてる」

虫か、ミミズか。こんなところで潜伏アンブッシュしているのだから、服の中に虫が入るのは仕方がない。取ってもキリがないし、何より、自分で背中に手を突っ込もうものならギリスーツが大きく動いて、他の候補生に発見されるリスクを負うことになるのだ。

……確かに、女子にとっては耐え難い苦痛なのかもしれないが。

「我慢しろ」 孝はなるべく小声で言った。

「だ、ダメ……。耐えられない」 葵の頬を、さっき以上の汗が滴り落ちる。暑さのせいだけではないだろう。

「じゃあ、どうしろってんだ」

「緒方、取って……」

え？ 孝は動揺した。葵は頭を前に下げた。白い首筋あしわが露になる。

孝は慌てて目を逸らした。

「取れって言っても……」

「早く……!!」

万一、葵が発狂して暴れたりでもしたら、これまでの苦勞がすべて水の泡になる。

それだけは御免だ。

孝は必死に無感情を保ちながら、葵の首筋を見た。見える範囲の背中に、蠢うごめく物体はない。

「どこら辺だよ？」

「真ん中あたり……。早く！」

こうなりや自棄やけだ。

孝は手を、葵の戦闘服の中に入れた。

「Tシャツの外じゃない！ 中よ！」

「大声だすな……!!」

葵が戦闘服の内側に着ているTシャツの中に手を入れると、何かに当たった。虫ではない。何かのホック……。？

それが何か理解して、孝は頭が灼熱するような感覚を覚えた。何かの小説で読んだ、”穴があつたら直ちに入り、コンクリートで埋め固めてもらいたい”という心境が、身をもって理解できた。

葵は黙っている。

そのホツクの数センチ奥に、諸悪の根源が、いた。

取り出すと、案の定ミミズだった。

「……ありがとう」

やっと落ち着きを取り戻した葵が言う。

「いや……」

葵の顔をまともに見れず、孝はさつさと89式を構え直し、周辺に警戒の視線を飛ばした。

午後4時25分。

孝と葵は息を極限まで殺していた。近くを他の候補生2人が歩いていたからだ。その2人は、孝たちには気づかずに数メートル横を通過した。

孝は葵に（発砲する）とハンドサインで合図した。葵が親指を立てた握り拳で応える。

孝は89式のセレクターレバーセレクトを単射にセットした。右を歩く候補生を照準し、ポイント左手を挙げて指を1本ずつ、1秒間隔で折り曲げていく。

残り3秒で、孝は左手をストツクに添えた。

孝と葵が、ほぼ同時に発砲する。

ペイント弾は2人の背中にあっけなく命中した。こちらに振り返った2人の腹に、さらに1発ずつ撃ち込んだ。

「くそっ！」

2人は両手を挙げて89式を持ち、”戦死”したことを示しながら本部の方へ歩いていった。

今の発砲音で、何人かがこちらに向かってくる可能性があった。

2人は偽装を払いのけ、移動を開始した。

「タイミングぴったりだったよね、あたしたち！」

コメツガ林の中を駆け足で移動しながら、葵が言った。孝は四方を警戒しつつ「そうだな！」と返した。

すると、正面に別の候補生たちがいた。先に気づいた葵が3発連射^{スト}で発砲する。孝が89式を構えたときには、2人とも葵が命中させていた。

恐ろしいくらい素早く、正確な射撃だ。葵の反射神経の高さを証明している。

「中原、おまえドットサイトなしで、よくそんな正確に撃てるな？」

「そう？ 普通だと思っけど……」

そのとき、孝の近くのコメツガにペイント弾が命中した。孝はすかさず木に身体を寄せ、発砲した候補生を探した。葵がハンドサインで（発見。仕留める）と告げた。

孝も発見した。地面に伏せている。

2人は同時に反撃を開始した。相手もほぼ同時に射撃を開始する。孝は反撃の火線を絶やさなかった。すると、孝の89式の弾が切れた。

「装填！」

相手も弾切れらしく、マガジンとレシーバーが擦れる音が、僅かだが聞こえた。

発砲を控えていた葵が、素早く狙いを定めて発砲する。

孝が新しいマガジンを89式に装着したところで、勝負は着いた。孝は後方を確認しようとして、身体が硬直した。10メートルほどの距離で、候補生が89式を構えているのが見えたからだ。しかも孝ではなく、葵を狙っている。葵はそのことに気づいていない。

孝はほぼ反射的に、地面を蹴っていた。

「中原！」

孝は葵を突き飛ばした。

「きゃっ！？」

葵を狙って発射されたペイント弾が、葵の後ろにあったコメツガの幹に命中する。孝は発砲した候補生に89式を向け、コッキングすると同時にフルオートで発砲した。

「うわっ！」

その候補生は肩に2発のペイント弾を食らって昏倒した。だが、その候補生のバデイが、なんとこちらに向かつて発砲してきた。

バデイが撃たれた時点で脱落したことになる候補生が、発砲する重大なルール違反だ。

孝は堪忍袋の緒が切れた。

「バカ野郎！ 失格した奴が撃つんじゃねえ！」

マガジンに残っていた20発すべてを、その候補生に向けて発砲する。だが、キレた勢いで撃つたため照準が不安定になり、命中したのは5発だけだった。

しかし、撃たれた側としては、20発のペイント弾が自分の至近距離に着弾し、理性が消えたらしい。この4日間の試験でストレスが溜まっていたというのもあるだろう。

その候補生は、「てめえ、殺してやる！」と言ったかと思うと、こともあろうにサバイバル用のコンバットナイフを抜いて孝の方に突進してきた。

孝は反射的に89式のトリガーを引いた。だが弾は出ず、撃鉄が落ちるカチリ、という音が虚しく響いただけだった。弾切れだ。マガジンチェンジは間に合わない。

刺される。そう直感し、孝は候補生がこちらに刃先を向けるコンバットナイフを注視した。ナイフが残り1メートルまで迫った瞬間、89式の発砲音が響いたのとはほぼ同時に、候補生のナイフが横に弾き飛ばされた。

葵が、89式でナイフを狙撃したのだった。

かなり近い距離だったため、ペイント弾の衝撃が強かったらしい。近いとは言え、刃渡り5センチ程度のナイフを狙撃するのは容易なことではない。

いきなりナイフが消え、呆然とする候補生に歩み寄った葵が、言った。

「……最低」

同時に葵は、候補生の首筋を89式のストックで打撃した。候補生が気絶して倒れる。葵は孝に駆け寄った。

「大丈夫、緒方!？」

「……ああ。助かったよ。ありがとう」

「良かった……」

翌日7月24日、午後6時59分。

あと1分で、試験終了。孝と葵はギリリースーツに身を隠しつつ、カウントダウンした。

「3、2、1、ゼロ!」

ゼロと同時に起き上がり、暑苦しいギリリースーツを脱ぎ捨てた。

昨日から張り詰めっぱなしの緊張が解ける。

「やったよ……緒方! これであたしたち、SST隊員なんだよね!?!」

「ああ。今日からおれたちは、SSTだ。あー、やっと終わった!」
すると、葵は89式を投げ、いきなり孝に抱き付いた。

「おい!？」

「あ、ごめんなさい! ……嬉しくなっちゃって、つい」

葵は慌てて89式を拾い、レシーバーについた砂を払った。

「それにしても、腹減ったな」

「うん……」

昨日の朝から、1.5食分の食事しか摂っていないのだ。空腹がピークだった。

「弾……何発残ってる?」

「1マガジン分だけ。……緒方は?」

「おれは、10発だけだ」

葵は、ぷつと吹き出して笑った。孝もこらえきれず笑った。しば

らく、2人はその場で笑い続けた。

孝と葵は、クリアした候補生の集合地点である林の入り口に向かった。

「長野さん、岡田さん！」

すでに到着していた2人を見つけて、孝は叫んだ！他にも、6人の候補生の姿があった。

「おう、緒方！ 中原！」

互いの健闘を称え合い、4人は固い握手を交わした。ついでに他校の合格者6人とも握手した。

「……荒井さんは？」

孝が問うと、長野が林の方を見つめて言った。

「分かん。まだ林にいるかも知れない」

荒井は、他校の候補生とバディを組んでいた。

集合完了時刻の7時30分に、東田1佐と、もう1人の試験官が歩いてきた。試験官が人数を数える。

「全員います」

「分かった」

人数の確認がとれたということは、荒井は脱落したということだ。東田が続ける。

「合格おめでとう。君たち10名は今この瞬間を持って、SSTの一員だ」

10人は歓声を上げた。

「いますぐSST徽章きしやうを授与してやりたいところだが、こっちにも事情がある。とりあえず、今からグラウンドまで戻るが、あっちには試験官を始めとして、協力してくれた方々や、マスコミも集まっている。くれぐれも失礼のないように」

10人は、SDF流の返答をした。

「ラジャー！」

金丘駐屯地・第2グラウンドで、倉田は合格者たちが帰ってくるのを待っていた。グラウンドの周囲には、今回の試験官を務めた教師や、県のSDF担当職員、参加した候補生の家族、非番の陸上自衛官、テレビ局を始めとするマスコミなどが、大勢集まっていた。

「おめでとうございます、倉田さん。坂丘高校の候補生、4人も合格したそうじゃないですか」

坂丘高校の近くに位置する小架羽おがわ高校のSDF司令の2等学佐が言った。彼は、倉田の高校時代の後輩だ。

「ありがとうございます。小架羽そっちは、2人合格だったな。おめでとう」

「ありがとうございます。でも、こっちは6人も脱落しましたよ」

「そうか……」

そして、午後7時45分、合格者たちが演習場の方から歩いてきた。合格者たちは、顔は満足気だが、全身から疲労が滲んでいるのが感じ取れた。さらに、足元がわずかにフラついている。

10人は一列に並び、東田1佐から1人ずつ、SST徽章を授与された。

「岡田さん、泣いてるんですか！」孝は思わず叫んだ。

「お、おれはやつと……SSTに……」

孝はシャンパン代わりにもらったコカ・コーラを、嬉し泣きしている岡田の頭に掛けた。

「緒方も！ ほら！」葵が孝にコーラを掛けた。

「やったな！」孝が葵に掛け返す。

この光景はけっこう有名で、毎年テレビで放送されている。孝もテレビで去年観てうらやましく思っていたが、まさか今、自分がこの場所に立っているとは。

長野は、合格者代表として、テレビ局のインタビューを受けているところだった。

続いて、孝たちのところにもテレビカメラとインタビューアーカーがや

ってきた。

「どうですか、いまの心境は？」

「メシを腹一杯食いたいです！」と岡田。大柄な岡田のイメージそのままの発言だ。

「シャワーに入りたいです！」と葵。女子らしい答えだ。

孝は「兄と、田舎の両親に報告したいです！」と本心を言った。

カメラが去った後、孝は空を見上げ、心の中で呟いた。

兄さん、おれ、SSTに入ったよ……。

この日、SST・学校特殊部隊の新隊員が10人、誕生したのだ。
った。

第十話：文化祭警備

入隊試験の後、長野、岡田は坂丘高校SSTのアルファ・チーム、孝、葵はブラボー・チームに配属された。こうして、アルファ・チーム8名、ブラボー・チーム6名の新生坂丘高校SSTが誕生したのだった。

さらに葵は、試験後のSST狙撃手養成課程を修了し、ブラボー・チームのスナイパーとなっていた。

階級が3等学曹までの隊員は、SSTに入隊した時点で2等学曹に昇進する。よって、孝と葵の階級は2曹に上がっていた。

バディが毎回入れ替わるSDF普通部隊とは違い、SSTはバディが固定されている。より危険な状況に置かれるSSTでは、バディとの信頼・連携が非常に重要となってくるからだ。長野と岡田、孝と葵がバディだ。

SSTに入隊してから、あっという間に残りの夏休みが終わった。ほぼ毎日、訓練漬けの夏休みだった。

8月28日、午後4時30分。

「いよいよ明日だな」

教室内の飾りを作る手を止めて、山崎が口を開いた。心なしか顔がニヤけている。……何がそんなに楽しみなんだ？

「ああ」

孝は作業を休まずに答えた。明日から3日間、坂丘高校の文化祭が開催される。各クラスごとに催し物、模擬店、劇などを行う、一大イベントだ。

「緒方、おれのバンド見に来てよ」

「バンド？」

「言っただけだったっけ？ 同じ中学だった坂井さかいと島津しまづとおれで、バンド組んだんだよ」

それで山崎は、文化祭を楽しみにしているのか。

「へえ……。でもおれ、SSTで警備あるから。空き時間だったら見に行くよ」

「警備？ 面倒臭そうだな。……行事の日くらい、SDFも休みにすりゃあいいのに」

「バカいえ。行事がある日に限って、浮かれるアホがいるんだ。おれたちが取り締まらないと、一般人にも迷惑がかかる」

文化祭の日は、一般人に学校が開放され、自由に出入りできるようになる。治安が悪化した昨今、暴走族やヤクザまがいの人間が侵入して騒ぎを起こす可能性は高い。実際、1週間ほど前に行われた近くの小架羽おがわ高校の文化祭では、敷地内に侵入した不良グループとSDFで武力衝突が起こり、両方に負傷者が出ている。小川高校は、県内では坂丘高校に次いで有名な進学校だ。

「その男子！ サボらずに作業しなさい！」

修飾班の班長である杏子が怒鳴り、孝と山崎は口を噤つぶんだ。

そして文化祭初日、午後3時。

「スカイウォッチャーよりブラボーリーダー。異常なし」

孝はインカムのマイクに吹き込んだ。定時連絡だ。

『こちらブラボーリーダー。了解』

坂丘高校の、グラウンドに面した屋上。孝と葵はグラウンドなど学校の敷地を見下ろしていた。葵はスナイパーで、孝は葵の観測手スポッター兼、護衛役だ。今日、屋上から警戒するバディには、空の監視者のコードが与えられている。

「暑いな、中原」

「うん。……見て、41もある」

葵は腕時計を隣の孝に見せた。

「なんでこの屋上、日陰がないんだ……」

孝はどうしようもない文句を言った。

今日は雲ひとつない快晴で、眩い太陽が容赦なく照り付けている。

おまけに2人はヘルメットにボディアーマーを着用しているのだ。暑さが尋常でなかった。

「あ、モヒカンがいる」

孝の横で、M24 SWSスナイパーライフルの照準眼鏡スコップを覗く葵が笑い混じりに言う。孝は双眼鏡を覗いた。

模擬店の列に並ぶ、赤毛のモヒカン男が見えた。

「派手だなあ」

孝も微笑した。どうでもいい話をしていないと、退屈だった。

葵のM24と孝のM4A1アサルトライフルは、SSTに配属されてから支給された銃で、弾は弱装弾を使用する。射程距離、威力、命中精度、どれを取ってもSDF普通部隊が装備する衝撃弾よりも性能が高い。ただ、敵の武装が強力な場合や中・遠距離戦の場合を除いて、SST隊員は拳銃弾を使うMP5Kケルツ-PDWサブマシンガンを用いる。小銃弾では威力が強すぎるからだ。

初日と2日目は大きな混乱もなく、無事に終了した。

そして、坂丘高校文化祭は最終日、3日目を迎えた。

8月31日、午前11時。孝と葵のバディは、巡回に出た。

一般人に威圧感を与えるのを防ぐため、SDF棟の警備と屋上狙撃に就く隊員以外は、制服での巡回を厳命されていた。巡回中の武装は、シグザウアーP226自動拳銃オートマチックと、特殊警棒のみ。P226は、SSTの制式採用銃だ。少々頼りない気もするが、この炎天下、完全装備に重武装で歩き回ることに比べれば、よっぽどマシというものだった。それに、SDF棟には、2名のSST隊員を含む、8名のSDF隊員が常時待機している。無線1本で、すぐ完全装備で駆けつけられるようになっていた。

グラウンドを一通り見回ってから、校舎内に入った。校舎内はクーラーが効いている。外とは天と地ほどの差があった。

「あー、生き返る」

「ワイシャツがびしょびしょ。あとでシャワー入って来よっと」

葵が言う。SDF棟には、夜間警備で泊り込むSDF隊員のためにシャワールームが設置されている。だが孝はなぜか、顔がわずかに赤くなつた。

教室では、射的やお化け屋敷、迷路などが行われ、生徒や親子連れで賑わっている。

「楽しそうだなー。ちよつと遊ばない？」

葵が悪戯いたずらな笑みを浮かべて言う。

「……職務中だぞ」

「制服だし、大丈夫だって！ ちよつとだけ。ね？」

葵に詰め寄られ、孝はしぶしぶ頷いた。

「じゃあ、一箇所だけな」

そのとき、悲鳴が聞こえた。すると、前方のフリーマーケットを催している場所から、1人の男が慌てた様子で出てきた。両手で大きな紙袋を抱えている。女子生徒が続けて出てきて、叫んだ。

「万引きよ！」

さらに、岡田が出てきた。

「緒方、そいつをとっ捕まえろ！」

孝は身構えた。大学生くらいの若い男が突進してくる。「そこをどけ！」

孝は突進してくる勢いを利用して、男を背負い投げで床に叩きつけた。

「ぐはっ！」

そのまま馬乗りになり、暴れる男を押さえつける。

「中原、手錠！」

葵は待つてましたと言わんばかりに、孝に金属製の手錠ハンドカフを渡した。「窃盗の現行犯で逮捕する！」 孝は素早く男の両手を後ろに回し、ハンドカフを掛けた。

すぐ、岡田が走ってきた。

「この野郎、おれのクラスの催しで万引きをするとは、いい度胸じゃねえか！ あとで警察に突き出してやる」

「ご、ごめんなさい、でも、警察だけは」
「黙れ！」

岡田は「サンキュー、緒方、中原」と言い残し、男を連れて行った。

その直後、SST専用回線で連絡が入った。

『ブラボー・リーダーよりオールハンド。グラウンド周辺に怪しい集団を発見した。全員、SDF棟に集合しろ』

緊張した声で、ブラボー・チーム班長の渡瀬智久^{わたせともひさ}2等学尉の声が骨伝導式イヤホンから流れる。骨伝導式イヤホンは耳を直接塞がないイヤホンで、SSTで採用されている物だ。

渡瀬は、2年生でブラボー・チームの班長を務めている。

孝と葵は、顔を見合わせ、廊下を駆け出した。

模擬店が立ち並ぶグラウンドの真ん中を、ずかずか歩く20名の集団。全員がだぼだぼの黒い特攻服に、サングラスを着用していた。まるで一昔前からタイムスリップしてきたかのような、時代遅れのヤンキーたちだった。周りの高校生や一般来場者たちは、完全に引いている。時折、周りの人間を「なに見とんじゃコラア！」などと怒鳴りつけている。

彼らの進行方向に、8名のSDF隊員が立っていた。近くを巡回していたので、急行するよう指示を受けた隊員たちだった。

「……なんじゃ己^{おのれ}ら。文句でもあんのか」

先頭に立つ、煙草を啜えた角刈りの中年が言った。リーダーらしい。

SDF隊員の学曹長が口を開いた。

「迷惑です。帰って下さい」

「なんやと、客に帰れ言っんかこのボケ」

「客とか言う以前に、他の来場者の迷惑になることをやめて下さいと言ってるんです。そうしてもらえないのなら、我々は実力であな方を排除します」

「あ？ なんや、そのチャカ撃とう言うんか。衝撃弾とか言ったか、オモチャ同然なんじゃろ」

リーダーらしい男は学曹長の腰のホルスターに収まったM92Fを指差した。オモチャと聞いて、リーダーの後ろの男たちがケラケラ笑った。

「うぜえんだよ、帰れよ！」 学曹長の後ろにいた3曹が、思わず言ってしまった。

一斉に笑いが消える。

「んだとコラア！！」 男が3曹を突き飛ばした。

「何するんだ！」

学曹長が前が出る。

「あん？ やんのかテメエ！」

男が学曹長に殴りかかろうとしたとき、駆けつけた完全装備のSST隊員12名が、特攻服の男たちに対峙するように展開した。手には、MP5-K短機関銃クルツが握られている。

高校生のSSTとはいえ、戦闘装備の見た目は警察や自衛隊の特殊部隊と大差ない。男たちはさすがに怯んだようだった。

「学校防衛隊法の学校治安維持規則に基づき、ただちに本校の敷地から退去しない場合、あなた方を拘束します」

リーダーの正面に立った渡瀬が淡々と告げた。

「はあ？ 拘束やと？ そのオモチャでか」

リーダーはなおも抗弁する。渡瀬はしつこい奴だな、と内心に呟き、「我々には」と続けた。

「弱装弾の使用が、……」そこで、渡瀬はクルツのコッキングレバーを引いて見せた。「……許可されています」

治安の悪化に伴い、弱装弾を使用する拳銃の販売・所持が認められている現在、弱装弾の意味を知らない大人は、ほとんどいないに等しい。

リーダーは窮地に立たされた。SSTとまともに戦って勝てる確率はほぼないが、かといってこのまま大人しく退却したのでは部下

に面子^{メンツ}が立たない。

するとリーダーは辺りを見回し、偶然そこにいた女子生徒を掴んだ。女子が悲鳴を上げた。

「きゃ!?!」

「どっじゃ、これで撃てんやろ!」

孝はリーダーに捕まった生徒の顔を見て、思わず叫んだ。

「内田!」

「その生徒を放せ!」

渡瀬がクルツをリーダーに向けて構える。だが、射線上に美菜が重なり、発砲できない。

「撃てるもんなら撃ってみんかい!」

突然のリーダーの乱心に、周囲の部下たちは困惑していた。

渡瀬は、思い出したように校舎の屋上にいるスナイパーを見やり、マイクに吹き込んだ。

「結城^{ゆづき}、何をやってる……!」

『まだ武器の所持が確認できない。無理だ』

イヤホンに返ってきた声は、冷静だった。

孝は、我慢できずに渡瀬の前に出て、リーダーに向けてクルツを構え、安全装置を解除した。

「放せ! 撃つぞ!」

「ほう、撃ってみいや!」

興奮したのか、リーダーは特攻服の中から折り畳み式ナイフを取り出し、右手で美菜に突きつけた。

美菜は怯えきっている。

孝はトリガーガードに掛けた人差し指を、トリガーに掛けた。だがつまぐ照準できず、手が震えていた。少しでも照準が狂えば、弾が美菜に当たる。

無理だ。

そう思った瞬間、ビシツという音と共に、リーダーがナイフを地面に落とし、悲鳴を上げた。

「ぐあつ!?!」

美菜が開放される。孝はなおも、リーダーに銃口を向けていた。リーダーの右腕から、血が滴っている。

「痛つてえ……痛てえよ」

すかさず渡瀬がリーダーの両手に手錠を掛けた。部下たちは「逃げろ!」と叫び、校門の方に一斉に走り出した。

「貴様ら待て! 助けんかい!」

リーダーは叫んだが、すぐに腕の激痛に呻き、観念した。

屋上からリーダーの右腕を狙撃した結城翔一^{しゅういち}二等学尉は、「危なかつたな」とイヤホンに吹き込んだ。結城は、アルファ・チームのスナイパーだ。

『ああ。お前のおかげで助かった』と渡瀬の声。

「あんまりスナイパーに頼りすぎない方がいいぜ、ブラボー・チーム班長殿」

『分かつてる。……それにしても、正確なスナイピングだったな』
「いつも通りだ」

結城はM24を持って立ち上がり、晴れ渡る空を見上げた。

午後3時45分。来客はほとんど帰り、生徒たちは片付けを始めていた。

結局、孝と葵はどの催しにも行く時間が無かった。

「あーあ、つまんないの」

葵が、むすつとした顔で言う。

「仕方ないだろ。……いや待てよ、おれのクラス、まだ間に合うかも」

2人は1年3組の教室に向かった。

「おう、緒方」

山崎や杏子たちがいた。孝は両手を合わせ、請う。

「あのさ、頼みたいことがあるんだ」

数分後。

1年3組の入り口には、小学生のような笑みを浮かべた葵がいた。「良かった！ まだ片付けてないクラスあって。しかもお化け屋敷だよ？」

「ああ」

案外、子供っぽい面もあるらしい。

「早く行こ、緒方」

「え？ おれも？」

「か弱い女の子を1人でお化け屋敷に行かせる気？」

か弱くはないだろう。孝は心の内でぼやいた。

最後だし、着いて行ってやるか。

教室に入った。中は暗い。

数秒後、2人は大絶叫した。

翌朝、教室。

「どうだった、昨日のサプライズは？」

杏子がニヤニヤしながら孝に聞いた。

「どうもこうもない。……いくら最後の1回を頼んだからって、ク

ラス全員で同時に襲ってくるヤツがあるか！」

「迫力満点だったでしょ。あんたも大声で叫んでたし」

「たく、こいつらは。」

最後の最後に、お化け屋敷で大絶叫するという情けない姿を、クラスメイト全員に見られてしまった。

お化け屋敷から出た後の葵の満足気な顔が、孝の記憶に不思議なほどはつきり残っていた。なにが満足だったんだ？

第十一話：アルファ不在

「もしもし……岡部おかへです」

『今日はどうした。前の威力偵察の失敗を詫びるつもりか？』

「いまさら、そんなつもりはありません」

『そうかね。じゃあ次のSST合同訓練……9月5日のことか』

「はい。SSTの半分がいない間を利用し、3個小隊、54名で坂丘高を急襲します。……については、5.56ミリ弾を1万5千発程お願いしたいのですが」

『……いいだろう。それと、こちらに新作のRPKが4挺あるんだが、使ってみるかね』

「RPK……軽機関銃ですか。しかしRPKは7.62ミリ弾では」
『いや、5.56ミリ仕様のRPK74だ。弾の共用は問題ないし、75連ドラムマガジンの試作品もある。分隊支援火器があれば、君らも戦いやすいだろう』

「……分かりました。有難く使わせてもらいます」

『ああ。じゃあ、納期が決まったら連絡する』

「はい。では、失礼します」

岡部義樹おかへは、携帯電話を机に置いた。

彼は、坂丘、小架羽、横崎よこさきの3高校のFD T隊員を事実上、統括している高校3年生だった。この3校には、合わせて84人のFD T隊員がいる。

岡部はFD T隊員として2年5ヶ月、学生の非行防止法、そしてSDFと戦ってきた。

だが、その結果はどうだ？ ここまで必死に戦っても非行防止法は変わらず、部下のFD T隊員やSDF隊員を始めとする同年代の高校生が傷ついてきただけじゃないか。

だから、今回の急襲作戦は、必ず成功させる。坂丘高校を占拠し、生徒を人質として、政府に非行防止法という悪法を即刻無くすよう

要求する。

坂丘のSDF隊員には悪いが、正義のためには仕方がない。

9月5日、午前9時3分。

いまは、古典の授業中だ。

孝は教室の窓から、グラウンドの方を眺めた。校舎寄りのグラウンドに、いくつもの土嚢が積み上げられ、数人のSDF隊員が歩哨に当たっている。

今日は、県内のSSTが合同で訓練を行う戦技競技会が、金丘駐屯地の演習場で行われる。そのため、SSTのアルファ・チームは現在、学校にいない。学校防衛の要であるSST隊員が半数近くいなくなるのだから、FDTの襲撃にはこの上ないチャンスと言えた。そのため、土嚢を積んで弾除けを作り、歩哨を立たせて襲撃に備えているのだった。

近くには小架羽高校や横崎高校もあるが、学校の立地上、坂丘高校は襲撃に適している。FDTが攻撃を仕掛けてくる可能性は高かった。

そのとき、銃声が響いた。始まったようだ。

『緊急連絡。現在、多数のFDT隊員が学校近くに展開している模様。生徒は教室の窓を閉じて下さい。SDF隊員は即刻、SDF棟に集合して下さい』

「行くぞ、友井！」

「ああ！」

孝と友井は、教室を飛び出した。

午前9時13分。

完全装備のSSTおよびSDF普通部隊が応戦するため、校舎の外に展開した。すでに、小競り合いが始まっている。

「土嚢を盾にしろ！……いいか、1人も校舎内に入れるな」

渡瀬が叫んだ。SST隊員はブラボー・チームの6人しかいない

ため、玄関方面に3人、グラウンドに2人、屋上に葵が配置された。SST隊員たちの間に、多くのSDF普通部隊の隊員が並んだ。FDT隊員たちは、数10メートルまで迫っている。

「発砲許可！ 射っ！」

グラウンド側の土嚢の後ろに来た孝は、M4のセイフティを解除し、トリガーを引いた。フルオートで放たれた小銃弾がFDT隊員たちの近くに着弾の火花を散らす。こちらに近づきつつあったFDT隊員たちが、木に隠れるのが見えた。

あちこちで無数の発砲音が立て続けに響き、空薬莖が撒き散らされていく。

まるで、本当の戦場にいるようだ。

M4の弾が切れ、孝は土嚢に身を隠した。マガジンを交換していると、孝の隣にいたSDF隊員が呻き声を上げ、持っていたMP5を落とした。

「大丈夫か！？」

「う、腕を撃たれました……！」

孝は無線で報告した。

「バンカーより司令本部！ フォックス・リーダー IIA（負傷者）1名！」

近くのSDF隊員に、撃たれた隊員を医務室に連れて行くよう指示し、再びM4を構える。

孝は不自然な事に気づいた。何人か、やけに連射速度が速く、マガジンチェンジの少ないFDT隊員がいる。まさか……。

「バンカーよりブラボー・リーダー！ 敵に軽機関銃マシンガンナー手があります」

「こちらブラボー・リーダー。確認した！ RPKだ」

冷静な渡瀬の声が返ってきた。

これまで見てきたFDTの武装はAK-100シリーズのアサルトライフルや拳銃のみで、RPKなどの軽機関銃は無かった。どうやらFDTが新武器を仕入れたらしい。

「中原、屋上そっちから狙撃できるか！ 西側のグラウンドの木の陰だ」

『よく見えない……！ 緒方、数発でいいから撃ち合える？』

緊張した葵の声が返ってきた。撃ち合うのを見て、軽機関銃の位置を特定する気らしい。葵は優秀だが、実戦経験はまだ少ない。

「了解、じゃあ行くぞ！」

孝は土囊の陰から身を乗り出し、音を頼りにM4を発砲した。すぐにRPKが撃ち返して来る。

孝が隠れると、頬から血が出ていた。だが幸い、カスリ傷だ。

「どうだ？」

『オーケー！』

連射の銃声に混じって、スナイパーライフルの銃声が響いた。

葵は思わず、舌打ちした。

孝のおかげでRPK射手の位置が分かり、発砲したものの、手元が狂って外れたからだ。

慌ててM24のボルトを引き、次弾をチャンバーに送った。ボトルネック形状の空薬莖が屋上の地面に落ち、金属音を響かせる。

「ごめん、次で仕留める！」

再びスコープを覗き、RPKに十字線レティクルを重ね、深呼吸してからトリガーを引いた。

M24から放たれた7.62ミリ弾が、RPK射手の右腕を直撃する。

すかさず、RPK本体も狙撃し、撃てないよう破壊した。

『初スナイピングにしては上出来だ、中原』
渡瀬が褒めた。

「ありがとうございます！」

『玄関方面にもRPKがいる。そっち頼む！』

「了解！」

今回の戦闘は、やけに長引いており、しかもSDF側が少し不利だった。その原因が、屋上から狙撃できない位置にいる、2人のRPK射手だ。

『緒方、野球のバツクネット方向のR P K、排除できないか!?!』
「ここからは無理です!」

孝はM4のマガジンを交換しながらマイクに吹き込んだ。足元には3個の空になったマガジンと、無数の空薬莖が散らばっている。M4のマガジンは、残り4個。孝は射撃モードをセミオートに変更した。土囊からM4を構えると、木の陰から出ているF D T隊員の片足が見えた。孝はM4のドットサイトを覗き、赤い点をそのブーツに重ね、1発撃った。

踝^{くるぶし}辺りを撃たれたF D T隊員が転倒する。足を押さえ、呻き声をあげた。近くのF D T隊員が撃たれた隊員を引きずり、後退していく。

なるべく早く、止血してやれ。

孝は心の内で呟いた。直後、孝が隠れる土囊に大量の銃弾が命中した。R P Kに狙われたらしい。

孝はM4を突き出し、銃声のする方向にフルオートで撃った。だが、すぐに弾が切れた。

そのR P Kのせいで、すでに5人の隊員が戦闘不能になった。S D Fの方が圧倒的に不利だ。

『各自、持ち場を死守しろ! F D Tを近づけるな』
渡瀬の叫びが、イヤホンから伝わった。

逆転するには、葵の死角にいるR P Kを潰すしかない。孝は腹を決めた。

「渡瀬さん! おれがR P Kを潰します」

『どうする気だ?』

「サッカー部の用具庫まで行けば狙えます」

60メートルほど離れたところだが、すぐ近くにF D T隊員たちが展開していた。

『よせ! もうじき小架羽のS S Tが援護に到着するはずだ』

渡瀬が珍しく、声を荒らげた。

「時間が無いんです! 行きます!」

孝は新しいマガジンをM4に装着し、近くのSDF隊員に「援護射撃頼む！」と告げた。

あのバカ。渡瀬は内心そう思った。

FDTの真正面から突っ込もうとするなんて、自殺行為だ。

「中原、緒方を援護しろ！」

「了解！」

葵の返事を聞いてから、渡瀬は自分のM4のマガジンを交換し、近くにいたSST隊員に言った。

「ここ頼む！」

渡瀬は、グラウンドの方に駆け出した。

野球のバックネットに陣取った岡部は、戦況に満足していた。

RPK射手の2人はスナイパーにやられたが、まだ2人残っている。さらに、部下たちの士気も高まっている。

いける。SDFに勝つことができる。

岡部は思わず、笑った。

だが、視界に白い煙が見えて、岡部は目を細めた。発煙筒か……？ その直後。

白い煙の中から1人の男が現れたかと思うと、その男は正面にいたFDT隊員2人を素早く撃ち倒した。ボディアーマーを着用しているとはいえ、近くで弱装弾を食らえば骨が折れるほどの衝撃になるはずだ。

単独で特攻か。哀れな男だ。

孝は援護射撃の助けを借りつつ、M4をフルオートで掃射しながら用具庫に近づいた。あと30メートルで、弾が切れた。

目の前には、マガジンチェンジを完了したFDT隊員がいる。ヤバイ。

そう思った次の瞬間、そのFDT隊員が後ろ向きに昏倒した。

葵か……？

『危なかったわね、緒方！』やはり、葵が狙撃したのだった。

「すまん、借りができたな！」

指切りバーストで発砲しつつ、用具庫の裏に隠れる。ちょうどFDTの側面に回った形だ。用具庫に銃弾が集中する。

見つけた。RPKだ。

孝は伏せた状態で、草の隙間からRPKの射手を照準し、トリガーを引いた。3発が射手に命中し、2発がRPKを破壊する。

「完了！」

『援護する！ 戻って来い！』

渡瀬の声だった。だが、孝は愕然とした。M4のマガジンが無い。すべて撃ち尽くしたのだった。

孝は舌打ちし、M4のスリングを肩に掛け、レッグホルスターからシグP226自動拳銃を抜き、撃鉄を起こした。

「戻ります！」

P226を片手で発砲しつつ、全速力で土囊の方に戻る。走っているとき、何発かがヘルメットやボディアーマーを掠めた。

土囊の後ろに辿りついた時、P226は弾切れになっていて、遊スラ底イトがホルドオープンしていた。

「このアホ！ 無茶しやがって、普通なら死んでるぞ！」

渡瀬が孝のヘルメットを小突いた。

「すいません」

「まったく……これ使え」

渡瀬はそう言って、M4のマガジンを孝に渡した。

「どうも……」

その後は、あっけなかった。小架羽高校のSST隊員4人が援護に到着し、さらにFDTは弾薬が尽きてきたため、形勢は逆転。FDT隊員は次々に、撤退を開始した。

そして、午後2時56分。戦闘は終結した。

怪我人はSDF側が19名、FDT側が22名だった。奇跡的に、死者は出なかった。

第十二話：犬捕獲作戦！

9月8日、午後10時。

孝と葵は、校舎内の巡回に出ていた。

「それにしても、夜の学校って不気味だよな」

照明が落とされ、月明かりで照らされているだけの廊下を歩きながら、葵が口を開く。

「ああ。なんか、出てきそうだな」

孝は微笑して返した。葵も笑った。話し声以外は、2人の足音と、装具が擦れる音だけが響いている。

それにしても、と孝は思う。

葵の言う通り、夜の学校は不気味だ。もうかなりの回数^マの夜間巡回を経験したが、この居心地の悪さは消えなかった。

SSTに配属されてから、学校に泊り込んで行う夜間警備の回数は、週2日から3日に増えた。SSTは、SDF普通部隊に比べて人数が極端に少ないせいだ。今日は、合わせて10人のSDF隊員が夜間警備に就いている。

「ねえ、なんか物音しない？ 理科棟の方から」

葵が立ち止まり、言った。孝も耳を澄ませた。

「本当だ。……柔道部か？」

今日は、柔道部が学校に泊り込んで合宿を行っている。だが、柔道部が就寝場所に使っているのは体育館だ。理科棟で物音がするのは不自然だ。一応、物音を確認するために2人は理科棟の方へ向かった。

理科棟、3階廊下。生物実験室のドアが、開いていた。中から話し声が聞こえる。

「巡回02よりSST室。生物実験室に不審者発見。複数名。これから確保する」

孝はマイクに吹き込んだ。

『こちら渡瀬。了解、今からそちらに向かう』

最悪、不法侵入者やFDTの可能性もある。2人はMP5クルツを構えつつ、生物実験室のドアの前に移動した。

クルツのフラッシュライトを点灯させ、生物実験室に突入する。

「SSTだ！ 動くな！」

120ルーメンの閃光が闇を切り裂き、室内にいたジャージ姿の2人を照らす。2人は高性能ライトの直撃を受け、顔を手で覆った。孝と葵はクルツの銃口を向けながら、2人に近づいた。

「ちよ、ちよつと待て、おれたちは……」

孝は、その声に聞き覚えがあった。

「お前、柔道部の横川か？」

「そつだよ……」

振り返ったジャージの男は、孝のクラスメイトの横川聡さとしだった。

隣にいる男も、体格からして柔道部のようだ。

「何やってんだ、こんな所で」

「何って……肝試し」

「は？」

次の瞬間、渡瀬とブラボー・チームの佐伯久幸さえきひさゆき学曹長が突入してきた。

「無事か、緒方！ ……って、これはどういう状況だ」

真剣な表情もつかの間、渡瀬は呆れ顔でクルツの銃口を下ろした。

「届け出もせず、教室内に忍び込むとは何事だ！」

柔道部の1年生2人を前に、事情を聞いた2年の渡瀬が怒鳴る。

「すみませんでした」

横川が頭を下げ、言った。

「謝って済むか……！ いいか、こっちは遊びで夜間警備やってる訳じゃないんだ」

渡瀬は、今にも2人に殴りかかりそうな勢いだ。

「渡瀬さん。こいつら、悪気は無かったんですし……」

クラスメイトが言い詰められているのを見て、孝は口を挟んだ。

「おまえは黙っている！」

孝を怒鳴りつけてから、渡瀬はきまり悪そうな顔をした。

「……分かったよ。ただし、柔道部には嚴重注意を言い渡す。覚悟しておけ」

渡瀬は再び2人を睨み付けてから、「お前らは巡回に戻れ」と言い残し、佐伯曹長と共に、柔道部2人を連れて行った。

「そうだったの。渡瀬らしいわね」

午後11時18分、SST室。怒った渡瀬の様子を話すと、SS
Tアルファ・チームの三沢理香^{みさわりか}2等学尉が笑いながら言った。渡瀬
と同じ2年で、校内では容姿が端麗なSST隊員で有名だが、柔道
に堪能で、男子が馴れ馴れしく声を掛けようものなら、半殺しにさ
れるとか。

いま、SST室には理香、孝、葵の3人しかいなかった。渡瀬と
佐伯は巡回に出ている。

「あんなに怒ってる渡瀬2尉、初めて見ましたよ」

「そっか。あたし、去年あいつと同じクラスだったんだけど、なん
て言っのかな、正義感が強すぎる、というか」

「正義感が強すぎる、ですか」

葵が首を傾げる^{かし}。

「うん。あたしたちがSSTに配属された頃……ちょうど1年前ね。
登校時間にFDTが襲撃を掛けてきたことがあったんだけど、その
とき、1人のクラスメイトに銃弾が当たったのよね。もちろんFD
T隊員が撃った弾で、足を掠めただけだったんだけど。気づいた渡
瀬は、撃ったFDT隊員に銃も持たずに突っ込んで行った」

「銃なしで……？」

「うん。あいつも登校した直後で、丸腰状態で、あたしたちが駆
け付けたときには、FDT隊員に馬乗りになって、ボコボコにしち

やってたのよ」

「丸腰で、武装したFDT相手に？」

「す……」

「でしょ？ いったん火がつくと、手を付けられなくなる人なのよ、渡瀬は」

普段は冷静沈着な渡瀬なので、この話は以外だった。

「その点、緒方、あんた渡瀬に似てるんじゃない？」

「おれがですか」

「うん。聞いたわよ、この前のあたしたちが訓練に行ってた時の戦闘。あんた、1人でRPK潰しに突撃したんだって？」

いきなりその話題を出されて、孝は動揺した。

「三沢2尉、なんでそれを……」

「そうなんですよ、あたしが狙撃支援しなかったら、緒方、いまごろ天国です」

葵が口を挟む。

「中原、おまえまで……！」

理香は声を出して笑った。

「そうなんだ、じゃあ緒方、葵はあんたの命の恩人ってことじゃない」

孝は返す言葉が思いつかなかった。すると、渡瀬と佐伯が巡回から戻ってきた。

「お帰り、2人とも」理香が言った。

「ああ……。なんか、盛り上がってるみたいだな」

ボディーマーを脱ぎながら、渡瀬が言った。

「渡瀬、あんたの話をしてたのよ」

理香が笑い混じりに言う。

「おれの……？」

一瞬、きょとんとしてから、渡瀬は孝の方を見た。

「緒方、おまえ」

「あ、いや、その……」

武器庫にクルツを置いてきた渡瀬と佐伯が、ソファに座った。

「また余計なことしやがって。三沢に話すと、話がややこしくなるんだよ」

「何よその言い方。まるであたしが話を誇張するみたいない言い方じゃない」

「事実だ。おまえ、この前も……」

渡瀬がニヤリと言う。理香は慌てて渡瀬の口に掌てのひらを当てた。

「ストップ！ 1年の前で何言おうとしてるのよ、あんた」

渡瀬は理香の手をどかしつつ、「口を塞ぐな……！」と言って、さらに続けた。

「だいたいおまえは、自分の思うようにならないとすぐ柔道技に持ち込むところが駄目なんだ」

「駄目ってなに。それを言うならあんたも……！」

理香はそこで言葉を切った。

葵が、クスクス笑い始めたからだ。

「……どうしたの、葵？」

理香が不思議そうに問う。

「いえ……。お2人とも、仲いいなあって思ってた」

葵が笑いの残る声で言った。

「いつもこんな感じなんだよ、この2人は」と佐伯。

渡瀬と理香は一瞬だけ目を合わせたが、すぐ顔を逸らした。2人とも、わずかに顔を赤らめている。

そんな感じで、夜間警備の夜は更けていった。

午前3時32分。

3時間の仮眠を終えた孝と葵は、再び巡回に出発した。

「眠いね……」

目を擦りながら、隣を歩く葵が言う。

「ああ。……これ、眠気覚めるぞ」

孝はそう言っつて、ミント味のタブレットを葵に渡した。

「ありがとう。……辛っ！ なにこれ！」

「ドライハード味。眠くなくなつたろ？」

「うん……。でも刺激が……」

「バディが寝ボケてると困るからな」

「もう大丈夫。……ふう」

本当に辛かつたようだ。

しばらく歩いていると、葵が言った。

「あのね、緒方」

「なんだ」

「……屋上、行ってみない？」

「……なんで？」

「いいから、行こ！」

葵に手を引つ張られ、孝はしぶしぶ屋上に向かった。

屋上は、当然だが暗かった。月が出ているので、顔くらいは判別できるが。

今日は、雲がほとんど無かった。無数の星の輝きが、漆黒の空に映えている。

「きれい……」

葵が、空を見上げていった。視線を下げれば、駅の方の中心街の明かりが煌々としていた。坂丘高校は、文字通り丘の上であり、中心街の方はよく見渡せる。

「ああ……」

2人はしばらく、無言で夜の景色を眺めていた。

「あのさ」

沈黙を破つたのは、孝だった。

「ん？」

「景色を見るために屋上に来たのか？」

葵は数秒、間を置いて答えた。

「うん……って言ったら怒るよね、緒方。職務中だろ！って」

「別に……怒らないけど。たまには息抜きも必要だ」
そう言つと、葵は意外そうな顔でこちらを見た。

「あの2人……」

「え？」

「渡瀬さんと理香さん。お似合いだと思わない？」

「ああ。どっちもモテそうだしな」

「そうじゃなくて。喧嘩するほど仲がいいって言うのか……」

そんな話題をなぜ、いまここで持ち出すのか。孝は葵の心情が読めなかった。

あまり長居すると、まずい。

「……そろそろ、戻るか」

「うん」

2人は数秒間、無言で目を合わせてから、室内に戻った。

SST室に戻ると、渡瀬と理香がテレビを見ていた。世界遺産ドキュメントの番組だ。佐伯は仮眠をとっているらしい。

「……お帰り。遅かったじゃない」

理香が言った。

「ええ、ちよつと」

「もしかして、寄り道とかしてた？」

理香がニヤつきながら問うた。

なんて勘のいい人なんだ。孝は内心に呟いた。

「しませんよ、そんなこと」ヘルメットを脱ぎつつ、葵が答える。

「そう。つまんないの」

本当につまらなさそうな声で、理香が言う。

すると、無線が入った。

『こちら、巡回中の細川です！ 待機中の方、誰か応答願います』

渡瀬が素早く受話器を取った。

『こちらSST室。どうした』

『1階で犬を発見しました！ 今追いかけています』

犬？　なんで？　S S T室にいた4人は顔を見合わせた。
『指示願います！』

「今からそちらに向かう。　場所はどこだ」

『1階、生徒玄関前の廊下です！』

「了解。そのまま追跡してくれ」

渡瀬は受話器を置いた。

「犬の捕獲に行くんですか？」　孝は渡瀬に聞いた。

「仕方ないだろ。おまえたちも来い！」

「え！」

「つべこべ言うな！　行くぞ！」

渡瀬はS S T室に常備してあるハンディライトを掴むと、S S T室を飛び出した。

そして、S D F隊員による犬捕獲作戦が始まった。

孝は、1階に向かって階段を下りていた。すると、下の方から1匹の柴犬が駆け上ってくるのが見えた。孝が捕まえようと身構える。暗くて、足元がよく見えなかったというのもある。その柴犬は孝の足元をすりと駆け抜けた。

「こちら緒方、犬は3階、図書室方面に移動中！」

孝は柴犬を追いかけながら無線に吹き込んだ。

『了解。いま向かう』

渡瀬の声だ。

『緒方、どんな犬だった？　かわいい？』

理香の楽しそうな声がイヤホンから流れる。

『三沢！　S S T無線を私語に使うな！』

渡瀬が怒鳴った。

『いいじゃんケチ』

『ケチだと……！』

「犬種は柴犬、色は黒と白です！　見えた限り」
思わず答えてしまった。

「緒方、おまえ……！」

「柴犬！？ やった、あたし柴犬好きなのよね」

渡瀬の声は、嬉しそうな理香の声に消されて聞こえなかった。

「あたしも好きです！ かわいいですよね、柴」

とつとつ葵まで参加してきた。

「中原……！」

「じゃあ、捕まえたらSST室で飼いますか？」

孝はさらに言ってしまうていた。

「賛成ー！」 理香と葵が、ほぼ同時に答える。

「おまえら人の話を聞けえー！！！！！」

渡瀬の怒鳴り声が、半分ほど直接聞こえていた。

午前5時9分。

「確保！」

3階、3年教室前の廊下。渡瀬が柴犬に飛びついた。約1時間かかって、ようやく作戦は終了した。

「くそ、てこずらせやがって」

渡瀬は捕まえた柴犬を抱き上げた。そこに、捕獲に加わったSDF隊員らが集まった。

「かわいい！」

理香が柴犬を渡瀬から奪い、抱き上げる。

全体は黒く、部分的に白い模様がある柴犬だった。かなり小さい。

おそろくまめ柴だろう。

「首輪ないな。野良犬ですかね？」 孝が言った。

「さあ……。で、これからどうするんだ。この犬」

渡瀬が言つと、その場は沈黙した。

午前5時24分、SST室。

「とりあえず、牛乳あげてみますね」

言いつつ、葵が牛乳を注いだ紙製の皿を柴犬の近くに置く。喉が

渴いていたようで、ごくごくと飲み始めた。

佐伯はまだ仮眠中なので、4人でその様子を見つめた。

「この子、どうするんです？」葵が言った。

「あとで、倉田1佐に報告してみる」

渡瀬が腕を組んで言う。

「黙ってここで飼っちゃえば良くない？」と理香。

「絶対バれますよ……」孝は呟くように言った。

「そうかなあ……。いい案だと思ったんだけど」

「とりあえず名前だけでも決めとくか」

そう言ったのは、以外にも渡瀬だった。

「あら、以外に乗り気じゃない」理香が言う。

「……そんなことはない」

孝は思いついたことを言ってみた。

「小さいからチビ」

「そのままだろ」

「黒いからクロ」

「模様は白だ」

「ポチ」

「ありきたり過ぎるだろ……」

3人が名前を挙げ、渡瀬が一蹴した。

「文句ばかり言わないでよ」

「おまえらがテキストな名前ばっか言うからだろうが！」

渡瀬が怒鳴った数秒後、葵が口を開いた。

「じゃあ、渡瀬さんは何かいい案あるんですか？」

午前6時21分。

「テツ、こつちおいで！」

葵と理香が、テツと名づけられた柴犬と遊んでいる。無論、雄だ。

「結局、普通の名前ですね」

「いいだろ、日本犬っぽくて」

名付け親の渡瀬が言う。どことなく満足げだった。

その後、事情を倉田に話したところ「世話さえちゃんと出来るのなら、いいんじゃないか」と、あっさり飼うことを許可された。

そうして、テツはSST室に住み始めたのだった。

第十三話：敵は FDT に非ず

午前7時54分。孝はいつも通りに校門を通った。いつも通り野球部やサッカー部の朝練を横目に眺めつつグラウンドの横を歩き、いつも通りにSDF棟に入った。入り口のSDF隊員と敬礼を交わし、いつも通りにSST室に足を踏み入れた。

そこにあつた光景は、いつも通りではなかった。

「おはよう、テツ」

テツは、孝が入室すると同時に駆け寄ってきて、尻尾を振りながら足元をクルクル回った。孝はその頭をそつと撫で、バッグを下ろした。

「あら、緒方」 武器庫から出てきた理香は、ベルトに警棒のホルスターを装着しているとところだった。

「三沢2尉。おはようございます」

「おはよ。……にしても、あんたによく懐なついてるわねえ、テツ」

ホルスターに警棒とP226を挿した理香が、孝の足元のテツを見て言った。

「そうですか？」

「そうよ。だってあたしが入ってきた時と反応違うし」

不満そうに言った理香は、自分のバッグを持ち上げた。「じゃ、テツに朝ごはんあげといてねー」

「え？」

理香は素早くSST室から出ていった。まったく、あの人は。孝は昨日から置いてあるドッグフードを皿に出し、おすわりするテツの前に置いた。テツが食べている間に武器庫に入り、P226とマガジン、警棒を取った。ソファに腰掛け、テツの様子を眺めていると、SST室に誰かが入ってきた。

テツは食事中にもかかわらず、入り口のドアに疾走する。

「あ、テツ！ おはよ〜」

葵はそう言つて、しゃがんだ。テツは葵に飛びつくようにして、頬を舐めた。孝のときより元気よく尻尾を振っている。

「テツ、くすぐりたい！」

嬉しそうに笑つた葵は顔を上げ、そうやく孝に気づいた。

「緒方くん。おはよ」

「……中原、今までおれに気づいてなかつたら」

葵は首をぶんぶん横に振つた。

「そ、そんなことないよ！ 気づいてたけど、テツが駆け寄つてきたし、みたいなの……」 いまいち文意を把握できない葵の言葉を聞いてから、「ま、いいけど」と孝はソファから立ち上がり、バッグを持った。「もう教室行くの？」 という葵の声を背中に聞きつつ、「ああ」と言つて孝はSST室を後にした。

テツが一番懐いてるのは、葵だな。そう心中に呟き、孝は教室に向かつて廊下を歩き出した。

今日は残暑で暑い。だがそれは校舎外のこと、クーラーの効いた教室にいる生徒たちにとってはあまり関係のないことだった。

「じゃあ、このセンテンスの訳。青木^{あおき}」

クラスメイトの青木貴仁^{たかひと}が立ち上がったのを、孝は目だけ動かして見た。青木は成績がいい。余裕だらうな……。

「……すみません、分かりません」

英語リーディングの教師は青木を軽く睨んだ。「さっき、ボーっとしてたろ。ちゃんと集中しろ」

「はい……」 青木は座つた。

青木の様子が、少し変な気がした。

4時間目の体育が終わわり、グラウンドから教室に教室に戻つた孝たちは、文字通り生き返る気分を味わつた。「暑かつたー」「クーラー弱くないか」「やっとメシだな」

「こんな日に5キロ走なんて、頭おかしいんじゃないかねえのか筋肉教師

め

席に座った山崎が、ぶつぶつ悪態をつきながらパンのビニール袋を破った。孝は弁当箱を開けつつ「確かにな」と同意した。

2人の横を通った杏子が立ち止まり、首を傾げた。「そういえば、緒方って独り暮らしなんですよ？」孝は「そうだけど」と杏子の顔を見上げた。

「じゃあ、なんで弁当持つてるのよ」

「なんでって……」そこに、美菜もやってきた。杏子はいたずらな笑みを浮かべて言った。

「もしかして、彼女に作ってもらってるの？」

「はあ？」

孝が間の抜けた声を上げると、美菜が問う視線を向けてきた。孝は「んなわけねえだろ」と言い、2人から視線を逸らした。

「ホントに？」

「当たり前だ。弁当くらい自分で作る。そもそも、料理できなきや独り暮らしできないだろ」

「ふーん」と言い残し、杏子は去っていった。美菜も「そうだよね」と独白のように言い、歩いていった。

その様子を見送った山崎が、パンを頬張りながら「あの2人、なにかしら理由つけてちよっかい出してくるよな」と言った。孝は「ああ」と返し、弁当の焼き魚に箸をつけた。

午後3時26分。7時間目は、公民の時間だった。教師の会川慎次郎んじろうが黒板にチョークで重要事項を書き込んでいく。

孝はノートをとりながら、あと25分で今日の授業は終わりかと頭の中で呟いた。今日の訓練メニューは、持久走、筋トレ、ラペリング、そのあとは……。

ガタン、と突然響いた音に、孝は教室内に意識を向けて、目を見開いた。立ち上がった青木が、黒板に書く会川の背中に向かって黒い拳銃を構えている光景が、そこにあった。

「こ、この野郎！」 孝や友井が動く間もなく、青木は両手保持したグロツク17自動拳銃のトリガーを引いた。だが手が震えていたため、弾は会川の数センチ横を通過して黒板に当たった。会川が驚いて振り向いた瞬間、青木は再びトリガーを引いた。発射された9ミリ・パラベラム弾は会川の左肩を撃ち抜き、背後の黒板に血しぶきが飛んだ。「ぐあつ！」

そこで、女子の甲高い悲鳴が上がった。孝はP226を抜き、青木に照準を合わせた。「青木！」

友井もベレッタM92Fを青木に向けて構えた。「動くな！」

青木は制止を無視して教卓に近づき、呻き声をあげる会川の首に左腕を回し、右手でグロツクを会川のこめかみに突きつけた。「てめえ、殺してやるっ！」

「青木、先生を放せ！」 孝はP226を構えたまま言った。

「うるせえ！ おまえらこそ、銃を捨てろ」

そのとき、銃声と悲鳴を聞いた他のクラスにいた教師たちが教室内に入ってきたが、会川にグロツクを突きつける青木の姿を見るや、ぎよっとして足を止めた。「やめなさい、青木！」

「近づいたらこいつを殺すぞ！」

友井はM92Fを構えたまま「てめえ、FDTか」と低い声で問うた。青木は鼻で笑い、「違うね」と呟いた。

「じゃあなんの真似だ！」

「おれは、この教師に恨みがあるんだ。ようは復讐さ」

目に深い怒りの色を滲ませた青木は、淡々と話し始めた。

「おれの姉さんは、こいつのせいで死んだんだ。もう3年も前の話さ。高校1年だった姉さんは、クラスでいじめに遭っていた。それで担任だったこいつに相談した。なのにこいつは、それを無視し続けたんだ……！」

姉さんは無視されても、必死にいじめをこいつに訴え続けた。それをこいつは半年間無視し、いじめを見過ごした。そして、姉さんは自分で自分を殺した」

孝たちクラスメイトや教室の入り口まで来ている教師たちは、それを聞いて啞然となった。

「だからって、先生を殺してどうする！」 孝は怒鳴った。「そんなことしても、おまえは……」

「黙れ！ おまえに何が分かる。……こいつは、死んで当然なんだ。なのに、司法はその判断を下さなかった。おれは許さない。絶対に許さん！」

孝は会川の顔を見た。「先生、いまの話は本当ですか」

会川は恐怖でかすれる声で「そんなはずはない。こいつがでっちあげた濡れ衣だ……」と弁明した。青木はグロツクの銃口を下げ、トリガーを引き絞った。左の手首を撃ち抜かれた会川が絶叫し、正面にいたクラスメイトの机に血が飛び散った。「うあッ！」「きやあー！」

青木はグロツクを会川のこめかみに戻し、「ざけんなよ」と耳元で言った。会川の左手から、血が滴り落ちる。

「やめろ、撃つぞ！」

「撃てるんなら撃てよ。ただしこいつも地獄に付き合ってもらおう」 孝は青木の顔面に照準をつけ、P226の撃鉄を起こした。だが、撃てない。何があっても、青木にトリガーを引かせるわけには行かなかった。

どうすればいい。いったい、どうすれば……。

次の瞬間、教室に灰色の筒のような物が投げ込まれた。青木の足元で転がったそれは、白い煙を吐き出し、それを吸い込んだ青木が咳き込んだ刹那、教室内にSST隊員が突入してきた。

催涙ガスではなく、ただの発煙筒だったが、十分な効果だった。

「被疑者確保！」

「教師1名負傷、銃創あり。至急アンビュを要請してくれ」

青木は手錠を掛けられ、警察に引き渡された。

その後の調査は警察に引き継がれ、青木がクラスに帰ってくるこ

とはなかった。ただ、会川がいじめを発見しながら見過ごしていたのは事実のようで、彼も責任を追及されることとなりそうだった。

グロツクは、市販されていた物を青木が年齢を偽って購入していた物であることも判明した。しばらく暗い空気に包まれていたクラスだったが、1ヶ月も経てば、徐々にその活気を取り戻した。

第十四話：大雨のクリスマス（前編）

12月20日、午後1時44分。

「暖房弱いんじゃないの、ここ」

山崎が弁当の卵焼きを頬張りながら言う。確かに、教室内は少し肌寒く感じる。カッターシャツだけでは足りない。

「確かに……隣の教室は、ここほどじゃなかったな」
この教室の暖房は、たびたび不調になる。

「ハズレだよな、この教室は……」

山崎は愚痴が多い。

「ボヤくなよ、山崎。他の話題はないのか？」

「話題ねえ……。そういや、もうすぐクリスマス……」

「暇そうね、ふたりとも」 山崎の言を遮ったのは、突然現れた杏子の声だった。「うわっ!？」 2人は異口同音に言葉を発した。

「宗像、おまえ気配を消していきなり登場するの止める」

「ん？ 普通に歩いてきたつもりだけど」

まったく気づかなかった。

「ついか、おれは暇じゃない」と山崎。杏子がこういう風に話し掛けてくるときは、大抵口くでもないことに巻き込まれる。孝も

「おれもSDFの訓練があるから……」 と牽制球を放った。

「24日、何の日か知ってる？」

杏子が前の二言を無視して言う。

「……人の話を聞け。」

「知らん」

山崎は窓に顔を向けた。孝も何か言おうと口を開きかけたが、その前に杏子は「ウソつけ!」と言って、机に置いてあった参考書で山崎の頭に一撃を食らわした。

「痛つてえな!」

山崎が頭を押さえて叫ぶ。

「トボけるあんたが悪い。で、クリスマスの24日、美菜の誕生日だから。放課後、ここに残っててね」

「は？」 再び、孝と山崎が同時に言った。

「ちよつと待て、なんでおれたちが……」 と山崎。

「え？ クラスメイトでしょ」

「クラスメイトなら他にも……」

「じゃ、そゆことで」

杏子は足早に去っていった。

「毎回のことだけど、何なんだろうね、あのふてぶてしさは」 山崎が後頭部にできた瘤をさすりながら呟いた。

「さあ……」

クリスマスに内田の誕生会？ いったいどうしたものか。

窓の外に視線を向けると、雪がちらついていた。

「整列！」

放課後。グラウンドに、訓練ローテーションの第3小隊とSSTブラボー・チームが集まった。整列前の指示で、全員ボディアーマーにMP5の戦闘装備だ。

全員の前に立った倉田が言う。

「今日は、寒中行動訓練だ。これより、第2墓地までの往復持久走を行う」

第2墓地まで行くには、坂道を数100メートル登る必要がある。しかも今は雪が降っている。

「かかれ！」

倉田の号令で、隊員たちは一斉に駆け出した。

近くにいた友井が孝に話しかけた。

「座学ローテの連中は幸運だな」

「まったく」

その日の訓練のあと、数人の隊員が風邪でダウンした。

10月23日。

この日、孝は上機嫌だった。久々の非番だからだ。ちなみに、明日も非番だ。

放課後、すぐ校門を出てマンションへと歩き始めた。

ここんどこ、異常に厳しい訓練ばっかだったな。今日はゆっくり休もう……。そんなことを考えながら歩いていると、携帯が着信音を鳴らした。

「メールか……。宗像から？」 いったい何だろう。

『明日、美菜のプレゼントよろしく！ ばっくれたら殺すよ』

妙な殺気を帯びた電子メールだった。プレゼント？ なんの話……

「そうだ。内田の誕生日だった」 完全に忘れていた。

その後、駅前の大型ショッピングセンターに向かった。

「プレゼントって……。何買えばいいんだよ」

ぬいぐるみ、は幼稚か。小学生じゃあるまい。じゃあアクセサリ系？ ネットクレス……はちよつと抵抗あるな。ちゃんとしたやつは高すぎるし、かといって安物はいやだろうし。指輪……NGだ。

変な意味に誤解されかねない。お菓子は？ これならちょうどいい……。いやまて、お菓子とかケーキはプレゼントとは別に用意してあるはずだ……。

「クリスマスプレゼントですか？」

いきなり宝石店の店員に話しかけられた。

「あ、いえ、誕生日プレゼントです」

「恋人さんですか？」

「いえ、友人です」

「じゃあ、あんまり高価すぎないほうがよろしいですか」

「あ、ええ、まあ」 しまった。ペースに乗せられた。

「そうですねえ……。これなんかどうでしょう。値段も手頃ですよ」
その女性店員はショーケースからネットクレスを取り出した。派手すぎず、上品なデザインだ。値段は……12万だと？

「すみません、また今度」

孝は早足でその場から離脱した。
困ったな。どうしたものか……。

「あれは……」 孝は、あるものを見つけ、ちょうどいいと思った。

10月24日、午前7時30分。

孝はSST室で、テレビの天気予報を見ていた。

「今日は大荒れか」 ソファに腰掛けた渡瀬が言う。

「大雨洪水注意報でてますよ」

「まったく……。じゃ、おれは教室に行くよ」

「はい。夜間警備お疲れ様でした」

「おう」

渡瀬は軽く片手を挙げて、SST室から出て行った。室内には孝とテツだけだ。孝はテツを抱きかかえ、テレビを眺めた。

数分後、葵がやってきた。「おはよ、緒方」

「おはよう」

「すごい雨だったよ、外」

「ああ。さっき大雨洪水注意報が警報に変わった」

「ホントに？ クリスマスなのにね……」

葵は武器庫に入っていた。雨のザーという音と、テレビの音だけが響く。

「緒方、今日非番だよな？」 武器庫の中から葵が言った。

「座学で何習ったんだ？ バディは、非番もローテも同じだよ」

葵が武器庫から出てきた。「そうだった。……うーん、あのね」

「なに」

「今日、暇？」 葵が不自然に目を逸らしながら問う。

「いや、今日は用事があるけど……。なんで？」

「その、クリスマスだから……。うっん、何でもない。用事あるならいいや。じゃあね！」

葵はバッグを引っ掴んでSST室から出て行った。

それにしても、嫌な天気だ。大雨の音が、耳障りだった。

午前8時2分。孝は教室に入った。美菜の机の横を通るとき、「誕生日おめでとう、内田」と声を掛けた。「ありがとう」と美菜は照れくさそうに微笑んだ。

「緒方、プレゼント何買った？」

自分の座席に座ると、山崎が聞いてきた。

「あとのお楽しみ」

「じゃあお互いそういうことにしよう」

山崎は何を買ったんだろう。

放課後、午後5時2分。

「いるわね。じゃあ行こ」と杏子。

「これだけ？」

放課後教室に残ったのは、孝、山崎、杏子、美菜の4人だけだった。

「まあ、多すぎてもなんだし」

「緒方くん、山崎くん、本当にいいの？」

「もちろん」

「今日、非番なんだ」

すると、窓の外から、バイクの音が聞こえた。外を見ると、土砂降りの中、4台の大型バイクがグラウンドを走り回っている。

「うわあ、暴走族かな」

「大雨なのに、よくやるわねえ」

杏子が呆れ声を出すと、突然、バン！と窓にヒビが入った。銃撃？

「伏せろ！」4人は伏せた。続いて近くの窓に数発が命中し、蜘蛛の巣よろしくヒビ割れをつけた。孝は再びグラウンドを見た。大雨で渗む視界に、バイクからの銃火がはっきり見えた。

『緊急連絡。生徒は直ちに教室の窓を閉めて下さい。SDF隊員は、直ちにSDF棟に集合して下さい』

スピーカーが告げた。

「緒方！」

「先に行つててくれ。内田の家だな？」

「うん」

「後から行く。じゃあな！」

孝は教室を飛び出し、廊下を駆け出した。1階では、複数の銃声が響いていた。SDF棟への渡り廊下の手前で、葵が立ち止まっていた。

「中原！ どうした」

「銃撃で、あつちに行けないの」

校舎とSDF棟をつなぐ渡り廊下に、銃撃が集中していた。どうやら、バイクを乗り回しながら銃を乱射しているらしい。最高にタチの悪い相手だ。SDF棟の方からは、当直の隊員がMP5で応戦の銃撃を行っている。

「ここから撃つしかないな」 孝はホルスターからシグP226を抜き、スライドを引いて初弾をチャンバーに送った。葵も做った。近くにいた運動部の生徒たちが一斉に逃げていく。

近くを暴走するバイクに照準をつける。そのバイクがこちらに接近した瞬間、孝はトリガーを引いた。

速射された9ミリ・パラベラム弾がバイクの車体に着弾の火花を散らす。葵も発砲を始めた。

バイクは慌てて遠ざかる。その隙に孝はP226のマガジンを交換した。

「次は、撃ってくるぞ」

「ええ」

案の定、そのバイクは片手で発砲しつつ、暴走している。だが大雨で地面がぬかるんでいたせいか、いきなり転倒した。かばうように近くのバイクが突撃してきた。そのバイクのライダーは、マシンピストルを持っていた。フルオート銃撃がこちらを狙う。

僅かな呻き声と共に、葵がP226を落とした。

「大丈夫か、中原！？」

「……………うん、あたしは平気」

葵の右腕から、血が出ていた。弾は掠めただけで、軽傷だったが、孝は頭の回路が一部、切れたようだった。

マシンピストルの弾切れを待つて、孝は校舎の影を飛び出した。

葵が制止の声を掛けたが、孝には聞こえていなかった。マガジンチェンジのため停止したバイクに駆け寄り、フルフェイスタイプのヘルメットに2発。右腕に2発。バイクに3発。ライダーはマシンピストルを投げ出して倒れた。さらに近づいてきたバイクに残弾をすべて食らわすと、そのバイクは走りながら分解し、ライダーは頭から地面に激突した。水しぶきが派手に上がる。

残りは1台。孝は弾切れになったP226をホルスターに戻し、いま気絶したライダーからマガジンチェンジの終わったマシンピストルを奪った。ロングマガジンを装着したグロック18Cだった。

孝は、残った1台のバイクにグロック18Cの銃口を向けた。

第十五話：大雨のクリスマス（後編）

こちらに近づいてくるサイレンの音が聞こえてきたとき、SDF隊員たちは倒れているライダーたちを確保した。3人も、手や足に銃創を負ったが、意識ははっきりしていた。ヘルメットに弾を食らったライダーもいたが、弱装弾だったのと、距離があつたため貫通はしなかった。軽い脳震盪だ。

銃弾を受けたバイクは、燃料に引火すると危険なため、警察の事故処理車が到着するまで動かせない。

最後に残ったバイクのライダーは、混乱しているようだった。マシンピストルの暗い銃口をこちらに向けながら近づいてくるSDF隊員を見て、バイクを止め、自分のM11短機関銃を構えた。

最後のライダーに近づいた孝は、5メートルほどの距離でM11を向けられ、足を止めた。

「あのバカ、また突撃しやがって！」 ボディアーマーを着た渡瀬が、MP5にマガジンをつっ込みながら言った。

「しかも、制服のままみただけ。ていうか渡瀬、あんた非番でしょ？」 理香が言う。

「あんなことになって、帰れるかよ。行くぞ」

トリガーを引く。

1発の銃声。

こちらを向いたマズル・フラッシュ。

自分の右頬に軽く衝撃が走り、続いて何かの液体が滴り落ちるのを感じた。直後、孝はトリガーを引き絞った。

フルオートでグロックの銃口から吐き出されたフルメタル・ジャケットがライダーのM11を弾き飛ばし、黒いバイクのチェーンをちぎり、フロントライトを粉微塵に破壊した。

意識的に、燃料タンクは射線から外していた。
さらにフルオート。

ギアの歯車が砕け散り、ディスク・ブレーキを弾痕だらけにしていく。

グロツクのスライドがホールド・オープンし、弾切れを告げた。
刹那、掛けてきた渡瀬たちSDF隊員がライダーを拘束した。

そこで、孝は正気に戻った。

正面には、スクラップ同然の大型バイクと、手錠を掛けられたライダー、銃を持ったSDF隊員たち。

右手には、白煙を立ち昇らせているグロツク18C。

「大丈夫か、緒方」

歩み寄ってきた渡瀬が言った。

「はい」

「右の頬、血が出てるぞ」

渡瀬はそれだけ言うと、MP5のスリングを肩に掛け、SDF棟の方へ歩いていった。

その直後、グラウンドに救急車とパトカーが入ってきた。

ほぼ、同時刻。

「緒方、遅いな」

一戸建ての2階にある美菜の自室で、山崎が言った。ここに来てから、小1時間。山崎、杏子、美菜の3人は、ぼんやりと座っていた。

「にしても、暴走族がうちの学校に来るなんてね」

杏子がコップのサイダーを呷って、呟いた。帰りに買ったケーキ類は冷蔵庫に入れたが、ペットボトルのサイダーは開けていた。

「首都圏からは結構、遠いのよね」 と美菜。

「遠いつつても、高速ならそんなに時間掛からないんじゃないの」と言いつつ、山崎は後ろに倒れた。

「そつだね」

坂丘高校は、一応関東圏に所在している。とはいえ高層ビルの林立する地域とは離れた郊外の、どちらかという中規模都市に近い。

さらに30分ほど過ぎた、午後6時3分。

孝が美菜の家に着いた。

「緒方、大丈夫だった？」 杏子が問う。

「ああ」

「どうしたの、頼……」

孝の右頬には、大きな絆創膏が張ってあった。「いや、カスリ傷だよ」

「それより……。あれ、まだ始めてなかったのか？」

「うん。待ってた」 美菜は微笑し、「あたし、ケーキ取ってくる座ってて」と部屋から出て行った。

「遅かったな、緒方」と山崎。「銃撃戦だったの？」

「まあ、ちよつとな」

孝が座ろうとしたとき、ポケットから何かが落ち、床のフローリングに当たって金属音を響かせた。

「緒方、それ……！」

9ミリ弾の、空薬莖だった。発砲中に偶然、ポケットに入ったのだらう。

孝は即座にそれを拾い、ポケットに戻した。

「お待たせー」 美菜が戻ってきた。「どうしたの、みんな？」

「ううん、何でもなし」 杏子が取り繕う。

ケーキは、いちごのショートだった。いつものことだが、戦闘後はあまり食欲が出ない。悟られるのも気まずいので、孝はなるべくさっきのことは考えずに食べた。反対に、他の3人は食欲旺盛だ。孝は3人につられて、いつの間にか戦闘のことは忘れていた。

4人ともよく食べ、よく飲み、よく笑った。

孝が自分のマンションに着いたとき、すでに午後9時を過ぎていた。

カッターシャツを脱いで洗濯機に突っ込み、シャワーで一日分の疲れを落とした。風呂を入れようか迷ったが、睡魔に襲われてきたのでやめた。

上着をハンガーに掛けるとき、ポケットに入っていた空薬莖のことを思い出した。取り出して、それを眺めた。リムの刻印からしてSDFが装備する弱装弾ではないようだ。ということは、あの暴走族が持っていたグロツクの弾だ。

国内で市販されている弾薬は、民間銃器所持法により、9ミリの弱装弾に限られている。さらに、民間のフルオートも禁止されているから、あの暴走族がマシンピストルやサブマシンガンを所持していた時点で法に触れていたのだ。ただ、密輸は後を絶たず、国内にはマシンピストルから、FDTが使うようなアサルトライフルも出回っている始末だが。

それは、もはや護身用の範疇ではない。暴力団の抗争から、学生組織、果ては環境テロリストまでが、銃で武装し、警察の負担を増やしている。自衛隊の出動基準も緩和されたとは言え、多少行動がしやすくなっただけで、動きの鈍さが改善されたわけではない。

「あれ、実弾だったんだ」

独りごちて、急に瞼が重くなってきた。孝はテーブルに空薬莖を置き、ベッドに横たわった。

今日は、疲れた。熟睡できそうだ……。

すでに、大雨は止んでいた。

第十五話：大雨のクリスマス（後編）（後書き）

この作品はフィクションです。

民間銃器所持法は実在しませんし、狩猟などの場合を除き、民間人の銃器所持は禁じられています。

一応、念のため。

第十六話：忘年会

12月26日、午後7時4分。

「年末年始の警備ローテ、持ってきました」

待機中の隊員と、ちょうど訓練から戻ってきた隊員がいるSST室に、事務職種のSDF隊員がローテーション表を携えてやってきた。

SDFの採用枠は、戦闘職種と事務職種のふたつがあり、志願者はそのどちらかを選んで採用試験を受けることになる。事務職種の方は、普段は予算管理、警備予定の作成、司令の補佐などが主任務だが、戦闘時には後方支援業務、すなわち弾薬を戦闘中の隊員に補給したり、負傷者を手当てしたりする仕事もある。人数は少なく、戦闘職種は男子生徒ばかりなので、事務職種は女子生徒がほとんどだ。ただし、俸給は戦闘職種の方が多い。それでも、収入が必要だが、戦闘などで重軽傷を負うリスクを少しでも減らしたいという生徒は多く、競争率は高い。

SST室に来た事務の女子隊員はホワイトボードに持ってきたローテーション表を貼り付けると、すぐに出て行った。

「やっと来たか」

「げ、おれ大晦日に警備だ」

「まだいいだろ、こっちなんか年越しだ」

室内にいた隊員たちがホワイトボードに詰め寄る。

「そういえば、今年の忘年会はいつ？」 理香が呟くように言った。

「ねえ、ブラボー・チーム班長さん？」

「おれは知らない。倉田先生に聞いてくれ」

武器庫から出てきた渡瀬が返した。SSTの忘年会は、恒例行事だった。

「おれも聞いてないな」と言ったのは、3年でアルファ・チーム班長の上木彰介^{かみさしやうすけ}1等学尉だ。

そこに、ジャージ姿の倉田がやってきた。体育科の教師は、ジャージを着ていることが多い。

「ちょうど、アルファ・ブラボー両班長が揃ってるな」

「どうしたんです、突然」 と上木。

「忘年会の日時は、明後日の28日午後7時からだ。詳細はこの紙を見ておけ。両班長は、隊員の出欠を確認して明日中に報告すること」

倉田はA4の紙をホワイトボードに貼った。

「なお、おれは教職員会議で出席できないので、まあ、生徒同士で和気藹々と楽しんでこい。以上だ」

28日、午後7時9分。学校近くの和食屋で、坂丘高校SSTの忘年会は幕を開けた。進行役は、階級が最も上の上木。

「今年1年間、お疲れ様でした。乾杯！」

「乾杯！」

大き目のコップに入っているのは、コーラだった。

アルファ8人、ブラボー6人の計14人のみの忘年会だ。本来なら担当教師の倉田もいるはずだが、職員会議では仕方ない。

「そついや、最近FDTの活動が少ないな」

「前半トバしすぎて、失速したんじゃねえの？」

「ならいいが、年末にどでかい花火を打ち上げる準備でもしてるかもよ」

「大晦日に戦闘は御免ですよ」

「まっただ」

人数は少ないが、けっこう賑やかだ。ただ、このときは皆、落ち着いた感じだった。

40分後。

「恒例『SST体操』始めます！」

4人ほどの生徒が前に出て、踊り出す。

「いいぞー！」

「コーラの―気飲みはどうしたっ！」

「島元2曹、行きまあす！」

奇妙な踊りと平行して、コーラの―気飲み対決が始まった。すでに、そこらの酔っ払いサラリーマンと大差ない。孝は目の前の大騒ぎを眺めつつ、氷水をぐいと呷った。少し周りを観察してみる。落ち着いているのは、孝のほかには渡瀬、結城、葵の3人くらいしかない。

これが、SSTの忘年会か。

「そこお、なにシヨボくれてんのよー！」

完全にスイッチが入っている理香が怒鳴り、壁に背をついていた渡瀬を指差す。

「ヤローども、あいつを捕まえて来なさい！」

コーラ―気飲み集団のボスと化した理香の指示で、男3人が渡瀬を引っ張っていく。「お、おいやめろ！」 渡瀬は理香の前に連れてこられた。

「―気飲みなら断る」 渡瀬が理香を睨んだ。

「ふーん。じゃあこれね」

一瞬ニヤリとしてから、理香は渡瀬の襟を掴み、袈裟固めに持ち込んだ。「うわっ!？」 渡瀬でも、柔道有段者の理香に完全に固められては身動きできない。

「やめろ……息が……！」

「ギブ？」

「ギブギブギブっ!！」

―気飲み集団は、柔道集団に変わっていた。

渡瀬さん、ご愁傷さまです。口中に呟き、孝は時計に目をやった。午後7時58分。

横に座っている葵が突然、飲みかけた水を吹き出した。

「ごっほっ!！」

水が気管に入ったのだろうか？

なぜか、顔が真っ赤になっている。

「大丈夫か？」

葵は黙って前方を指差した。

『SST体操』なるものを踊っていた4人が、上を脱いで筋肉披露大会を始めていた。

「ちょっとあんたたちー、女子がいるんだから、去年みたく脱ぎすぎないでよ」 気づいた理香が言い、葵の横に座った。「まったく、どうしてこう配慮不足なのかしらね」

葵は微笑した。「ですよね」

「今年はまだマシよ？ 去年なんか、全裸になるアホまでいたんだから」

「本当ですか？」

「うん。あたしにお構いなしに」

そりゃ変態だ。孝は苦笑した。そして、思わず呟いていた。

「三沢さんは、どちらかと言うと男に近い存在なんじゃ……」

「なんですって、緒方あ？」

「いえ、何でもありません」 即答し、半分ほど残っていたコーラをぐいと呷った。刹那、「こんにやるー」という理香の声音とともに腕を掴まれ、強制的にコップの角度が垂直にされた。残っていたコーラすべてが孝の口腔内に落下する。理香から開放されてから、孝は盛大に咳き込んだ。

「そろそろ、2次会行くかあ？」

「賛成ー！」

理香たちは玄関に向かった。

「くそ、酔っ払いめ」 孝は毒づきながら、店を出た。

「緒方、大丈夫？」 葵が心配そうにこちらを見ている。

「ああ、一応」

「緒方、災難だったな」 結城翔一が立っていた。

「ええ、まあ」

「普段は、警備やら戦闘やらで神経すり減らしてるんだ。息抜きは、

あれくらいがちょうどいいんだろっな」

「そうですね……。結城さん、2次会行きますか？」

「いや、おれは帰るよ。明日は夜間警備なんでね。じゃあ、お先に」

「お疲れ様です」

「お休みなさい」

孝と葵がそれぞれ言うと、結城はバス停の方に歩いていった。

2次会のカラオケ店に着いたとき、渡瀬や数人の生徒がいなかった。おそらく、明日に警備のローテーションなのだろう。

カラオケ店で騒ぎ、ゲームセンターで騒ぎ、解散したのは午後9時半だった。

解散したとき、わずかに雪が積もっていた。天気予報では、明日から豪雪になるらしい。

第十七話：SDFキラー

12月29日、午後1時7分。

「ジャック・バウアー、ただいま到着しました」

「名前は？」

「おれの名はジャック・バ……」

「本名を訊いてるんだ」

「……ノリ悪いねえ、岡部さん。本名は宇田川博紀^{うたがわひろき}だ」

岡部義樹は、宇田川の態度に半ば呆れつつ、机の引き出しからある物を出した。

「きみの銃だ」

そう言つて、宇田川の前にトカレフ自動拳銃を差し出す。岡部たちFDTが好んで使う拳銃だ。

「無用です」

宇田川はそう言つと、自分のバッグから黒い物体を取り出した。

モーゼルC96自動拳銃。だが、1800年代に開発された、かなり古い銃だ。

「よく手に入ったな、そんなアンティーク」

「でしょう？ 切り替え式でセミオートにもフルオートマッチクにもなる、最高にイカした銃ですよ」

岡部はトカレフを引き出しに戻した。

「明日の予定は？ 岡部さん」

「午前7時に集合地点に来い。坂丘高校を24人で襲撃する」

「了解です、隊長殿。この”SDFキラー”ことジャック・バウアーが来たからには、勝利の女神はFDT^{あんたら}に微笑むでしょうぜ。じゃ

宇田川は部屋を出て行った。岡部はため息をつく。

宇田川は、今回の襲撃のために”スポンサー”が雇った助っ人だった。冷酷無比。大胆な行動でSDFの裏をかき、躊躇の無い発砲でSDF隊員たちを地獄に送る”SDFキラー”……。

「あのふざけた奴が、”SDFキラー”なんて、信じられん」
ジャック・バウアー……24？

10月30日、午前7時。

「全員いるな？」

岡部は、FDT隊員の集合場所で、集まった隊員たちを見回した。
「もちろんです、隊長殿」 宇田川が言う。

「おまえ、アサルトライフルは」

「おれの得物はこれだけですぜ」 黒の戦闘服に、防弾ベストを着た宇田川が、モーゼルC96を掲げて見せた。

「まあいい。A班はおれたちと校門。B班はグラウンド、C班は裏門。状況開始だ」

「了解！」

武装した隊員たちが散開する。曇り空の中、岡部たちは坂丘高校の正門に向かった。

その、少し前。SST室には、警備ローテーションのSST隊員がいた。

「明日で今年もおしまいかー」

理香がソファに座りながら言う。葵はテツと遊びながら「そうですな」と笑った。

「緒方、なんか面白い話題ないの？」

孝は、作業机に座ってP226の分解整備をしていた。グリスを塗りなおし、バレルとリコイル・スプリングをセットした遊底をフレイムに組み付けつつ、「ありません」とだけ言った。

「それにしても、明日、SST室で除夜の鐘を聴くはめになるとは思わなかったわ」と理香の声。

「ローテに当たっちゃったら、仕方ないですよ。あたしは、ちょっと楽しみです」

そう言いながら葵はテツを抱きかかえ、ソファに腰掛けた。

「楽しみ？ なんて」

「んー、なんとなく」

「なんとなく？」

女子2人の笑い声が響く。渡瀬と岡田は、巡回に出ている。孝は9ミリ・パラが15発装填されたマガジンを組み立てたP226のグリップに入れ、スライドを引いた。チャキリ、という金属音とともに、初弾が薬室に送られる。このままでは暴発しやすいため、デコッキング・レバーを下げて撃鉄をハーフ・コック位置まで戻しておく。

P226をホルスターに戻すと、無線が入った。

『緊急連絡。FDTが周辺に展開しています、至急戦闘準備をお願いします！』

巡回中らしいSDF隊員の声が告げた。

「年末なのにー！」と叫びながら、理香は武器庫に駆け込んだ。

孝はさつさとボディアーマーを着て、フリッツ・ヘルメットを被った。

まったく、面倒な年末だ。

孝が口中に吐き捨てた時には、MP5クルツのコックレバーを引いていた。

FDT隊員たちは、それぞれ銃を構えながら坂丘高校の正門を通り、生徒玄関に向かった。だが、生徒や教師の姿は無い。

「なんだよ、誰もいねえじゃねえか」

戦闘を歩く宇田川が、期待ハズレだ、とでも言いたげな声を出す。彼は、両手にモーゼルを構えた2丁拳銃だ。その後ろを、AKシリアズの自動小銃で武装した岡田たちが追従する。

生徒玄関の前で、宇田川はモーゼルを校内に向けた。

「シヨータイム！」

宇田川の両手に握られたモーゼルがフルオートで発砲される。国内では珍しい、7.63mmモーゼル弾が坑弾ガラスを粉碎し、玄

関内のロッカーにも着弾の火花を散らした。

続いて、FDT隊員たちもAKを発砲し始めた。

マガジンを交換した宇田川が、真つ先に玄関内に突入した。

生徒玄関、制圧完了。

それにしても、と岡部は思う。年末で、部活がないのは当然だとしても、SDFの連中が来るのが遅い。単なる人手不足とも考えられるが……。

「宇田川！ 職員室を制圧するぞ」

「了解だ。それと……」

前進する宇田川は、一瞬だけこちらを振り向いた。

「おれのことじゃックと呼んでくれ」

3階の廊下を巡回中に連絡を受け、生徒玄関に直行した渡瀬と岡田は、侵入者たちと鉢合わせになった。

階段の手前で身を隠す。壁に、フルオートの敵弾が命中した。

「出て来いSDF！ この”SDFキラー”が相手だ！」

両手に銃を持ったFDT隊員が怒鳴る。渡瀬は、その声の方に向かってクルツを連射した。

「”SDFキラー”だと……」

「知ってるんですか、渡瀬2尉」 岡田がクルツの弾倉マガジンを交換しながら問うた。

「ああ、全国を回って、FDTに加担している高校生だ。噂では、100人以上のSDF隊員を病院送りにしたとか」

「100人？ とんでもない敵ですねえ」

「そうだな。……おいおい、なんか敵の銃撃が強烈すぎないか？」

さつきから、こちらに向けた銃撃が途絶えない。

「だめだ、2階に後退する」

「了解！」

2人はクルツを射撃しながら、階段を上った。渡瀬は無線に吹き込んだ。

「渡瀬よりSST室。敵は多勢、クルツじゃもたない、M4で来てくれ」

『こちら三沢、了解。あたしたちが行くまで持ち応えてよ!』

「ああ。任せろ」

無線を切り、階段を上ろうとしたFDT隊員に上から銃撃を浴びせた。その隊員は腕と足に弾を受け、仲間に引きずられて後退していった。エジェクトされた空薬莖が、階段を転げ落ちていく。

「なかなかやるじゃねえか! SSTか?」

1階から、敵の声が聞こえた。

「てめえ、”SDFキラー”か!?” 岡田が叫んだ。

「おう! ジャック・バウアーだ」

渡瀬と岡田は顔を見合わせた。「外人?」

渡瀬からの連絡を受け、孝たちは武器庫からM4A1アサルトライフル自動小銃を持ち出した。

戦闘装備を整えたSST隊員たちに、さっきまで仮眠を取っていた結城が指示を出す。

「敵は、正面、グラウンド、裏門に展開している。おれと佐伯はグラウンド、緒方と中原は裏門、三沢は渡瀬たちの援護に向かってくれ」

「了解!」

孝と葵は、3階の廊下の突き当たりに向かった。そこから、裏門を狙える。

「ブラボー3、敵を視認。これより攻撃に入る」

『ブラボー0了解』

葵はすでに、M24SWSを窓から突き出して構えている。孝もその隣で、M4を構えた。裏門を見下ろす位置だ。

裏門から、学校敷地内に侵入してくるFDT隊員たちが見える。数は、10人程度。

先に撃つたのは、葵だった。

最も校舎に近づいていたFDT隊員が足を狙撃され、昏倒する。こちらに気づいた仲間が撃ってきた。

孝は一度身を隠してから、M4を照準した。

ドットサイトで狙いを定め、トリガーを引き絞る。数発の5.56ミリ弾がフルオートで射出され、FDT隊員のボディアーマーに命中した。

孝はさらに、威嚇の弾幕を張り続けた。

M4のマガジン装弾数は30発。フルオートで撃てば、驚くほど早く弾切れになる。

「装填！」

マガジンを交換している間は、葵のM24が発する音しか聞こえなくなる。銃が発砲と同時に次弾の装填をしてくれる自動小銃とは違い、ボルトアクション方式の狙撃銃であるM24は、発砲するごとに手でボルトを引く必要がある。

葵は滑らかな手つきでM24のボルトを引き、次々と敵を仕留めていく。それも、正確に足を撃ち抜いて。

そのとき、バキッ！ と嫌な音が発した。

「中原、大丈夫か！？」

「……うん。でも、銃が」

葵のM24に取り付けられたライフル・スコープの、対物レンズに敵弾が命中したのだった。レンズは割れ、もはや使い物にならない。

「SST室に戻って、スペアの銃に換えてこい」

葵は頷き、M24を肩に掛け、P226を構えて走っていった。

孝は再び、眼下の敵に向けて発砲を開始した。裏門の敵は、残りわずかだった。

SST室に向かって廊下を走っていた葵は、いきなりフルオートで銃撃されて転倒した。足元を狙われたが、幸い弾は当たっていない。葵はすぐに壁に身を寄せ、P226の撃鉄を起こした。

「出て来い！ おれは”SDFキラー”だ！」

今こちらを撃つてきたFDT隊員が、こちらに近づいてくる。葵は眉をひそめた。”SDFキラー”って何よ。

「俺様”SDFキラー”ことジャック・バウアーの恐ろしさは噂で聞いたことあるだろうが、不運だったな。あんたは病院行きだ」

機嫌よさそうな声が続ける。対照的に、葵は苛立った。

「勝手に決めけるな！」

葵がそう怒鳴ると、足音が止まった。「女……？」

「悪い？ 言っとくけど、病院送りになるのはそっちよ」

「口が達者だねえ。これでも、そう言えるかい？」

フルオートの発砲音が響き渡り、葵が隠れている壁に命中した。

至近距離の着弾に、思わず両目を閉じてしまった。

次に目を開けたとき、正面にFDT隊員がいた。

ヤバイ。

下から右腕を蹴り上げられ、構えていたP226が弾け飛んだ。

葵はすぐに特殊警棒を抜こうとしたが、腕を壁に押さえつけられ、身動きが出来なくなった。

「怖いか、怖いだろう！」”SDFキラー”と聞いて、怖くないはずがない」

「は？ 全然怖くないけど。撃つなら撃ちなさいよ！」

葵は腕に力を入れたが、壁に押さえ付けられ、ほとんど動かなかった。

「女を撃つのは趣味じゃないな。でもせっかくだし、アバラの1、2本は折ってくかな」

そのFDT隊員は葵を放し、数歩下がって、両手でモーゼルを構えた。ふたつの銃口は、しっかりと葵のボディアーマーを向いている。

「SSTか。安心しな、レベル？のボディアーマーなら、至近弾でも死んだりしねえよ」

葵は、思い切りそのFDT隊員を睨みつけてやった。

「そんなに睨むなよ、口が達者なお嬢さん。じゃ、グッバイ」
モーゼルのトリガーが僅かに引かれた瞬間。
「葵っ！」

聞き慣れた声が発し、葵はその方向を見た。孝が、P226を構えてこちらに駆けて来るのが見えた。

FDT隊員は舌打ちし、反射的に近くの教室に飛び込んだ。

そして、孝と”SDFキラー”の間で銃撃戦になった。

「新手が来たな！ おれは”SDFキラー”、ジャック・バウ……」
「無線越しに聞こえてんだよ！ ドラマの観過ぎだ勘違い野郎！」

孝の放った弾が、”SDFキラー”が持つモーゼルの片方に命中し、それを弾き飛ばした。

すかさず、孝は音響閃光手榴弾を教室内に投擲した。
強力な大音響と閃光が、教室内に生じた。

第十八話：GUNSLINGERS

午前9時4分。

「ゲホゲホ……！ 卑怯だぞ、スタン・グレネードなんか使いやがって……！」

宇田川は、激しく咳き込みながら教室から這い出してきた。

孝は宇田川の顔面に、マガジンチェンジを終えたP226の銃口マズルを突きつけた。

「知るかよ。武器つてのは、銃だけじゃないんだぜ」

「ためえ、”SDFキラー”をナメると痛い目に遭うぞ」

「あっそ。抵抗するならこの場で無力化するだけだ」

そう言つて、宇田川の右手に握られたモーゼルを半長靴の踵で蹴り飛ばした。

「この野郎……！」

宇田川は孝を睨んだ。

「立つて、両手を挙げる。分からねえのか、ホールド・アップだ」

孝は宇田川に手錠を掛けた。

すると、無線が入った。

『グラウンドのFDT、撤退した』

『生徒玄関もクリア。あと、上に行ったジャック・バウアーはどこ行った？』

『こちら緒方。ジャックは拘束しました』

『ラジャー。状況終了』

やっと終わった。孝はP226をレッグ・ホルスターに戻し、葵に声を掛けた。「中原、大丈夫か？」

「うん。なんともないよ」

「そうか。良かった」

駐車場で、警察に宇田川を引き渡した。

「あのさ、緒方」 S S T室に戻ろうとしたとき、葵が言った。
「なに？」

「さっき、あたしのこと『葵』って呼んだよね？」

よく覚えていないが、咄嗟にそう呼んだ気がしなくもない。

「そ、そうだったっけ？」 孝はなぜか動揺した。

「ま、いいけど。……さっきはありがとう」

「ああ」

「じゃ、お先に」

葵は微笑し、駆け足でS D F棟の方に向かってしまった。

何が言いたかったんだ、あいつは。

孝は少し間をおいてから、S D F棟に向かって歩き出した。

午前9時52分、S S T室。S S T隊員たちは、先刻の戦闘で使
用した銃器のメンテナンスに負われていた。

「くそ、ボルト機構にガタがきてやがる」

M P 5クルツ短機関銃サブマシンガンをバラしている岡田が言った。室内には、

그리스やオイルの臭いが立ち込めている。

「こつちのクルツも、ひどい有様だ」

同じくクルツを完全分解した渡瀬が言う。

「酷使しすぎたか……。こいつはメーカーに送るしかないな」

「ですね。バッファも磨耗してます。予備のパーツありましたっ
け？」

「ああ、それなら……」

そんな会話を聞きつつ、孝は自分のM4を組み立てていた。火薬
カスや塵を取り除いて 그리스アップした機関部レシーバーをロック・ピンで固
定。上下左右にピカニティー・レイルが設けられた被筒ハンドガードを銃身とガ
ス・チューブに被せるように装着し、デルタ・リングで固定する。
これで本体は完成。あとは、オプションの外装品を取り付けるだけ
だ。

タスコ製のドットサイト、フォアグリップ、フラッシュライトな

どを取り付けていく。

銃に装着するフラッシュライトは、国内メーカーの物が正規の装備として支給されているが、耐久性に問題があるため、多くのSST隊員が自費でシユアファイアなどを購入して使っている。

オプシヨンの取り付け位置を段階調節できるR・I・S・(レイル・インターフェイス・システム)のおかげで、光学機器や射撃補助器具の取り付けは容易だ。

通常のメンテナンスでは、照準が狂うのを防ぐためドットサイトまでは外さないが、マウントリングが劣化していたため、今回は取り外していた。マウントリングを新品に交換し、ドットサイトを装着した。

照準を合わせるため、孝は射撃場に向かった。

射撃場に入ってから、M4にマガジンを装着した。チャージング・ハンドルを引き、初弾を薬室チャンバーに送る。同時にレシーバー右側のエジエクシヨンポート・カバーが開き、鈍く光るボルトが現れる。

孝はドットサイトのスイッチを入れ、M4の切り替えレバーセレクターをセミアウトに入れた。これで、発射準備は完了。

ターゲット・プレートハンマーを照準し、トリガーを引く。

レシーバー内部の撃鉄ハンマーがファイアリング・ピンを叩き、それが薬莖底部の雷管を叩く。薬莖内の銃器用火薬が爆発し、弾丸を発射させた。

6条右回りのライフリングに沿ってバレル内で加速した5・56ミリ弾は、ターゲット・プレートハンマーの中心から右に4センチずれて命中した。

10発撃つてから、孝はドットサイトのダイヤルを回し、誤差を修正する。

次の射撃は、プレートハンマーのど真ん中に命中した。そのあとの3発も、ほぼ中心に命中した。

「完璧」

マガジンを抜き、チャージング・ハンドルを引いてチャンバー内

の弾を排出させる。

SST室に戻ると、まだ2、3人が銃のメンテナンスを行っていた。

「銃って、メンテが面倒なんだよな」 佐伯曹長がP226を組み立てながら言った。

すると、M24を組み上げた結城が口を開いた。

「しっかり整備してやれば、銃は最高の性能を発揮してくれる。実際、これほど使い勝手のいい武器は他にない。ど素人でさえ、トリガーを引けば敵を倒せる。だが、高度に訓練された者が、高い性能を持った銃を持てば、そいつは何倍にも戦闘能力を上げることができる」

普段は口数の少ない結城が、いきなり饒舌じょうせつに話し出したので、室内にいた全員が耳を傾けた。

「だが、いくら人間が優秀でも、銃がお粗末なら終わりだ。頻繁に弾詰シヤムまったり、不発が起こるような銃に命を預けることはできない。その点、おれたちの持つシグザウアーP226は、耐久性・信頼性ともに優れた拳銃ハンドガンだ。こいつは性能を裏切らない。このM24も、連射速度ではセミオート・ライフルに劣るが、そんなことは一撃必殺シキルの上では大して問題にならない。スナイパーライフルに必要なのは、確実な装填、銃本体の剛性、なにより優れた命中精度だ。精度の確保において、ボルトアクションに勝る構造はない。

FDTとの戦闘では、銃がおれたちの命を守り、仲間の命を守る。近接戦闘においては、ある程度の装弾数が必要だ。オートマチックは、どんなに下手な奴が使っても、最低限の戦闘能力を保証する。そんな連中との戦闘で、少しでも有利に立つには、技術と経験を積むしかない。銃の重心を覚え、常に照準を意識する。ここでやっかいなのは、弾を撃つと、重量が減ることで重心の位置が変化することだ。重心位置の変化をある程度意識しておかないと、照準が狂う可能性が大きくなる」

結城の独演会は、終わりが見えなかった。

「あ、話し始めたら止まらなくなっちゃった。悪い」

「いや、気にすんな」

メーカーに送るため、クルツをキャリアケースに入れた渡瀬が言った。

そろそろ、警備の交代時間だ。

孝も、明日の年越し警備に当たった不運なSDF隊員のひとりだった。

第十九話：年越し警備

12月31日、大晦日。

午後7時。SDF棟には、警備を引き継いだSDF隊員たちがいた。今から警備に就くSDF隊員12人は、明日、つまり1月1日の午前6時までの年越し警備となる。

通常、夜間の警備はSSTが6人、SDF普通部隊が10人と決まっているが、どうせ大晦日に襲撃はないだろうということで、今日はSSTが4人、SDF普通部隊が8人となっていた。

孝はSST室を見回した。

TVニュースを眺めている渡瀬、携帯を弄いじくっている理香、テツにミルクを与えている葵。

平和な光景だった。

孝は持参した冬休みの宿題を持って、SST室を出た。SDF棟の廊下を歩き、会議室に入る。空調が効いているため、ほとんど自習室として使われている部屋で、テーブルと椅子、あとは自動販売機が2台設置してあるだけだ。

会議室には、誰もいなかった。孝は自販機でホットココアを買い、テーブルで宿題を始めた。

1時間ほど経って、SST室に戻った。

午後8時6分。SST室には、渡瀬とテツしかいなかった。渡瀬はソファに座ったまま孝を一瞥いちべつした。

「緒方か」

「三沢さんと中原は、巡回ですか？」

「ああ。……そろそろ、戻ってくるんじゃないか？」

孝は渡瀬の向かい側のソファに腰掛けた。年代を感じさせる、オンボロ感丸出しのブラウン管テレビは、24時間テレビを写していた。液晶やプラズマ全盛のいまとなつては、骨董品になりつつある。ボロいと言つても、画面だけはそこそこ大きいので、見にくいということはあまりなかった。

数分経つて、理香と葵が巡回から戻つてきた。「あー、寒かった」

「みんなに、報告することがひとつある」 渡瀬が突然立ち上がり、3人を見回して言った。

「なによ、改まつて？」 と理香。

「……仮眠室の暖房が、故障した」

数秒の沈黙。

「ええー!!!」 理香と葵が同時に叫ぶ。

「故障つて、じゃあまつたく動かないわけ？」 冗談じゃない、という顔の理香が言う。

「ああ」

「暖房抜きで、あんな部屋で寝たら凍え死にますよ。うう、想像するだけで寒い」 寝転がるテツの前でしゃがんだ葵は、肩を竦^{すく}める。孝も同意見だ。なぜかという、窓を閉めても隙間風が侵入してくるからだ。この学校の仮眠室は。

渡瀬は再びソファに腰掛け、頼杖をつく。「仕方ないだろ」

「暖房のある部屋で寝たいなら、ここのソファで寝るか、会議室のイスで寝るかのどっちかだ」

「どっちも、プライバシーないわね」

「おれは仮眠時間なんで、0時30分まで寝てきます」 そう言つて、孝はソファから立ち上がった。

「除夜の鐘、聴かないの？」 葵が訊いた。

「いいよ。どうせ毎年聴いてるから」

SST室から出て、凍えるような廊下を歩いて仮眠室へ。室内は、暖房が故障しているせいで廊下並みに寒い。孝は仮眠用ベッドの布団に潜り込み、カーテンを閉めた。

時計のアラームをセットし、両目を閉じる。

それなりに寒かったが、疲れていたおかげで、すぐに眠りに落ちた。

アラームが鳴り、孝は目を覚ました。

午前0時25分。

アラームを止めて、布団から出る。「寒……！」 靴を履いて、仮眠室から出た。

廊下で、理香に会った。「これから仮眠ですか？」

「うん。緒方、寝れた？」

「ええ。寒いんで、逆によく眠れたかも」

「寒い眠りつて、なんかやだな……」 理香は仮眠室に入っていた。

SST室に入ると、テツが駆け寄ってきた。孝は両手でテツを抱き上げる。湯たんぽのようにぬくぬくとして温かい。そのまま室内を見回すと、ソファで渡瀬が眠っていた。仰向けになり、顔を右腕で覆っている。

葵はどこ行つたんだ？ もうすぐ巡回だというのに……。

孝は戦闘服に着替え、ボディアーマーも着た。

孝は準備を整えて、渡瀬がつけっぱなしにしたらしいテレビの電源を切った。携帯を取り出し、葵の番号にかけようとして、やめた。「どうせ、暖房がある会議室だな」

孝はMP5クルツを引つ掴んでSST室を出た。会議室に入ると、案の定、テーブルで葵が突っ伏していた。孝はそのテーブルをドンと叩く。「おい、起きろ中原！」

「あつ、緒方！……いま何時？」 葵が目を開けると同時に言った。

「0時34分。巡回は4分前から」

「ごめん、今すぐ準備するから！」

「先に行ってるから、追いつけよ。ルートはいつも通り」

勉強道具を抱えた葵がきょとんとて言う。「やだよ、一人で理科棟なんて！」

「だから、追いつけばいいだろ」

「それはそうだけど……」

孝は先に巡回に出発した。理科棟に入り、1階から順番に昇っていくルートだ。

1階は異常なし。階段を昇ろうとしたとき、葵が走ってきた。

「遅れてごめんなさい！」

「別にいいよ。……さっさと終わらせてSST室に戻る。寒いし」

「うん」

しばらくしてSSF室に戻ると、なぜか理香がいた。

「三沢さん？ 仮眠してたんじゃない……」

孝が問うと、理香は舌を出して笑い、携帯を掲げた。「寝顔撮っちゃった」

ソファでは、渡瀬が未だに眠っている。理香の携帯のディスプレイにはその寝顔がしっかり写っている。

「バレても知りませんよ……」 孝はヘルメットとボディアーマーを脱いだ。

「大丈夫よ。それにしても、面白味のない寝顔よねえ、こいつ。こんな普通の顔で寝てたら、変顔を盗み撮りする楽しみがないじゃない」 理香は渡瀬の頬を人差し指でつついた。

どういふ趣味なんだ……。孝は声に出さずに毒づく。

「確かに、普通の表情ですね……」 渡瀬の顔を覗き込んで、葵が呟いた。

「だいたい、渡瀬は堅すぎるから寝顔までこんな仏頂面なのよ。もうちょい遊び心ってもんを持てばいいのに。……ちょっと、いつまで寝てんの、巡回だから起きなさい！」 理香は渡瀬の腹に拳を叩き込んだ。

「痛いってえ、何しやがる！」 飛び起きた渡瀬が理香に怒鳴る。

「あ、ごめん」 理香が微笑した。「思わず殴っちゃった」

渡瀬は腹をさすりながら理香を見る。「殴って起こす奴があるか……！」

「アラームかけずに寝てるあんたが悪いんでしょ！」

「もっとマシな起こし方があるだろう、って話をしてるんだ」

「いいから、さっさと巡回の準備してよ！」

「誤魔化すな……！」

結局、2人は言い争いながら巡回に出て行った。

「可笑しいね、あの2人……」 葵はくすくす笑いながらソファに座った。テツがその足元で丸くなる。

孝は葵の対面のソファに座った。テレビは消えたままで、室内は暖房の発する音だけが響いている。

孝は正面にいる葵の顔を眺めた。彼女が何か話し出すと思った。だが、彼女も同じことを考えたのかもしれない。葵は何かを待つ表情で、双眸を孝に向けていた。

数秒間、テーブルを挟んで見つめ合うと、葵が思わずという風に笑った。「なんか、言ってよ」

「こっちのセリフ」 孝は葵から視線を逸らし、立ち上がる。

「コーヒー？」 葵が座ったまま訊いた。

「そうだけど」

「じゃ、あたしが作るよ」 そう言って葵は立ち上がった。そして、手際よく二人分のコーヒーを淹れて、片方を孝に差し出した。「どうぞ」

「……ありがとう」 孝はマグカップを受け取り、一口飲んだ。

「どう？ お味は」 両手で自分のマグカップを抱えた葵が問う。

「美味しい」

「そう」 彼女はにこりと笑った。「よかった」

葵は目を閉じてコーヒを啜り、マグカップをテーブルに置いて孝の方を見た。「ねえ」

「非行防止法、どう思う？」

「なんだよ、突然」 孝は葵の顔を見返す。いつになく真剣な眼差しだった。

「意見を聞かせて」

「行き過ぎてる」 孝はきっぱり言った。「学生の非行防止法。保護者の同伴無しでの22時から4時までの外出禁止、高校生のバイク免許取得禁止、高校生のインターネット販売利用禁止、学生の集団抗議行動禁止……。他にもいろいろあるけど、人権侵害としか思えない」

「でも、非行防止法に反対してるのがFDTで、FDTに敵対するのがあたしたちSDF。これって一応、あたしたちが非行防止法を守る側にいることにならない？」

孝はマグカップをテーブルに置いた。「それとこれとは話が別だ」

「FDTの主張は当然かもしれないけど、武装して学校襲うなんてことが許されるはずがない。だからおれたちが戦ってるんだろ？」

「そうね。彼らは間違ってる。いえ、あたしたちと彼らの間に起きている”戦い”そのものが間違ってる。そう思わない？」

「学生同士の銃撃戦なんて、馬鹿馬鹿しいとは思ってるよ」

「それが、一般的な見解だと思うの。当事者のあたしたち学生だけでなく、外から見てる大人たちもね。そう、馬鹿馬鹿しい戦い。じやあ、なんでこの戦いが終わらないと思う？」

「銃が出回ってるから。ようは銃器所持法、影では”武器蔓延法”と呼ばれたそのせいだろ」

「でも、銃器所持法は、20歳以上しか銃の購入を認めていないわ」「関係ないさ。国内に銃が流通すれば、スポンサーやら裏ルートで未成年にも銃が出回る」

葵は黙ってコーヒーを一口飲んだ。「つまり」

「銃器所持法を潰せば、あたしたちの戦いも終わる？」

孝は、葵の真意が見えたような気がした。彼女は、理想論を語りたがっている。「そんなに甘くないさ」

「どういうこと？」

「いまの日本の失業率、知ってるだろう？」 葵は沈黙したままなので、孝は続けた。「峰和工業はじめ、国内メーカーの銃器生産額は相当なものになってる。ある銃器メーカーのキャッチコピーは”一家に一挺、安心を”らしい。これには笑ったけど。とにかく、昔みたいに銃の所持を禁止したら、大勢の失業者が出るってことだよ」「年間、20人近くの学生を犠牲にしても？」

「法律を決めるのは、大人の仕事だ」

「じゃあ、いつまでもこんな戦闘が続いて、犠牲者が出続けてもいいの？」

その一言で、孝は体が灼熱したような気分を覚えた。「いいわけないだろう！」 怒鳴ってから、孝はテーブルを叩きつけた拳がじんじん痛むのを感じ、わずかに目を見開いた葵から目を逸らした。「悪い、つい……」

「うつん……、あたしこそ、ごめんなさい」

そのとき、ドアが開いて渡瀬と理香が入ってきた。二人とも神妙

な顔つきだった。

「どうしたの？　なんか、怒鳴り声が聞こえたけど」　理香が訊いた。渡瀬は黙ったまま銃からマガジンを抜いた。

「なんでもないです。気にしないで下さい」　葵が言った。

「ふうん……」　理香は、武器庫に入る直前、孝を振り返った。「緒方」

「なんです？」

「葵を苛めたら、殺すよ？」　そう言った理香の目は、笑っていなかった。肉食獣を連想させる鋭い目つきになっていた。

「全然、そういうのじゃないです！」　葵が慌てて言うと、理香はにっこり笑った。

「ならいいんだけど」　理香は武器庫に入っていった。

午前6時。

「お疲れ様です！」　「あけましておめでとございます！」　などと言いながら交代の隊員たちがSST室に入ってきた。

警備引継ぎの連絡を終え、4人はSST室から出た。

「今から初詣行きませんか？　4人で」　校門の前で、葵が言った。

「帰ってから、親と行くんだ。悪いが3人で行ってくれ。じゃあな」

渡瀬は片手を挙げると、バス停の方に歩いていった。

「ごめん、あたしも用事あるからパス！」　理香も駆けていった。

「二人とも、付き合い悪……」　葵がぼそりと言ってから、孝の方を見た。「行く？」

「ああ、えと、その……」

「行くの？ 行かないの？」

「……どっちでも」

「じゃあ行く」

学校から歩いて数分のところに、小さな神社がある。そこに着くと、葵が孝に話しかけた。「さつきはごめんなさい」

「まだ、怒ってる？」

孝は赤いマフラーを巻いてこちらを見ている葵から、正面に目を逸らした。「別に、もういいよ」

葵は孝の隣で、大きくため息をついた。白い息だった。地面には雪が数センチ積もっている。葵が孝の顔を見る。「緒方」

「ん？」 孝は少し高い目線から葵の瞳を見た。

「今年もよろしくね」 葵は毛糸の手袋に包まれた右手を差し出した。

孝は、その手を握り返した。

「ああ、よろしく」

今年も、SDFとFDIは戦うことになるだろう。互いに傷つけあい、犠牲者を出し合うだろう。

それは、何のためなのか？

その答えを、孝は探している。

第十九話：年越し警備（後書き）

しばらく更新が滞っていたことをお詫びします。

第二十話：不吉な雲

広大な太平洋から姿を現し、ゆっくりと昇ってゆく太陽が、凹凸のある街並みを照らし出していた。左手では太平洋の海面が陽の光を受けて煌き、右手では、緩い坂道を上った先にある坂丘高校の校舎が、葉のついていない木々に囲まれてひっそりとそびえている。

一月初旬。孝はマンションのベランダに出て、その街並みを眺めた。冬真つ只中の冷気が体を突きぬけ、袖を通したばかりのカッターシャツの上から上腕をさすった孝は、踵を返して室内に戻った。ズボンのベルトを締め、洗面所へ。鏡を見ると、一等学曹の真新しい階級章をカッターシャツの胸につけた16歳の男がじつと見返してきた。年末の昇任試験に合格し、先日、通知と共に階級章が届いたのだ。もつとも、今回の試験は曹士のみを対象としたものだったため、上木や渡瀬たち尉官は受けていない。筆記試験と実技試験からなり、葵は孝と同じ一等学曹、岡田は学曹長に昇進した。

冬休みが終わり、今日から授業が始まる。3年生は受験勉強に必死になっている時期だ。

去年からSDF隊員を対象にした防衛大学校への優遇制度が開始されたため、防大を目指すSDF隊員が増えていると聞く。もともと入学の難しい防大だが、将来的には自衛隊の幹部、順調にいけば制服組トップである幕僚長への道も開ける。治安と共に、就職率・失業率も未曾有の悪化を辿っている現在の日本の状況を鑑みれば、国家公務員が魅力的な職業であることに間違いはない。

孝はブレザーを羽織り、バッグを持ってマンションを後にした。

歩いて緩い坂道を上り、その先にある校門へ。生徒玄関に入る前、部室棟の方に人だかりができてるのが目に付いたが、そのときは気にならなかった。

SDF棟で拳銃と警棒を身につけ、教室に向かった。数人のクラスメイトがいた。孝は窓際の自分の座席につき、机に肘ひじをついて外を眺めた。暖冬を象徴するかのような晴れ空が、地上を見下ろしている。

教室に山崎が入ってきた。

「よ、緒方」

「山崎、久しぶりだな」

「終業式以来か……。そんなことより、部室棟の騒ぎ、知ってるか？」 山崎は孝の前の座席に腰を下ろした。

「ああ……。あれ何なんだ？」

「なんか、いろんな部の部室が荒らされてるらしい」

「荒らされてる？」

「冬休みの間に不審者でも入ったんじゃないかなー」

「まさか」 孝は微笑した。休み中は、孝たちSDFが24時間体制で警備に就いていたのだ。不審者が気づかれずに校舎に侵入できたとしても、荒らしたりして気づかれない可能性はほぼない。

午前9時30分。

一時間ほど前に多目的ホールで始まった始業式は、校長の終わりの見えない長話の最中にあつた。隣の席に座るクラスメイトが退屈そうに欠伸をするのを視界の隅に捉えながら、孝はホールの出入り口付近に意識を向けた。

立ったままの教師たちが、何やら落ち着きなく小声で話している。さらに、生徒のひとりが教頭と何か話しているのも見えた。ロン毛をセンター分けにした華奢な男子生徒は、確か放送部の部長。教頭は座席に戻るよう促しているが、彼は教頭に何かを懇願しているように見える。

数分後、ようやく校長の話が終わり、司会役の教師がマイクを取った。

「えー、それでは、生徒は教室に戻って下さい。最初は8組と7組……」
「待った！ みんな聞いてくれ！」

出入り口近くの生徒たちが立ち上がった刹那、スピーカーを介していない声がホールに響き渡った。いきなり演壇に上がった放送部の部長が、司会役の教師からマイクをひったくる。生徒や教師の視線を一手に受けつつ、彼は続けた。

「私は放送部部長の鎌田かまたです。冬休み中に、わが放送部の放送機器が何者かによって破壊されていました！ 状況からして、何者かが故意にした行為と断定できる。非常に悪質かつ陰湿な悪戯いたづらであり、わが放送部への冒瀆ぼうとくだ！ もしこの中に犯人がいるのなら、いますぐ申告しなさい！ また、何か情報があれば、提供をお願いする」

放送部らしく、滑舌よく発せられた言葉に、ホールがざわめいた。

「許可しとらんど！ 君、いますぐそこから降りなさい！」 教師のひとりが言った。

「私たち吹奏楽部もです！」 立ち上がった女子生徒が叫んだ。吹奏楽部の部長だ。「楽器のいくつかが、壊されました！」

「美術部は、美術室に展示してあった作品の一部が破ったりされました！」

「合唱部です、楽譜が破られました……」

「文芸部、原稿を破られ、部室を荒らされた！」

「えーと、造形部、鉄道模型が破壊されました……。被害総額8万5782円です」

各部の部長が矢継ぎ早に立ち上がり、叫ぶように言った。なぜか

運動部はなく、すべて文化部だった。

『どの部も、大晦日から正月にかけて被害を受けている。手口も同じであり、同一犯と見て間違いない』 鎌田が言った。

教師たちは彼を止めることを忘れ、啞然としている。

『この期間、SDFが警備に就いていたはずだが、何か知っていれば教えてもらいたい』

沈黙。

『……何も知りませんか。まあいいでしょう。今回の事件は、すべて部室内で起きているが、鍵はかけられていた。鍵を入手できたということは、スペアキーのある職員室に行ったということです。これは内部犯、つまりこの学校の生徒か教師が犯人である可能性が高いと言える』 再び生徒たちがざわめいたが、鎌田が口元にマイクを持っていくと、静かになった。『警備に就いていたSDF隊員の中に犯人がいる可能性が高いのでは？』

「なんだとっ！」 そう怒鳴った太い声の持ち主は、岡田だった。

「憶測でものを言うな！」

『おや、SSTの方にご返答いただけるとは光栄です。私が言っているのは憶測、ではなく可能性の問題ですよ。じゃあ犯人がSDF隊員でないという証拠はありますか？』

「おれたちはそんなくだらん悪戯をやっつけられるほど暇じゃないんだよ！ あんたには分からだらうが」

『それは証拠になりません。あたなが言ってることこそ憶測です』
「喧嘩を売つとるのか！」

岡田が演壇に向かおうとすると、近くにいた渡瀬が止めた。「よせ、岡田」

『なるほど、あなた方SDFは本校の文化部すべてを敵に回す気ですか？ いいかもしれません。その勢いで、本校からSDFを廃止するというのはどうでしょう』

「なんだと……」

『SDFという戦闘集団があるからこそ、学校を攻める輩があとを絶たないんです。SDFを廃止すれば、誰も襲撃してきたりしませんよ。これこそが本当の平和です。これは、私が自衛隊の廃止を訴えているのと同じ理由です。武器をもたなければ、戦闘は起きない。万一に備えてバカ高い装備を買い揃えるなんて、ナンセンスだと思いませんか？』

結局、何が言いたいんだ。孝は半ば呆れた心持ちで演壇の眺めた。

『SDFを無くせば、学校での戦闘はなくなり、日本も以前のように厳しい銃規制社会を取り戻し……』

「いい加減にせんか！」 突然発した野太い声が、鎌田の言葉を遮った。ホールに入ってきた体育教師兼SDF担当教師の倉田が、演壇に近づく。「誰も独演会を許可しとらんぞ、馬鹿者！」

演壇に登った倉田の巨体が、鎌田からマイクをひったくる。あっけなくマイクを失った鎌田は、「さっさと席に戻らんか！」と倉田に怒鳴られると、慌てて演壇から降りていった。倉田はマイクを口に近づける。

『全員、教室に戻れ。そのあとは担任の指示に従うこと』

「始業早々、落ち着かないわよねえ……」

昼休み。窓の外に視線を向けて、杏子が言った。

「何が？」

やきそばパンを頬張った山崎が言うと、杏子は呆れ顔になった。

「始業式のことじゃ決まってるでしょ」

「ああ、あの放送部の三年？ 名前は……なんだっけ」

「受験シーズンで、ピリピリしてるんだろ。でも、なんでこの時期になって部活に留まってるんだ？ あの鎌田って人」 孝は食べ終わった弁当箱を片付けながら言った。ほとんどの三年生は、春から夏にかけて部活を引退し、受験勉強に専念する。冬まで続けている三年生は珍しい。

「運動部と違って、文化部は時間に縛られないしね……。にしても、証拠もないのにSDFを犯人扱いして、不当だわ。だいたい、なんでそこからSDF不要論に発展するのよ」

「あの人、校内では有名だからな。先生相手でも、自分の意見は絶対に曲げないらしい」 孝は、それを渡瀬から聞いたことがあった。ちらと教室内を見ると、集まって弁当を食べている文化部の女子数人が、こちらに怪訝な視線を向けていることに気づいてしまい、孝は慌てて窓に視線を戻した。

「それで、どうするのよ、SDFとしては」 杏子が訊いたので、孝は首を傾げる。

「どうするって？」

「あんな好き放題言ってるのに、黙って見過ごすわけ？ あの鎌田

って人、文化部を見方につけてもつと調子に乗るわよ、きつと」「
「つつても、おれたちに来るのは校内の治安維持だから……。
校内で暴動でも起こすっていうなら、話は別だけど」「
「何も起こらなければいいけど……」

杏子は不安げな顔を教室内に向けた。

孝は空を見る。朝は雲ひとつなかったのに、今は空の半分を覆っている厚く低い雲が、その面積を増やしつつあった。

これは降るな。そう予測した孝は、ひとつため息をついて、ペックボトルの水を呷^{あお}った。

第二十一話：不穩

2月初旬。

坂丘高校内部には、不穩な空気が漂っていた。

冬休み中の文化部部室荒らしに端を発する、SDFと文化部の嫌悪関係だ。SDF隊員たちは　少なくとも孝は　濡れ衣を着せられた思いだが、文化部員たちは完全にSDFが犯人だと思っ込込んでいる。それも個人単位ではなく、SDFが組織的に行っている犯行（進行形なのは、未だに部室荒らしが続いているからだ）なのではないか、と……。

4時間目が終わり、チャイムが鳴った。昼休みだ。

「やっと昼飯だなー。金曜って午前中の時間割最悪だぜ」　山崎がパンの入ったビニール袋を持って、孝の机までやってきた。

「そうだな」　言いつつ、孝はコロッケパンの袋を開いた。

教室のあちこちでグループを作って昼食を食べ始め、教室内は騒がしくなる。そんな中、ひときわ大きな声が響いた。

「今日の朝部室行ったらさ、ギターの弦切られてた」　そう話し出したのは、軽音楽部のクラスメイト、江田公喜だ。わざと大声を出しているのは、このクラスのSDF隊員　孝と友井に聞こえさせるためだろう。

「マジ!？」

「ひっどー」

同じグループの連中が反応する。「誰がやったんだろっね」　その一声で、軽音楽部だけではなく教室のあちこちから、視線が孝に

集中した。食堂に行ったのか、友井は教室にいなかった。

「……おまえら、何見てんだよ」 山崎が立ち上がり、ヤンキーぶった睨みを効かせる。「言いたいことがあるならはつきり言えよ。あー!？」

山崎なりに気を遣ってくれたようだったが、今にも殴りかかりそうな勢いだったので、孝は「よせ、山崎」と制した。山崎は舌打ちして椅子に座った。しかし山崎のおかげで、嫌悪の視線はどこかに消えた。

放課後、SDFの座学を終えた孝たちブラボー・チームは、巡回のローテーションについて。

18時。SST室に、渡瀬と佐伯さえきが巡回から戻ってきた。次は、孝と葵の巡回だ。

「異常なし。ただ……」 佐伯が言ったので、孝は「ただ、なんです？」と聞き返した。

「文化部員の視線が痛い。それだけ」

「うーん」 葵が唸る。「気まずいなあ……」

「気まずいって何だ？ 別におれたちに非があるわけじゃない」

渡瀬がヘルメットを棚に放りながら言った。

「それは、そうなんですけど……」

「あんまり気にしない方がいいだろ」 巡回の装備を身につけた孝は、意識して気楽な声を掛ける。「行くぞ」

葵は慌ててMP5K・PDW短機関銃サブマシンガンを取りに行った。

今日の巡回は、コースD。グラウンドを一周して運動部の部室を通り、その後、各教室、部室棟の順番だ。

二階の教室前廊下を歩いていると、葵が口を開いた。「文化部荒らし事件だけどさ……」

「うん？」

「犯人が外部犯じゃないとしたら、学校の敷地内に潜んでるってことじゃん？ 犯人は」

「そう……だな」

「敷地内で、夜中まで潜伏できて、あたしたちの巡回に引っ掛からない場所、ってことだよな」

「んな都合のいい場所あるか？」

すると、葵は自慢げな表情になった。「思いついちゃった」

「通信制教室」

孝ははっとした。通信制の生徒が使用する教室が二つと事務室がある建物は、定時制の校舎と渡り廊下でつながっているが、通信制の建物はSDFの巡回ルートに入っていない。そこは、夕方には施錠されて、完全に無人となるためだ。渡り廊下と建物の間のドアも施錠されるが、それは廊下側からのみで、建物側からは自由に開け閉めできる。

昼間、学校に来た通信制の生徒が、通信制の建物内に残ったまま夜中まで過ごし、定時制の校舎内に侵入し、部室を荒らす……。

「つまり、犯人は通信制の生徒ってことか」

「だと思ってるんだけど、どうかな？」

「あとで、倉田一佐に報告してみよう。いい線いってると思う」

巡回から戻り、葵の仮説を説明すると、渡瀬たちはすぐに合点がいったようだった。

「なるほど、通信制の連中か……」

「盲点だったな。あそこは」

「じゃあ、通信制の生徒が登校する日の夜に、部室棟が荒らされているか確認してみないと」

早速、渡瀬は倉田のデスクまで報告に行った。

「ということなので、犯人は通信制の生徒の可能性が非常に高いと思うのですが」 渡瀬は、直立不動のまま説明した。結局、通信制の登校日と、部室荒らしの日は一致した。

「分かった」 倉田はコーヒを一口すすった。「次の通信制登校日は明日だ。SSTブラボー・チームによる犯人拘束作戦を実施する。プランはおまえたちに任せるから、明日の朝一度見せる」

「了解」 渡瀬は敬礼して、職員室から出た。

翌日、23時3分。寒い夜だった。校舎の屋上からM24 SW Sスナイパーライフルのスコープを覗いていた葵は、無線のスイッチを入れた。「目標、視認」

「数は？」 とイヤホンから渡瀬の声が聞こえた。

「渡り廊下を渡ったのは三名。男二名、女一名。いずれも私服。通信制生徒と思われず」

「了解した」 渡瀬はSST室で、三沢理香と共に完全装備で待機していた。

「やっと犯人のお出ましね」 理香が欠伸をしながら言った。

「おまえなあ……。男の目の前で、そんな大きな欠伸するなよ。せめて手で隠せ」 渡瀬はMP5Kの^{クルツ}コックレバーを引いた。

すると、理香はニヤリと笑った。「へえ、いつからあたしに女らしさを求めるようになったのかな？」

「そういつことじゃねえ！」

くすくす笑った理香と共に、SST室を出て、廊下を歩いていく。

『こちら緒方。三人は二階から、部室棟方面へ移動』

「了解。そのまま追尾しろ」

孝はなるべく音を立てずに、三人の通信制生徒を追跡した。案の定、文化部の部室が集まる部室棟に向かっていた。

そして、三人はパソコン部の部室に侵入した。

だが、孝は疑問を抱いた。いったい、いつ部室の鍵を職員室から持ち出したんだ？

そしてすぐ、渡瀬と理香、職員室付近に待機していた佐伯が合流した。パソコン部の部室からは、わずかな物音が聞こえる。

四人はクルツを構え、静かに突入体勢を取った。

渡瀬が、ハンドサインでカウントする。

3……2……1！

「SSTだ！ 動くな！」

三人の連続部室荒らし犯が乗ったパトカーが校門から去ったあと、孝たちはSST室に戻った。

「結局、パソコンオタクのイタズラだったってわけね」 制服に着替えた理香はソファに座り、呆れ顔で呟いた。

犯人の三人はいずれも通信制の生徒で、最初はパソコン部の高性能マシンに興味を持ち、夜な夜な部室に侵入して遊んでいたらしい。それがいつの間にか、ストレスの捌け口として部室荒らしに発展した。鍵は、犯人の一人が合鍵を無断で複数作成し、使用していた。騒ぎが大きかった割には、呆気なく幕を閉じた事件だった。

日付が変わる、少し前。

「みんな、もう上がっていいぞ。報告書はおれが作っとく」 渡瀬が声を掛けた。

「いいの、渡瀬？」 理香が問う。

「ああ。班長の義務だ」

「オツケー。じゃあ、お先に」

「おう」

「あとよろしくな」 理香と佐伯はそれぞれSST室を後にした。「報告書なら、手伝いましょうか？」 孝が問うと、渡瀬は顔を横に振った。「そんなに多くない。十五分もあれば終わるさ」

「じゃあ……お疲れ様です」「お先に失礼します」 孝と葵も、家路についた。

「やっと捕まったね、犯人！」 暗い歩道を歩きながら、葵が上機嫌そうに言う。「これで、SDF 犯行説もなくなるわけだ。めでたしめでたし」

「そうだな。これであの痛い視線ともおさらばだ」

「なんか、明日から学校楽しみだな」。最近は空気が重かったけど、弾んだ声色で言った葵は、心の底から嬉しそうに見えた。連続荒らし犯逮捕の連絡は、明日の朝礼時に全校生徒に伝えられるだろう。

「なんか、中原ってさ」

「うん？」

「分かりやすいよな」

「はいー？」

笑みを残したままの葵に、頬をつねられた。「いてっ………！ 別に悪口は言っていないだろ！」

「あたしの中では、分かりやすい」単純バカと変換されるのだ「おどけた声で言った葵が、鞆を両手で抱え直す。

「そうか？ 分かりやすい女子って、結構かわいいと思うけど……」思わず反論してから、自分が何を言ったかに気づいて口を噤んだ。葵の顔を伺うと、暗くてよく見えないが、少し俯いて黙ってしまった。

そのまま黙って歩いていけると、前方から八人ほどの集団が近づいてきた。数種類の高校制服に、スウェット姿もいる。孝はその中に、見知った顔を見つけた。「江田……」

「なんだ、緒方じゃねえか」制服を着たままの江田公喜が言った。

「お、公喜のダチか？」 スウエット姿のヤンキーが江田に問う。歳は、孝たちより少し上に見える。

「違いますよ」 江田は、睨むような目付きでこちらを見た。「最近、部室を荒らし回ってる連中の仲間です。おれもギターぶち壊されましたよ」

「んだとお！？」 ヤンキーたちは孝と葵を取り囲むようにしてきた。「よくもやってくれたなあ？」

「誤解だ。犯人は通信制の生徒で、さつき逮捕した」 孝は冷静な声を出す。

しかし、ヤンキーたちは笑っただけだった。「信用できるか、ボケ」

二対八。格闘訓練を受けているとはいえ、圧倒的に不利だ。おまけに、場所は人気のない工場裏の路地だ。

「公喜の大事なギターがぶっ壊されたんだ。仕返しにてめえの大事なもんをぶっ壊してやる。同害報復、目には目を、歯には歯を」
「ってやつだ」 そう言って、スウエット姿が孝を見据えた。「というわけで、同害報復するから」

何だその支離滅裂な理論は。犯人は捕まっただって言ってんだろっが。

孝は内心毒づいたが、何を言っても無駄だと分かったので、口には出さなかった。

ヤンキーたちが殴りかかる。孝は最初の一撃をかわし、鳩尾みそおちに正拳を叩き込んだ。申いた制服姿をスウエット姿に向けて蹴り飛ばす。続いて突進してきた青ロン毛を背負い投げで用水に落としてから、葵の方を見た。

さすが葵、と言ったところか。体力差を身体能力でうまくカバーして応戦している。

などと思っっている間に体当たりをくらい、孝はコンクリート壁に頭を打ちつけた。「ぐあっ！」

そのまま四人がかりで押さえられ、顔面や鳩尾を蹴り飛ばされる。すると、視界の片隅で、葵が殴り飛ばされるのが見えた。葵はぐったりして動かない。取り押さえようと、ヤンキーたちが葵の身体に手を伸ばした刹那

「葵に触れるなアッ！」 反射的に腰のホルスターに手が伸び、孝はシユアファイア製のフラッシュライトを引き抜いていた。自分を押さええているヤンキーの頭をライトのストライクベゼルで殴りつける。あまりの痛みに呻いたヤンキーを突き飛ばし、葵に触れる直前だったスウェット姿に渾身の体当たりを食らわす。

その後、目尻から血を流して近づいて来る江田の右手に、バタフライナイフが握られていることに気づいた。

だが、孝は冷静だった。繰り出されたナイフをライトのストライクベゼルで弾き飛ばし、順手に持ちかえて斜め上から鎖骨に振り下ろす。江田の絶叫と共に、鎖骨が砕ける音が聞こえる。

その後のことは、よく覚えていない。そのまま気絶したのか、江田たちを殲滅するまで戦い続けたのか。

わずかに、葵が泣きながら、こちらを見て何か言っていた記憶がある。

だが、その声を孝は聞き取れなかった。

第二十一話：不穩（後書き）

更新が遅れて申し訳ありません。

第二十二話：パティ

目を開くと、無機質な天井が見えた。照明はついておらず、窓から入る太陽の日差しが室内に降り注いでいる。

「ここは……」

上体を起こして、辺りを見回す。棚、小型テレビ、そして自分が乗っているベッド。病院の個室だと気づいて、帰宅中の殴り合いを思い出した。

頭部に手をやると、大袈裟に包帯が巻いてあるが、痛みは感じない。それ以外は、ところどころ絆創膏やガーゼが貼ってある程度だ。窓の外は明るい。壁の時計を見ると、ちょうど午後一時だった。突然、ドアがノックされた。孝は誰だろうかと考えを巡らした。

「どうぞ」

「気がついた？」 姿を現したのは、理香だった。

「三沢さん……どうしてこんな所に？」

「どうしてって……見舞いに決まってるでしょうが」

「じゃなくて、学校は？ 今日平日でしょう？」

理香は一瞬きよんとしてから、悪戯っぽい笑みを浮かべてみせた。「残念、今日は土曜日だよ」

「……は？」 てつきり、殴り合いがあった木曜の翌日だと思っていた。「じゃあ、丸一日気絶してた……？」

「そ。……緒方も人の子ってことよ」 理香は孝の頭をぼんぼん叩

いた。

「ちよっ……！」 理香の手を払いのけ、気になっていることを訊く。「あの、中原は……」

「大丈夫。軽い打撲と擦り傷だけ。いま、隣の病室にいるから呼んでこよっか？」

いま会っても、顔を直視できる自信がなかった。葵が殴られそうになったとき、あらぬセリフを怒鳴り散らしてしまった記憶があったからだ。

「……いえ、いいです」

「遠慮すんなって！ ちよっと待ってて」 理香は病室から出て行った。

すぐに、理香が葵を連れて戻ってきた。

「緒方……」 孝同様、顔や手に絆創膏をいくつか貼った葵が、心配そうな表情で近づいてきた。「頭、痛くない？」

「ああ。中原こそ、大丈夫か？」

「うん、もう平気」 そう言って、葵は微笑した。

「そう言えば、これ渡すの忘れてた」 理香は、バッグからクリアファイルを取り出し、ベッドの脇に置いた。「あとで読んでいてねじゃ、あたしは警備あるからこれで」

理香は腕時計を一瞥すると、足早に病室から出て行ってしまった。

葵はベッドに腰掛け、軽くため息をついた。そして、自分の頬の絆創膏を軽くさする。「凄まじい白兵戦だったよね」

「……悪かった」 孝は真剣な顔で葵を見た。「殴り合いになる前に、中原を逃がしてやるべきだった」

葵は数秒間、黙ったまま俯いていた。そして、真剣な眼差しで孝を見る。次の瞬間、孝は頬をつねられていた。

「いたたたたッ！」

「あのねえー」

葵に睨み付けられ、孝は思わずベッドの上で後退しようとした。しかし、壁にぶつかって動けなくなる。葵はこちらを睨んだままだ。

「それって、あたしを信用してないってこと？」

「いや、別に信頼とかそういう……」

葵は迫るように、顔を近づけてくる。「はっきり言って」

「緒方は、あたしを信用してるのかしてないのか」

顔が近い。こうして見ると、結構かわいい。孝は葵から慌てて目をそらす。「信用は……してる」

「本当？ 視線がずれてるけど」

「本当」

「じゃあ何で『逃がせばよかった』なんて言うのよ？」

そこが不服らしい。孝は少し間をおいてから、ゆっくりと言った。

「……守りたかった。それだけ」

葵は意表を突かれたような顔をしたあと、その場でうつむいた。表情はよく見えなかったが、やがて上目遣いで顔を上げた。

今度は、こちらが意表を突かれた。葵は頬から耳まで真っ赤で、気のせいかもしれないが、目が少し潤んでいるように見えた。

「……そんな言い方、ずるい」 消え入るような声だった。孝が「え？」 と聞き返すと、葵はベッドから立ち上がった。そして、いつもの表情に戻った葵は、いつもの快活な声で言った。

「あたしは緒方の相棒パティなんだからさ。もっと頼ってよね」
「……分かった」

葵は軽く頷くと、「じゃ、看護師さん呼んでくるね」と言い残して病室から出て行った。

その日の夕方、孝は病院を出て自宅に帰った。

掃除機をかけ、木曜日から丸二日間干しっぱなしになっていた洗濯物をたたみ、軽く夕食をとると、とくに日が暮れていた。食後のコーヒを啜りながら、理香に渡されたクリアファイルを手にとった。中にはA4サイズの書類が数枚入っていた。

一読して、孝はコーヒカップを投げつけたい欲求に駆られた。

(他校生徒との喧嘩騒動を起こし、鈍器にて相手を負傷させた処罰として、三日間の停学処分を課す。停学中は、やむを得ない場合を除き自宅から出ないこと)

(停学に合わせ、三日間のSDF停職処分とする)

書類にはその他、詳細な連絡事項が記載されていた。監視カメラの映像から、殴り合いの正当防衛は認められたが、フラッシュライトで殴ったのがマズかったようだ。故に、葵は処分なし。

かつて経験のない重処分の宣告を食らい、孝は叫んでいた。

「ぎげんなアーツ！」

翌日の日曜は、家で勉強した。予習復習が溜まっていたうえに、模試が近い。SDFのせいで自由にできる時間は少ないが、成績はそこそこの位置をキープしている。

そして、停学一日目の月曜になった。

目を覚ましたのは、午前六時すぎ。だが昨夜は遅くまで起きていたので、まだ眠い。停学だということを思い出し、孝は二度寝することにした。

それから、どれくらい寝たのだろうか。

「……起き……緒方……」 誰かが、名前を呼んでいる。そんなはずはない、おれは一人暮らしだ。

孝はゆっくりと両目を開いた。「おわっ!？」

目の前にあった葵の顔が笑う。「やっと起きた」とベッドの傍らに立ったまま、腰に手をあてた。「さっさと顔洗ってきて。ご飯できたよ」

一体、何が起こっているのか理解できない。孝はベッドから飛び

起きり、台所の方に歩いて行く葵にとりあえず怒鳴った。「待て！」

「なんで中原がここにいる！ てかどうやって侵入した!？」

振り向いた葵は、制服の上からエプロンをつけていた。「合鍵、先生に借りた」

孝は一人暮らしなので、緊急に備えて合鍵を担任教師に渡してあった。

「あたしがここにいる理由は、うーん、なんというか、贖罪？」

「贖罪って、何の」

「緒方が停学になったのは、あたしを助けようとしてくれたからでしょ？ だったらあたしにも責任あるし、何か手伝おうと思って」

返す言葉が見つからず、口をもごもごさせている間に、葵に背中を押された。「ほら、さっさと顔を洗う！」

洗顔を済ませてダイニングに行くと、テーブルに朝食が並んでいた。ご飯に味噌汁、卵焼きなど。

「じゃ、あたしは学校行くね」 葵は鞆を持つと、玄関から出て行った。

慌しいやつ。時計を見ると、もうすぐ八時になるところだった。

学校まで走れば、なんとか授業開始に間に合うだろう。

椅子に腰掛け、味噌汁を啜る。「ん？」 色が薄いかと思えば、ほとんど味噌の味がしない。お湯の中に、ほとんど溶けていない味噌の塊が入っていた。「……時間がなかったからか」 気を取り直して卵焼きをかじる。

「なんじゃこりゃ!」 やけにしょっぱい。否、それを通り越して

辛い。台所に行くと、砂糖は使った形跡がないが、塩のビンが置いてあった。

「ありえねえ……」

ぼそり呟き、孝は台所に立ち尽くした。

結局、その日も勉強で過ごした。熱中している趣味があるわけもなく、ネットサーフィンに興じる習慣もない。夕方になるとさすがに疲れ、リビングに行ってテレビをつけた。ちょうど夕方のニュースを放送していて、孝はソファに腰掛けて液晶ディスプレイを眺めた。

虐待、殺人、汚職、詐欺。もはや異常とは言えなくなった異常が、次々と報じられていく。

十分ほど経って、インターホンが鳴った。

クラスメイトが、プリントでも届けに来たか。

孝は玄関に行って、ドアを開けた。

そこにいたのは、以外にも葵だった。孝は「どうした？」と声を掛ける。

「いや、その何というか……暇かな、と思って」

「それでわざわざ？ てか今日は夜間警備だろ」

「バディがいらないんじゃないからって、ローテから外されちゃった」

「そうだったのか。じゃあまたな」

ドアを閉めようとする、葵は慌てて孝の腕を掴む。「待った！」

「人がせつかく心配して来たっていうのに、その態度はなに？」
「心配ご無用。これから模試の対策するから暇じゃない」

そう言うと、葵はなにか思いついたような表情になった。「じゃ、勉強教えてあげようか？」

午後七時二十三分。

「緒方、この最小値どうやって出すの？」 葵が数学のノートを差し出し、孝が受け取る。

「二変数の最小値か。最初にXで標準形に変形して、次にYで同じように……」

「このグラフは？」

「微分して増減表を書いて極限值を出す」

「これは？」

「相加平均・相乗平均を使って解くんだよ。……てか結局、一方的におれが教えてるだけじゃないか！」

孝は思わず突っ込んだ。勉強開始から二時間、葵の質問攻めにさらされ続けていた。おかげでこっちは問題集四ページも進んでいない。

「まあまあ、いいじゃんバディなんだし」

「なにが『教えてあげようか？』だ……。こっちは全然はかどらないっていうのに」

葵は唐突に話題を変え、「そろそろ、お腹すかない？ 勉強教えてもらったお礼に、あたしが作るよ」 と言って台所に向かおうとした。

「待て」 孝はその背中を呼び止める。「中原、料理の経験あるのか？」

むっとした表情で、葵がこちらを振り向く。「もちろん、あるけど」

「へえ。じゃあ今朝の味噌入りのお湯はなんだ？ それと塩辛卵焼きは？」

「え？ 味噌って勝手に溶けるんじゃないの？」

沈黙。

味噌って勝手に溶ける わけがないだろう。軽く目眩を覚えた孝は握り拳を額にあて、目をつむった。

「えへ、実はお味噌汁作ったのは初めて……だったりして……」などと葵は取り繕う。

「中原」 孝はペンを置いて立ち上がった。「正直に答える」

「料理の経験は」

「洋食なら、作れるよ」 葵はわずかに顔を紅潮させて苦笑しながら、孝から目を逸らして答える。

「本当は？」 孝は無表情に問うた。

「……今日が初めて」 やっと観念したらしい葵は、俯いたまま白状した。

やがて、「……怒った？」 と耳まで真っ赤にして訊いてくる。その様子を見て動揺してしまった孝は、「別に」 と視線を逸らして答えた。

「おれが作るよ。食べてく？」 そう問うと、葵は赤面したままこ

くりと頷いた。

「ごちそうさま」 葵は食べ終えて、食器を台所に持って行く。「緒方にこんな特技があったなんて、意外だよ」

「特技ってほどじゃない。このくらい、自炊してれば誰でも出来るだろ」

「そうかなあ……。そうだ、良かったら料理教えてくれない？」

「そんな時間あるのか？」 訊くと、「明日と明後日、非番だし。」

ダメ？」 と台所から返ってきた。

孝としては、別にやぶさかでない。「いいけど、真面目にやれよ」

「はい」

葵は食器を洗ってから帰った。

そして、停学二日目と三日目はあっという間に終わった。

第二十三話：地獄

いつも通り、IDを使ってSDF棟に入り、SST室へと向かう。SST隊員のIDでしか開けることができないSST室のドアを開けて中に入ると、渡瀬と岡田がいた。

「おはようございます」

「おはよう」 渡瀬は孝と入れ替わるようにSST室から出て行った。

「よ、緒方」 岡田は自分の特殊警棒を腰のホルスターに入れつつ、武器庫から出てきた。

「夜間警備お疲れ様です」

「おつ、異常はなかったぞ」 岡田もSST室から出た。「授業に遅れるなよ！」

孝は腕時計を見た。液晶のデジタル表示は午前八時十分を示している。

「ギリギリだな……」

急いで武器庫に入り、シグザウアーP226自動拳銃と特殊警棒をストラップスのベルトに装着する。武器庫から出て、ソファの上でおすわりしているテツの頭をひと撫でしてから、孝は駆け足でSST室から出た。

三月十日。孝の停学騒動からひと月、大規模な襲撃も無く、平凡な日々が過ぎた。しかし、FDTの襲撃というのは、しばらく間を置いている間に大掛かりな作戦を立てている可能性が高い。坂丘高校SDFは油断せずに警戒レベルを保っていた。

孝は廊下を駆け、チャイムが鳴る前に教室に入った。始業三分前だった。

「珍しいわね？ 始業ギリギリなんて」

席についた孝が顔を上げると、昨日の席替えで前の座席になった杏子がこちらを見ていた。

「ああ。ちよつと寝坊して」

「へえ、夜中までゲームでもしてたの？」

「んな余裕あるか、授業の予習だよ」

そう返すと、チャイムが鳴って教室に担任が入ってきた。

昼休み。放送でSST隊員に呼集がかかった。食べている途中だった弁当を片付け、廊下に出る。そこで、走っていた葵とぶつかりそうになった。「あ、緒方！」

「中原、いまの呼集、いつたいなんなんだ？」

「あたしも知らないよ！」 階段を一段飛ばしで駆け下りつつ、葵が返す。「なんか緊急っぽかったけど」

放送で指定されたSDF棟の会議室に入ると、アルファ・ブラボ
ー両チームの隊員が席についていた。孝と葵も空いた席に座った。

「全員いるな？」 ジャージ姿の倉田がホワイトボードの前に立っ
て、SST隊員たちを見回す。「単刀直入に言う」

「小架羽高校で立て籠もり事件だ。援護要請が来ている」
おがわ

これまでも、他校で襲撃があったときに援護に行ったことは何度
かあった。

「では、すぐに向かいます」 渡瀬が立ち上がる。

「待て」 倉田は神妙な表情になった。「今回は状況が特殊だ」
「特殊？」

「生徒五十九人と教師二名を人質に体育館に立て籠もったのは、小
架羽高校のSSTと、FDTだ」

SST隊員たちはざわめいた。学校を守るはずのSSTが、敵の
FDTと協力して立て籠もる。前代未聞だった。

「詳細はあとで。すぐに装備を整えて駐車場に來い。マイクロバス
で小架羽に向かう」

すぐに黒の戦闘服に着替え、ボディーマーと鉄帽を身につけ、
武器庫に向かった。自分のM4A1自動小銃をラックから取り、5
56ミリ弱装弾が三十発入ったマガジンをボディーマーのポーチ

に放り込む。

完全装備のSST隊員十四人は、もともと部活動に使われるマイクロバスに乗り込んで小架羽高校に向かった。

小架羽高校の敷地には、すでにパトカーと救急車が到着していた。テレビ局の車両も見える。関係者以外は学校の敷地に入れないよう、小架羽高校のSDF隊員が警備に当たっていた。

校門前でマイクロバスから降り、孝たちは小架羽高校の敷地に入った。

「坂丘のSSTです」 アルファ・チーム班長の長野が、小架羽のSDF隊員に言った。MP5サブマシンガンを携えたその隊員の階級は、三等学尉。「状況は？」

「SST隊員十人とFDT二十人が体育館に籠城しています。こちらには普通部隊しか残っていないので、三十分ほど前に横崎高校のSSTが突入しました」

校舎からは、銃声が響いていた。

「人質は？」

「体育館に生徒五十九人と教師二人。他の生徒・教職員の退避は完了しています」

「了解した。我々もすぐに横崎の援護に向かう」

「よろしく願います」

長野が後ろを振り返る。「車内でのブリーフィング通り、アルフ

アは正面玄関、ブラボーは裏口から突入する。行くぞ！」
防護ゴーグルをつけたSST隊員たちはM4を構え、素早い動きで行動を開始した。

体育館までは、わずかな見張りしかいなかった。横崎高校のSST隊員十人は、体育館入り口まで無傷で到着した。

「警備がザルすぎじゃないか？」 隊員のひとりが言ったが、ここまで来て引き返すわけにも行かない。

「全員で突入する。スモーク用意」

隊員のひとりが発炎筒を取り出し、体育館の扉を少し開けて投擲した。数秒後、十人は一斉に体育館に突入する。体育館はカーテンが全て閉められ、昼間にも関わらず薄暗かった。体育館の壁際に、体操服姿の生徒たちがいた。敵の姿は無い。

「クリア。人質を発見」

十人はフラッシュライトを点灯したM4の銃口を上下左右に向けながら、体育館のクリアリングを開始した。

直後、突然体育館の照明がつき、「動くな！」という怒声が発した。体育館の左右にある二階の通路からアサルトライフルを構えた戦闘服姿の大勢が姿を現し、上から見下ろす形で横崎のSST隊員たちに照準をつけた。

横崎の十人はM4を斜め上に向けて構える。「なんだ!？」

「銃を捨てる」 小架羽のSST隊員が、ドットサイトを装着したM16A4を構えて言う。「勝負はついた」

銃撃戦においては、上から下に向けて攻撃する方が優勢になる。さらに、いまは人数比が一对三で横崎が圧倒的に不利だった。

「……クズどもが！」 横崎SSTのひとりが怒鳴り、次の瞬間、一発の銃声が響いた。ゴーグルを貫通した弱装弾は右目を直撃し、倒れた彼のゴーグルは砕け、床に鮮血が散った。

「菱元ひしもとさんッ！」 隣にいた隊員は咄嗟にトリガーを引いた。フルオートで5.56ミリ弾が射出され、通路にいた数人のFDTの顔を直撃する。彼もその直後には両膝を撃ち抜かれて激しく転倒した。

そこから、地獄が始まった。無数の銃声が交錯し、薬莢が撒き散らされ、体育館内に深紅の血が飛び散って行った。その様子を目の当たりにした人質の生徒たちが一斉に悲鳴を上げ、ある生徒は顔を両手で覆い、ある生徒は床に伏せ、その地獄から目を逸らした。

数分後、横崎高校のSSTは文字通り全滅した。体育館の床には動かない十人が転がり、その周囲には血と空薬莢が撒き散らされていた。人質の生徒たちからはすすり泣く声も聞こえる。小架羽高校SSTアルファ・チーム班長の木村誠司きむらまことは、体育館に倒れている横崎のSST隊員に歩み寄った。

それは、最初に撃たれた隊員だった。階級は一尉。右目は弾を受けて潰れ、左目は開いたまま硬直していた。目だけでなく、腕や脚にも銃創があった。

こんなはずでは……なかつたのに。木村は拳を握り締め、背後のFDT隊員を振り返る。

「最初に撃つたのは誰だ!？」 FDT隊員たちは誰も反応しない。木村はFDTのリーダー、岡部に歩み寄る。「どういうことだ」

「SSTは降伏させて武装解除させる作戦だったろうが!」

「……仕方なかった」 岡部はAK102を片手で保持したまま、木村を無表情に見据えた。「いきなりあんな言葉を言われてはな」

木村は横崎のSST隊員が言った『クズどもが!』 という言葉を思い出した。そして、M16A4を放り捨てて岡部の胸倉を掴み上げる。「それが殺す理由になるか!？」

「……死者を出す覚悟を持った上で、反旗を翻したんだろう?」

そう言い放った岡部の右手にはトカレフ自動拳銃が握られ、銃口が木村のボディーマーの隙間に入れられていた。他のFDT隊員にAKの銃口を突きつけられ、木村は岡部を放した。

「木村一尉」 小架羽SSTの部下の一人が言う。「坂丘のSSTが間もなく到着するようです」

「分かった」 木村が返した刹那、フルオートの発砲音が響いた。たったいま目の前にいた部下が口から血を吐いて倒れ、近くにいたFDT隊員二人も転倒する。床に倒れていた横崎のSST隊員が、倒れたままいきなりM4を発砲したのだった。

木村はM16をその隊員に向けた。足に弾を受けたただけだったらしいその隊員は、弾切れになったM4の銃口を木村の方に向けた。SSTにしては珍しく、細い体格だった。

「死に損ないがア!」 近くにいたFDT隊員が一齐にフルオートで発砲する。明らかに過剰な量の弾丸を浴びせられた隊員のM4が弾け飛び、散った血が木村の頬にかかった。

弱装弾を至近距離で食らった隊員のあご紐が千切れ、ヘルメットが外れた。ヘルメットとゴーグルが外れるまで気づかなかつたが、その隊員は女だった。銃声が止むと、黒い瞳を天井に向けたまま、その女子隊員は絶命していた。

殺すつもりじゃなかったんだ。頬についた血の温かさを知覚して、木村は心中にそう呟いた。

第二十四話：制圧

孝たちは、横崎のSSTが使用したのと同じルートで体育館に向かった。警戒しつつ素早く移動し、体育館の入り口が見えてきた。そこで、アルファ・チームとブラボー・チームが合流した。

「おかしい」 長野が呟くように言った。「横崎のSSTと無線が通じない」

それは、横崎SSTの全滅を意味する。体育館に至るまでの通路に戦闘の形跡がほとんどないことから、横崎のSSTは体育館に突入後に全滅させられた可能性が高かった。

「待ち伏せでしょうね」 体育館の入り口から五メートルほど離れた廊下で、理香が言う。

「スタン・グレネードを使った方がいい」 と結城が言ったのを聞いて、渡瀬が「人質がいるんだぞ？」 と返す。

「だが、横崎の連中を全滅させた相手だ。スモークは役に立たない」
「……スタン・グレネードは、下手をすれば人質に後遺症を残すかもしれない」 長野はM4を構え直した。「スモーク投擲後、アルファが突入。ブラボーは入り口まで進出して援護。アルファに万一のことがあった場合は撤退しろ」

「それは不公平だろう」 渡瀬が長野に詰め寄る。

「小架羽SSTの、アルファ班長は木村って奴なんだが……中学の同級生でね」 長野はM4のグリップを握り締める。「こうなった以上、あいつの顔をぶん殴らないと気が済みそうにない」

「だが……」

「心配するな。敵の残存勢力は不明だが、横崎のSSTも一方的にやられるだけじゃなかっただろう。……それに、まだ死ぬつもりは

ない」

そして、佐伯が発炎筒を体育館内に投げ入れ、アルファ・チームの八人が体育館内に突入した。それに、渡瀬も続いた。

「渡瀬さん!？」 孝が怒鳴ると、渡瀬は「援護は任せる!」とだけ返した。仕方なく、孝は体育館の入り口で、M4を構えて援護体勢を取った。葵たちも同様にM4を構えた。

体育館は、薄暗かった。フラッシュライトを点灯させたアルファ・チームの面々は、体育館内に悲惨な光景を見つけた。

ぐったりと倒れた横崎のSST隊員たちは、もう息がなかった。そのほとんどが全身に銃創を負っていて 長野は吐き気がこみ上げてくるのを感じた。SST隊員だけでなく、FDTの死体もあった。吐き気を必死に堪えながら、M4の照準を視線と共に移動させ、敵を探す。

フラッシュライトのスポットに人質の生徒たちが浮かび上がった瞬間、体育館の照明が灯った。

「動くな!」

二階の通路に隠れていたSST・FDTの隊員たちがアサルトライフルを構えながら、一斉に姿を現す。

やはり、待ち伏せか。孝は舌打ちしてから、ドットサイトでFDTの一人にM4の照準を合わせた。いつでも撃てるよう、トリガーに人差し指を添える。

「君らに勝ち目は無い。銃を捨てる！」 木村の声が聞こえ、長野はそちらを睨むと同時にM4の銃口を向けた。「木村、きさま……！」

木村もM16を長野に向けて構えた。「久しぶりだな。長野」

「これはいつたいどういうことだ！」

「仕方なかった。本当は殺すつもりはなかったんだ」 木村は穏やかな口調だった。「これ以上殺したくない。頼むから銃を捨ててくれ」

「きさま、いつたい何の目的でFDTに寝返りやがった!？」

「決まっている。『学生の非行防止法』を無効化するため、そしてSDF対FDTという、学生同士の無駄な争いをなくすためだ。要求は警察経由で発表したか、まだそっちには情報が回ってないようだな。だが、これはおれたちの共通の望みなんじゃないか？」

「共通の望み……だと」 長野は思わず聞き返した。

「SDFもFDTも、互いに殺しあうことを望んじやいない。銃を持たなければただの高校生だからな。なのに、こんな馬鹿げた戦闘が行われているのは、大人が作った悪法に踊らされているからだ。

おれたちは互いに戦うべきじゃない。おれたちが戦うべき相手は大人だ。これまで、SDFとFDTの抗争で多くの学生が死んだ責任は、すべて大人にある。おれたちSDFの職務は、学校を守ること。学校で戦闘が起こっている責任が大人にある以上、大人はSDFの敵だ。そうなれば、SDFとFDTの利害は一致する。学生を戦闘から解放し、『学生の非行防止法』を叩き潰す。これがおれたちSDFの……」

「じゃあなぜSST隊員を殺したんだ!？」 長野は腹の底から怒鳴っていた。「どんな理由があっても、無罪の人間を殺していいわけがない！」

「理解してくれ、長野」

「ふざけるな……! いますぐ人質を解放しないのなら、おれがこ

の場できさまを殺してやる！」

「状況が分かかっていないようだ」 岡部が口を挟んだ。「君らは袋のネズミだ。死にたくなければ銃を捨てる」

そのやり取りを聞きつつ、孝は腕時計を確認し、突入前に言われたことを反駁した。待ち伏せがあった場合、突入三分後にスタン・グレネード投擲

三……二……一……ゼロ。

孝、葵、理香、佐伯の四人は同時にスタン・グレネードを投擲した。大音響が収まってから、孝は体育館へ突入し、梯子を上って二階の通路に行った。そこには、スタン・グレネードで行動不能となったSST・FDT隊員たちがおり、彼らを無力化するため、孝はM4のトリガーを引いた。腕を狙ってフルオートで発砲し、近くにいる者から順番に掃射していく。

孝のあとに続いて梯子を上ってきた葵も発砲を始めた。

だが、スタン・グレネードを受けても銃を乱射するFDT隊員がいた。でたらめな照準で小銃弾が射出され、壁に弾痕をつけ、窓ガラスを粉碎していく。

孝は素早く照準をつけ、トリガーを引いた。AKを乱射していたFDT隊員は手の甲を撃ち抜かれ、AKは床に落下した。

「こちら緒方。制圧完了」 無線に吹き込み、後ろを振り返ると、葵が倒れていた。「中原!？」

葵は地面に座り、右腕を押されていた。黒の戦闘服に血が滲んでいる。「痛っ……!!」

「掠ってるだけだ。止血するぞ」 孝はボディーアーマーのポーチから応急処置キットを取り出した。

二階通路から下りると、人質になっていた生徒たちが外に出て行くのが見えた。体育館を見回してから、孝は改めて生唾を呑んだ。床には無数の空薬莢が散らばり、血痕が飛び散り、遺体が転がっていた。

「ひでえ……」 岡田が呟く。その隣にいた佐伯は口を押さえながら便所の方に走っていった。その場で泣き始めた葵を理香がそっと抱きしめると、体育館内に怒声が弾けていた。

「きさまア！」

怒鳴ると同時にM4を放り投げた渡瀬が歩み寄る先には、木村がいた。右腕を撃たれていた木村の胸倉を掴み上げ、渡瀬はその顔を睨みつけた。「よくも……よくも殺しやがったな……！」

「仕方なかった……それでも……おれたちには、為すべきことが……」

そう言った木村を突き放し、渡瀬はレッグホルスターからシグザウアーP226を引き抜き、ハンマーを起こして木村の顔面に突きつけた。「SST隊員を虐殺することが為すべきことか!? 答えろ！」

木村はぐったりとして何も答えようとはしなかった。

「やめて下さい、渡瀬一尉！」 いまにもトリガーを引きそうだった渡瀬を、アルファ・チームの隊員が二人がかりで取り押さえる。

「状況終了。坂丘SST、撤収する」一人冷静を保っていた結城がインカムに吹き込み、孝たちは体育館を後にした。

死者十八名、負傷者二十四名。SDF創設以来最多の犠牲者を出した最悪の事件は、ようやく幕を閉じた。

> i 7 2 5 9 — 1 1 4 5 <

最終話：逆風の中で

『……今回の事件では、SDF法施行以来最多の死者数を出すことになったわけですが、笠松さん、これは何が原因となったんでしょうか？』

アナウンサーを移していたカメラが、《元警視庁勤務 笠松東二》のテロップと共に別の中年に切り替わる。『これまでも、死者の出る戦闘はたびたび起こってきましたが、今回の事件で特徴的と言えるのは、SST部隊がFDTと手を組んだことにあると思います』

『SSTというのは、SDF内でも精鋭とされる部隊ですよね？』

『そうです。より多様な技能を修得している、いわば特殊部隊です。普通部隊と決定的に違うのは、衝撃弾ではなく弱装弾を使うことにあります。もともと拳銃しか使っていなかったFDTが自動小銃で武装するようになったのに対応するために作られた経緯があります。が、野党が過剰武装と批判するほどの戦闘能力を有しています』

『そのSSTが、FDTと手を組むというのは、いったいどういう……』

『実際のところは彼らしか分かりませんが、SDFも一枚岩じゃないということでしょう。近年のSDF批判の高まりもありますし、まあ学生なりにいろいろ葛藤を抱えてるんでしょうが』

『今回の事件で、市民デモなどSDF廃止運動がさらに増加すると予想されますが、それによってさらにSDFのクーデターが起こる可能性はあるんでしょうか？』

『ないとは言いません。彼らにとってみれば、自分たちが命を懸けてやっつてることを否定されているということになるわけですから。それにね、よく考えてみて下さい。下手にSDFをなくせば、それはイコールFDTの天下を意味するんです。正確な数字は不明

ですが、非合法に自動小銃で武装した学生が全国に何千人といるわけですから。もし一斉蜂起でもしたら、はつきりいつて警察官のもつリボルバー拳銃では歯が立たんでしょう。かと言ってSATや銃器対策部隊だけではマンパワーが足りない。まさか自衛隊の部隊で殲滅するわけにはいきませんし……」

「……アホくさ」 孝はテレビの電源を消し、食べ終えた食器をシンクに置いて洗い始める。SDFのクーデターなんて冗談じゃない。この前の事件は例外中の例外で、廃止運動があるくらいでFDTと手を組むなんてことは有り得ないというのが孝の心中だった。FDTも然りで、非行防止法を廃止したいだけの連中が国そのものの相手に蜂起するとは考えられない。未曾有の就職難に直面しているとはいえ、FDT隊員たちは、夢もあれば希望もある学生に過ぎない。武装蜂起して一生をドブに捨てるほど愚かではあるまい。

午前七時五十五分。孝は制服に着替えてから玄関を出た。エレベーターで一階に下り、いつもの通学路を歩き出す。

大通りに出ると、銃器所持法廃絶を公約に掲げる某野党の宣伝カーがスピーカーを鳴らして走っていた。「皆さん、この国から銃を廃絶し、再び治安国家の名誉を取り戻そうではありませんか！」

国民の自衛と銘打って、満二十歳以上の国民の拳銃と弱装弾の所持を認める銃器所持法が制定されたのは、十年前の無差別殺傷事件の結果だ。銃や大型ナイフで武装した十五人グループが、都会のど真ん中で通行人を無差別に惨殺したこの事件で、国民の武装論が沸騰。結果、ただでさえ、対北問題で危うくなっていた治安国家の肩書きは地に墜ち、警察の定員が二割り増されるまでに至った。SD

F設立の間接的な原因と言ってもいい。

しかし、喉元過ぎれば熱さ忘れるで、数年後には旧銃刀法を復活させる世論が勢いを増した。結果、銃の購入には一定期間の訓練で得られる免許が必要になったが、しょせん後の祭で、そのときには密輸された短機関銃や自動小銃が国内に出回る有様だった。それがスポンサーや裏ルートを介して学生に流れ、結果としてFDTに武器弾薬を供給することになっている。

銃廃絶は理想的だとは思うが、いまさら感はどうしても否めない。

大通りを歩いていくと、校門の前になにやら人が集まっている。ブラカードやら横断幕やらを掲げて怒鳴っている五十人ほどの集団を見て、孝は顔をしかめた。「おいおい……」

集団の先頭に立つじいさんが、校門で教師二人と話している。「ですから、こんなところに来てもらっても困るんですよ」

「あんたらが困るかどうかなんぞ知らん！ いいからSDFの武器庫の鍵をよこせ言うてる」 じいさんが飛び掛りそんな勢いでまくしたてる。

「わたしたちにはそんな権限はありませんし、そういうことは国に訴えて下さい」

「ええい、国が耳貸さんからこうして直談判に来とるんじやろうが。さっさとSDFは武装解除して解散せんかい！」

「ですから、そういうのは……」

次々と校門を通過する生徒たちは完全にひいている。孝もそれまぎれて校舎に向かおうとしたが、突然肩を背後から掴まれた。「はい？」

じいさんだった。「おい、SDFの武器庫に案内してくれんか」

孝の制服にSDF徽章とSST徽章がついていたからだろう。「え、でも……」

「いいから黙って案内してくれ」

「武器庫に行つてどうするんです？」 孝はじいさんを見据える。

「きまつとる、武器庫を封鎖するんじゃ」

「でも、その間に襲撃されたらどうするんです」

「なにバカなことを言つとる。SDFが銃もつとるから戦闘になるんじゃ。SDFが武装解除すれば戦闘は起こらん」

某左翼政党の掲げる、無責任な平和論と同じ理屈だった。

「戦闘にはならないかもしれませんが、罪も無い学生が人質になりますね」

「死人が出るよりええわ」

「人質に危害が及ばないつていう保証がありますか？」

学生の自由を守る組織を自称するFDTとはいえ、どだい無法組織だ。信念も無く、ただ銃がほしいからというだけの理由でFDTに参加する高校生も実際にはいる。そんな危険人物が、人質となった学生に何をするかは知れたものじゃない。

「あなたの孫が人質になつてもおかしくないんですよ」 そう言う
と、じいさんは明らかに表情を変えた。両手の拳を握り締め、孝を
睨み据える。「わしの……」

「わしの孫は三日前の事件で殺されたんじゃ！」

まだじいさんは何か反論してきそうだったが、教師の一人が孝に言った。「緒方、もうすぐ始業だから教室にいきなさい」

「分かりました」 不機嫌そうなじいさんに一瞥をくれてから、生徒玄関に向かった。

始業直前だったので、SST室にはテツしかいなかった。孝は武器庫に入り、自分のラックからシグザウアーP226自動拳銃とマガジン、特殊警棒を取り出した。P226にマガジンを入れ、スライドを引く。初弾が装填されたP226をデコックし、孝はそれを見つめた。

銃。火薬によって弾丸を高速で撃ちだし、対象を殺傷する武器。結局、これはなんなのか。殺す道具なのか、守る道具なのか。いや、殺すことで守る道具、というのが正確か。とはいえ、使う者によっては単なる虐殺の道具にもなりうる。全員が持たなければ何の害も無いが、一部が持てば、持つ者が持たない者を脅かすことになる。つまり、平等を保つには、一部が持ったなら、全員が持たなければならぬ。それか、持つ者は法でその使用を規制されなければならぬ。

最も効果的な方法は、最初から持たせないことだ。この国はそれに失敗した。それだけのことだった。

校門前の抗議団体は、昼休みが終わって五時限目が始まる頃には百人近くまで増えていた。

「SDFは、解散しろ!」「学生の武装を許すな!」「学生の殺人を許すな!」

百人の大合唱は、当然ながら教室内にも響き続けた。

だが、春休み前には、また静かな授業環境が戻ってきていた。孝にとって、あつという間の一年間だった。

> i 8 2 3 1 | 1 1 4 5 <

最終話：逆風の中で（後書き）

遅くなって申し訳ありません。

読んでいただきありがとうございます。

続編「高校内乱」(<http://ncode.syosetu.com/n9680q/>)「連載開始しました」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0275h/>

高校戦争

2011年9月30日03時29分発行